HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	[展示]「宮澤・レーン事件」80周年特別展 : 事件をめぐる‘出会い’と‘絆’をたどる
Author(s)	井上, 高聡//解題
Citation	北海道大学大学文書館年報, 17, 97-160
Issue Date	2022-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85377
Type	other
File Information	4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

＜展　示＞

「宮澤・レーン事件」80周年特別展
～事件をめぐる‘出会い’と‘絆’をたどる～

1.「宮澤・レーン事件」80周年特別展について

2021年12月４日から2022年１月30日まで、北海道大学総合博物館の１階企画展示室を会場として､北海道大学総合博物館・大学文書館の主催､「宮澤・レーン事件を考える会」（代表幹事：山本玉樹氏、唐渡興宣氏）の協力により、「宮澤・レーン事件」80周年特別展を開催した。

「宮澤・レーン事件」は、1941年12月８日、アジア・太平洋戦争開戦の日、特別高等警察が北海道帝国大学工学部２年宮澤弘幸と、予科英語教師ハロルド・レーン、ポーリン・レーンの夫妻を検挙した事件である。宮澤がレーン夫妻に軍事機密を漏らし、レーン夫妻がアメリカ大使館関係者に伝えたとする軍機保護法違反の容疑であった。３人は裁判で懲役刑の判決を受け、レーン夫妻はその後アメリカ送還となるが、宮澤は終戦まで獄中生活を送り、釈放後、27歳で病死した。1987年、弁護士上田誠吉が著書『ある北大生の受難　国家秘密法の爪痕』（朝日新聞社）で３人が冤罪であると指摘し、以降、冤罪事件として広く知られるようになった。

「宮澤・レーン事件」80周年特別展は、事件から80周年にあたり、資料から事件とその現代的な意味をたどる内容である。また、30年以上にわたり、兄宮澤弘幸の名誉回復を訴え、「宮澤・レーン事件」を語りつぐための活動を続けた秋間美江子氏が、2020年10月25日、アメリカ・コロラド州ボルダーで逝去された。秋間氏を偲ぶことも展示の開催の趣意である。展示は以下の構成によった。

Ⅰ．北大予科英語教師ハロルド・レーン、ポーリン・レーン
Ⅱ．北大生宮澤弘幸の青春
　（1）文芸活動　（2）外国人教師たちとの交流　（3）時代と社会への眼差し
Ⅲ．「宮澤・レーン事件」
Ⅳ．それぞれの戦後
　（1）宮澤弘幸、再起の日々　（2）レーン夫妻の再来日
Ⅴ．現代から見る「宮澤・レーン事件」
　（1）弁護士上田誠吉による冤罪の告発　（2）北海道大学の取り組み
　（3）市民の視点から問い直す

展示は、資料86点、解説・写真パネル33点により構成した。会期中、総合博物館への入場者数は10,720人であった。

２．展示ちらし・展示風景





展示ちらし（表・裏）



展示風景Ⅰ・Ⅱ



展示風景Ⅱ・Ⅲ



展示風景Ⅲ・Ⅳ



展示風景Ⅳ

3.「宮澤・レーン事件」80周年特別展の展示資料目録

Ⅰ. 北大予科英語教師ハロルド・レーン、ポーリン・レーン

ハロルド・メシー・レーン（Harold Macy Lane、1892–1963年）は、アメリカに生まれ、ハヴァフォード大学などで人文学を学んだ。第一次世界大戦時にはクエーカーとして「良心的兵役拒否」の信念を貫いた経験を持つ。来日して1921年８月から北海道帝国大学予科英語教師となり、1922年にはポーリン・ローランドと結婚した。レーン一家が住む大学構内の外国人官舎には、予科生ら教え子が頻繁に訪れた。宮澤弘幸もそのような教え子の一人であった。

ポーリン・レーン（Pauline Rowland Sistare Lane、1892–1966年）は、宣教師ジョージ・ローランドの娘として京都に生まれ、父の札幌赴任に伴い４歳からは札幌で育った。日本・アメリカの学校・大学を卒業後、日本の中学校などで英語を教え、1937年９月からは夫ハロルドと同じく北大予科英語教師を務めた。日本人同様に日本語を話し、日本の文化と日本人を理解し、多くの学生・市民に親しまれた。



レーン夫妻



宮澤弘幸とH.レーン

Ⅰ–01	H. M. Lane, “Theses”（1914年） 大学文書館蔵
H.レーンの論文草稿集。イギリスの小説家C.ディケンズを題材とした論文、ハヴァフォード大学に提出した歴史論文などの下書きを製本している。	
Ⅰ–02	H. M. Lane, “Hokkaido Imperial University History”（1926–1927年） 大学文書館蔵
『創基五十年記念　北海道帝国大学沿革史』の英訳稿にH.レーンが筆を入れている。	

Ⅰ-03	『創基五十年記念　北海道帝国大学沿革史』（1926年）
	大学文書館蔵
前身校札幌農学校開校（1876年）から50周年の1926年に北海道帝国大学が刊行した大学沿革史。農学部教授中島九郎（1886-1959年）が執筆した。	
Ⅰ-04	H. M. Lane, “Archaeology Notes”（1928年）
	附属図書館蔵
H.レーンの「考古学ノート」。	
Ⅰ-05	H. M. Lane, “Relations between English and Spain from the Beginning of the Regina of Queen Elizabeth to the Time of Armada”（1929年）
	附属図書館蔵
1929年３月にH.レーンがハヴァフォード大学に提出した論文「エリザベス女王期の始まりから無敵艦隊の時代に至るイギリスとスペインの関係」の原稿。	
Ⅰ-06	H. M. Lane, “The ‘Japanese Exclusion’ Clause of the Immigration Act of 1924, with Special Reference to Editorial Comment thereon, both Japanese and American”（1929年）
	附属図書館蔵
1929年５月、H.レーンがハヴァフォード大学に提出した修士論文「1924年移民法の日本人排斥条項、日米両国の社説を参考にして」。	
Ⅰ-07	*Historical Sketch of Agricultural College of Tohoku Imperial University*（1915年）
	大学文書館蔵
北大の前身東北帝国大学農科大学の英文紹介冊子。著者の予科英語教師ポール・ローランドはP.レーンの兄。W.S.クラークの言葉について、「“be ambitious”は富や私欲、名声という空しいもののためではない。知識と公正さとすべての人々の向上のため、人としてそうあるべき目標に達するためである。」と解釈している。	
Ⅰ-08	ポーリン・ローランドが作詩した“Song to Hoku Chu”（1917年）
	『協学会雑誌』第15号（1917年１月）／北海高等学校蔵
1916年から、ハロルドと結婚した翌年1923年まで、P.レーンは北海中学校（現在の北海高等学校）の英語教師であった。北海中学校の校友会誌『協学会雑誌』第15号は巻頭に、ポーリン・ローランドが作詩した「北中への歌」を掲載している。	
Ⅰ-09	齋藤初恵に宛てたP.レーンの手紙（1926年７月10日）
	大学文書館蔵
P.レーンは北海道庁立札幌高等女学校生徒齋藤初恵（1910-1998年）の英語の家庭教師を務めていた。齋藤はたいへん英語が堪能であった。	

Ⅱ．北大生宮澤弘幸の青春

宮澤弘幸（1919-1947年）は東京に生まれ、1937年４月に北海道帝国大学予科工類に入学、1940年４月に工学部電気工学科に進学した。在学中、詩作品を投稿し、弁論部に所属するなど文芸活動に熱心であった。また、レーン夫妻、予科ドイツ語教師ヘルマン・ヘッカー（Helmann Hecker、1881-1967年）、小樽高等商業学校フランス語教師太黒マチルド（Mathilde Oguro、1902-1975年）、アイヌ人類学を研究するイタリア人留学生フォスコ・

マライーニ（Fosco Maraini、1912–2004年）らと親しく、英語・ドイツ語・フランス語・中国語など語学に通じた。特にF.マライーニとはよく登山へ出掛け、アイヌへ関心を向けるなど様々な影響を受けた。宮澤はこうした外国人教師やそのもとに集まる学生たちと共に、1939年6月、「ソシエテ・デュ・クール」（「心の会」）を開き、週1回外国語で講義や議論をするなど、国際性に富んだ友好を育んだ。また、「満州」や樺太、千島なども巡り、満鉄調査団、海軍工事、陸軍戦車学校講習に参加するなど行動力に溢れる学生であった。



F.マライーニと宮澤弘幸



樺太の大泊港にて（1939年7–8月）

（1）文芸活動	
Ⅱ–01	1937年度北海道帝国大学予科合格者を伝える『北海道帝国大学新聞』（1937年）
	『北海道帝国大学新聞』（1937年4月6日）／大学文書館蔵
宮澤弘幸は予科工類に合格した。予科工類合格は12倍の難関であった。宮澤が受けた入試問題も掲載している。	
Ⅱ–02	宮澤弘幸「真理は時に嘆く」（1938年）
	『桜星会雑誌』第46号（1938年7月）／大学文書館蔵
宮澤弘幸が予科2年の時に予科文芸部の雑誌『桜星会雑誌』第46号に発表した詩。宮澤は詩や散文の創作を好み、旧蔵アルバムにも写真に添えて書き込んでいる。	
Ⅱ–03	『桜星会雑誌』第47号「編輯後記」（1938年）
	『桜星会雑誌』第47号（1938年11月）／大学文書館蔵
掲載はならなかったが、宮澤弘幸は『桜星会雑誌』第47号にも「山の詩」ほか1編の詩を投稿した。	
Ⅱ–04	弁論部での活動を伝える『桜星会会報』（1939年）
	『桜星会会報』第3号（1939年3月）／大学文書館蔵
宮澤弘幸が予科2年時に所属した弁論部の活動記録。宮澤は「宗教に対する一私見」、「美を見凝めて」、「不思議な話」などの講演を行なった。	
Ⅱ–05	宮澤弘幸の文武会理事就任を伝える『北海道帝国大学新聞』（1938年）
	『北海道帝国大学新聞』（1938年12月20日）／大学文書館蔵
「文武会」は北海道帝国大学の全学生が所属する課外活動団体。宮澤弘幸は理事に就任した。	

(2) 外国人教師たちとの交流	
Ⅱ-06	H. Hecker, “Sapporo Symphonie Orchester”（1940年）
	大学文書館蔵
H.ヘッカーの自筆原稿。北大生が1921年に結成した「札幌交響楽団」は、1940年に自主解散が決まり、12月10日に最終演奏会を実施した。H.ヘッカーは最終演奏会を聞き、その感想と楽団への感謝を記した文章を1940年12月17日付け『北海道帝国大学新聞』に寄稿した。	
Ⅱ-07	『北大季刊』第２号（1952年）へのH.ヘッカーの寄稿
	『北大季刊』第２号（1952年５月）／大学文書館蔵
『北大季刊』は北海道大学の教員・職員を中心とした関係者が寄稿・発刊した文芸誌。H.ヘッカーはたびたびドイツ語文を寄稿した。第２号には“Heimaterinnerungen”を寄稿、同僚の井手貢夫教授による日本語訳「ふるさとの思い出」と共に掲載されている。	
Ⅱ-08	H. Hecker, *Über Homers Ilias*（1962年）
	附属図書館蔵
H.ヘッカーのドイツ語著書『ホーメロスのイーリアス』（1962年12月）。H.ヘッカーの80歳記念に際し北海道大学関係者が中心となって刊行の労を取った。	
Ⅱ-09	H.ヘッカー追悼号として刊行された『北大季刊』第30号（1968年）
	『北大季刊』第30号（1968年１月）／大学文書館蔵
H.ヘッカーは1967年４月20日、85歳で逝去した。1968年１月刊行の『北大季刊』第30号はH.ヘッカー追悼号となり、多くの教え子、同僚、親族が寄稿した。	
Ⅱ-10	ヘルマン・ヘッカー先生像
	百年記念会館蔵
1977年に彫刻家木田明二が制作した木彫作品。公私においてH.ヘッカーと深い親交のあった滝沢義郎名誉教授夫妻から1986年に寄贈を受けた。	
Ⅱ-11	あてね・さっぽろフランス語講習会趣意書（1940年）
	宮澤弘幸旧蔵アルバム／大学文書館蔵／複製展示
教養としてのフランス語研鑽を掲げて発会した。太黒マチルドが顧問、宮澤や友人の大條正義、松本照男など「ソシエテ・デュ・クール」（心の会）のメンバーが講師に名を連ねている。	
Ⅱ-12	太黒マチルド「札幌半世紀」（1968年）
	『北方文芸』創刊号（1968年１月）／大学文書館蔵
太黒マチルドは『北方文芸』創刊号に回想を掲載し、戦時中に憲兵に監視されながらも小樽高商に通ったことなどを記している。『北方文芸』は北海道大学文学部教授小笠原克が編集した地方文芸誌。	
Ⅱ-13	F.マライーニ『チベット』（1942年）
	附属図書館蔵
1937年に東洋学者G.トゥッチに同行したチベット探検の旅行記。自ら撮影した写真を多数掲載している。日本語版は1942年７月に春鳥会から出版した。イタリア語原書表題は“Lontano Tibet”。	
Ⅱ-14	F. Maraini, *Gli iku-bashui dogli Ainu.*（1942年）
	附属図書館蔵
F.マライーニは1942年、日本留学中の研究成果をイタリア語論文『アイヌのイクパスイ』としてまとめた。イクパスイはアイヌ民族が儀式で使用する酒べら。装飾や機能からイクパスイの役割を考究している。	

Ⅱ-15	F. Maraini, *Meeting with Japan.*（1959年）
	附属図書館蔵
F.マライーニの日本文化についての英語版エッセイ『日本との出会い』。東京、京都、奈良、名古屋などを取り上げている。1959年刊行。	
Ⅱ-16	F.マライーニ「アジアにおけるイタリア人の旅行者」（1970年）
	大学文書館蔵
1970年大阪万国博覧会の「イタリア館」プログラムに寄せた文章。F.マライーニは「イタリア館」の副館長を務めた。	
Ⅱ-17	宮澤弘幸が届け出た「支那語講習会」（1938年12月2日）
	「集会届一覧　昭和十一年九月起」（帝大／2016／0429）／大学文書館蔵
大学内の学生生徒控所８号室で中国語講習会を開催することを届け出ている。講師には中国人留学生があたった。	
(3) 時代と社会への眼差し	
Ⅱ-18	宮澤弘幸の工学部「学科志望願書」（1940年２月15日）
	「昭和拾五年度入学関係書類　北海道帝国大学工学部庶務係」（工／2010／0114）／大学文書館蔵
予科を修了後に1940年４月から工学部へ進学するに際し宮澤弘幸が提出した「学科志望願書」。第一希望の電気工学科に進学する。電線技術者であった父親と同じ分野であった。	
Ⅱ-19	満鉄主催学生懸賞論文の当選通知（1940年７月18日）
	宮澤弘幸旧蔵アルバム／大学文書館蔵／複製展示
宮澤弘幸は、満鉄（南満洲鉄道株式会社）が主催した学生懸賞論文に応募し当選、満鉄の招聘による「満州」視察旅行に出かけた。当選した論文は旅行後に改稿し、満鉄が発行する雑誌『満洲グラフ』に連載した。	
Ⅱ-20	宮澤弘幸「満洲を巡って（一）」（1940年）
	『北海道帝国大学新聞』1940年11月12日／大学文書館蔵／複製展示
宮澤弘幸は1940年８月、満鉄の招待で「満州」を回る旅行をした。羅津（現北朝鮮の東端、日本海に面する港湾都市）から出発した。『北海道帝国大学新聞』に掲載。	
Ⅱ-21	宮澤弘幸「満洲を巡りて（二）――旅行メモより」（1940年）
	『北海道帝国大学新聞』1940年11月26日／大学文書館蔵／複製展示
「満州」移民団の様子を中心に視察している。日本人小学校が立派であるのに対し「満人小学校」が粗末である点を批判的に指摘している。『北海道帝国大学新聞』に掲載。	
Ⅱ-22	宮澤弘幸「満洲を巡りて――旅行メモより」（1940年）
	『北海道帝国大学新聞』1940年12月17日／大学文書館蔵／複製展示
視察旅行のまとめとして、「満州」開発における北大出身者の責任の大きさ、日本国家が高調する「民族協和」が現地では容易な問題ではないことを指摘している。『北海道帝国大学新聞』に掲載。	
Ⅱ-23	満鉄招聘学生満洲調査団の報告会通知（1940年12月）
	宮澤弘幸旧蔵アルバム／大学文書館蔵／複製展示
満鉄が主催した「満州」視察旅行参加学生による報告会の日程。宮澤弘幸は視察旅行で撮影した写真と共にアルバムに貼付して保存していた。	

Ⅱ-24	宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（一）」（1941年）
	『満洲グラフ』第９巻第５号（1941年５月）／大学文書館蔵
満鉄主催「満州」視察旅行のための応募論文に、視察旅行後の見聞を加筆して投稿した論文。４回にわたる連載となった。「序」で「満鉄はもはや南満州の鉄道会社ではなくして、亜細亜の鉄道省たるべきである」との問題意識を提示している。『満洲グラフ』に掲載。	
Ⅱ-25	宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（二）」（1941年）
	『満洲グラフ』第９巻第６号（1941年６月）／大学文書館蔵
東京－バンコク、大連－ハルビン、奉天－バグダッド、ハノイ－カシュガル、ハノイ－カルカッタといった路線を有する「亜細亜大陸一貫鉄道計画」の構想を記述している。『満洲グラフ』に掲載。	
Ⅱ-26	宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（三）」（1941年）
	『満洲グラフ』第９巻第７号（1941年７月）／大学文書館蔵
大陸一貫鉄道を全線電化による計画を唱え、電力資源の確保策を記述している。『満洲グラフ』に掲載。	
Ⅱ-27	宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（四）」（1941年）
	『満洲グラフ』第９巻第８号（1941年８月）／大学文書館蔵
全線電化の理由として石炭節約、保守費軽減等を掲げ、まとめとして大陸一貫鉄道計画に伴う諸問題を論じている。『満洲グラフ』に掲載。	
Ⅱ-28	宮澤弘幸「開拓風景　朝から朝まで」（1941年）
	『満洲グラフ』第９巻第１号（1941年１月）／複製展示
東京の大学生久保が「満州」で卒業論文の調査を終えた後、知人が移民として入植した村を訪ねるという創作小品。「満州」の曠野に憧れる宮澤の心情を反映している。『満洲グラフ』に掲載。	
Ⅱ-29	陸軍戦車学校における訓練（1941年3-4月）
	宮澤弘幸旧蔵アルバム／大学文書館蔵／複製展示
宮澤弘幸は、1941年３月26日～４月８日、大日本機械化義勇団が主催する千葉陸軍戦車学校における講習会に応募、参加した。その際の日程、心得通知文書。参加した際の写真と共にアルバムに貼付していたもの。	
Ⅱ-30	陸軍戦車学校での記念撮影（1941年３月）
	宮澤弘幸旧蔵アルバム／大学文書館蔵／複製展示
Ⅱ-31	宮澤弘幸「戦車を習ふ」（1941年）
	『北海道帝国大学新聞』（1941年６月10日）／大学文書館蔵
1941年3-4月の陸軍戦車学校の講習会の参加記。戦車を操縦した感想として「人間らしい呑気さなどはてんで認められない」、「頑固冷酷な鉄、鉄、鉄の世界」「学生らしさなど消し飛んでしまふ」などと記している。『北海道帝国大学新聞』掲載。	
Ⅱ-32	「大本営」看板（1936年）
	総合博物館蔵／撮影画像展示
1936年10月、陸軍が北海道で特別大演習を行ない、昭和天皇が来学した。北海道帝国大学農学部本館が「大本営」、「行在所」となった。その際に使用した看板。	
Ⅱ-33	「大本営」となった農学部本館の写真（1936年）
	大学文書館蔵／複製展示
「大本営」となった農学部本館前には、臨時に柵を設置して守衛を配置している。	

Ⅱ-34	「聖蹟碑」除幕式の写真（1937年）
	大学文書館蔵／複製展示
1937年４月29日、前年の陸軍特別大演習の際の昭和天皇行幸を記念して、北大は「聖蹟碑」を設置した。宮澤弘幸が北大予科に入学後間もない時期である。中央は式辞を読む今裕総長。	

Ⅲ.「宮澤・レーン事件」

1941年12月８日、特別高等警察が外諜容疑者の全国一斉検挙を行ない、その中に宮澤弘幸とレーン夫妻も含まれた。宮澤が旅行中に見聞きした港・灯台・飛行場・工場などの「軍事上の秘密」を「探知」して旅行談中でレーン夫妻に「漏洩」し、レーン夫妻がそれを「探知」してアメリカ大使館に「漏洩」したとする、軍機保護法違反の嫌疑であった。1942年12月の一審判決はハロルドと宮澤が懲役15年、ポーリンが12年であった。1943年５、６月に上告棄却、刑が確定した。外諜事件では死刑判決が下った「ゾルゲ事件」に次ぐ重刑であった。

レーン夫妻は、1943年９月、日米交換船によりアメリカへ送還された。宮内大臣を父、秩父宮妃を妹に持つ松平一郎（横浜正金銀行サンフランシスコ支店）との交換であったとの説がある。一方、宮澤弘幸は、起訴直前の1942年４月１日に北大工学部へ「退学願」を提出した。余儀なくされた退学であった。判決確定後、1943年６月に網走刑務所に収監されたが、栄養失調と極寒の過酷な獄中生活が宮澤の体を蝕んだ。病舎に入った後、1945年６月に仙台の宮城刑務所に移送され、８月15日の終戦を迎えた。GHQ の指令に基づき日本政府が宮澤を釈放するのは10月10日のことである。

Ⅲ-01	アジア・太平洋戦争開戦を伝える『北海道帝国大学新聞』（1941年）
	『北海道帝国大学新聞』（1941年12月16日）／大学文書館蔵
今裕北大総長が訓示をする様子を伝え、アジア・太平洋戦争開戦を報じている。	
Ⅲ-02	村田豊雄「北工会四十年史」（1965年）
	『北工会誌』第28号（1965年１月）／大学文書館蔵
事件当時、工学部事務職員であった村田豊雄が聞き知った「宮澤・レーン事件」の状況を回想している。	
Ⅲ-03	P. Lane, “Prison Life in Japan”（1947年）
	Middlebury College News Letter 1947-01-01／ミドルベリー大学蔵／複製展示
戦後、Ｐ.レーンが母校ミドルベリー大学のニュースレターに掲載した「日本での監獄生活」と題した回想。ポーリンが昼食中に検挙されたこと、拘留中に警察署長や看守などが親切であったことなどを記している。「宮澤・レーン事件を考える会」が翻訳を作成している。	
Ⅲ-04	宮澤弘幸の「退学願」（1942年４月１日）
	「入学　退学　休学　卒業ニ関スル書類　自昭和十七年至昭和十九年」（工／2013／0011）／大学文書館蔵
宮澤弘幸自筆の「退学願」。当時宮澤は札幌拘置所に拘束されており、自身の意思であるかは疑わしく、不明である。北大工学部は５月初旬までに願を受理し、４月１日に遡って「退学許可」の事務手続きを踏んだ。	

Ⅲ-05	宮澤弘幸判決書のコピー（1943年）
	上田誠吉旧蔵資料0001／大学文書館蔵
大審院（現最高裁判所）の判決書。これにより懲役15年の判決が確定した。判決書コピーは弁護士上田誠吉が「宮澤・レーン事件」を問い直す際に収集した資料である。多くの付箋、書き込みがなされている。	
Ⅲ-06	ハロルド・レーン判決書のコピー（1943年）
	上田誠吉旧蔵資料0003／大学文書館蔵
大審院の判決により懲役15年の判決が確定した。宮澤やレーン夫妻への量刑の重さは、同種の諜報・諜略活動の疑いによりR.ゾルゲや尾崎秀実が死刑判決を受けた「ゾルゲ事件」に次ぐ内容であった。	
Ⅲ-07	ポーリン・レーン判決書のコピー（1943年）
	上田誠吉旧蔵資料0005／大学文書館蔵
大審院の判決により懲役12年の判決が確定した。	
Ⅲ-08	レーン夫妻のアメリカ送還の経緯に言及する『日米交換船』（2006年）
	鶴見俊輔・加藤典洋・黒川創『日米交換船』（2006年３月、新潮社） 上田誠吉旧蔵資料1080／大学文書館蔵
1943年９月、レーン夫妻は「日米交換船」でアメリカへ送還された。レーン夫妻や娘姉妹の送還経緯などにも言及している。著者の鶴見俊輔も交換船帰国者の一人。	
Ⅲ-09	レーン夫妻の娘姉妹のアメリカ送還に言及する『嵐の中を』（1991年）
	コーネリア＆ギルバート・シュレーヤ『嵐の中を』（1991年６月、日本基督教団出版局） ／宮澤・レーン事件を考える会提供
岩手県盛岡の宣教師シュレーヤ夫妻が戦時下の日本での体験を回想した本。日米交換船でレーン夫妻の娘姉妹と出会ったこと、日本語しか解さない姉妹が両親と離れアメリカへ送還される事態の深刻さなどを記している。	
Ⅲ-10	レーン夫妻の娘姉妹の証言による Katherine F. Berry 記者の記事（1943年）
	宮澤・レーン事件を考える会提供／複製展示
当時11歳のレーン夫妻の娘姉妹のよる証言をまとめた記事。1943年秋、マサチューセッツ州ウスターの日刊紙“Worcester Telegram”の掲載記事と思われる。事件当日や日米交換船による送還中の姉妹の様子が分かる。「宮澤・レーン事件を考える会」が翻訳を作成している。	

Ⅳ．それぞれの戦後

GHQが日本政府に対し国民の人権を侵害する法律の廃止を命じた1945年10月４日の指令に基づき、10月10日、宮澤弘幸は宮城刑務所から釈放された。獄中生活で蝕まれた宮澤の体調は、家族の献身的な介抱により少しずつ快方に向かった。1945年12月８日、宮澤は北大工学部に「復学願」を提出し、さらにアメリカ留学を見据えた。しかし、宮澤の体は完治せず、肺結核を悪化させ、1947年２月22日、北大復学も留学も果たせず、27歳の若さで逝去した。

一方、アメリカ送還後、ボストン郊外で暮らしていたレーン夫妻は1951年３月に再来日し、ハロルドが４月１日から北海道大学一般教養部の英語担当外国人教師に就任した。ハ

ロルドは、教養部の英語を担当したほか、海外留学・研修、英語論文やサマリーの添削などに支援や助言を惜しまなかった。妻ポーリンは、札幌の中学校・高校などで英語教育に携わり、所属する北光教会のボランティア活動や子どもの英語教室にも積極的であった。外国人教師官舎のレーン宅には、戦前同様に北大生や卒業生、地域の人々が集った。

1963年８月、ハロルドが急逝すると、ハロルドの退職記念事業を企画していたレーン先生夫妻謝恩記念事業会とポーリンは、事業の資金を北海道大学教養部の学生を対象とする「レーン奨学金」に充てた。現在は、英語成績優秀者を表彰する「レーン記念賞」として続いている。

1966年７月にポーリンが逝去した後、レーン家は旧蔵書を「レーン文庫」として教養部に寄贈した。現在は附属図書館が引き継ぎ、北図書館に「レーン文庫」の開架コーナーを設けている。



Ｆ.マライーニの子女を迎える宮澤弘幸と家族
（1946年１月23日）



北大創基80周年に来日したW.Ｓ.クラークⅡ世夫妻を迎える杉野目晴貞学長とレーン夫妻
（1956年）

(1) 宮澤弘幸、再起の日々	
Ⅳ-01	宮澤弘幸の宮城刑務所入出所年月日を記した文書（1987年２月24日） 上田誠吉旧蔵資料0096／大学文書館蔵
宮澤は網走刑務所収監の後、獄中の劣悪な環境に病を得て病舎に入り、後に宮城刑務所に移され終戦を迎えた。弁護士上田誠吉の調査により、宮城刑務所には1945年６月25日に入所し、10月10日に釈放になったことが分かった。	
Ⅳ-02	宮澤弘幸の「復学願」（1945年12月８日） 「退学　休学　入学　卒業関係　自昭和二十年四月至〃二十一〃〃　工学部」 （工／2013／0012）／大学文書館蔵
宮澤弘幸は1945年10月10日の釈放後、４年前に検挙された同じ日付である12月８日に自筆の「復学願」を北海道帝国大学工学部に提出した。再起への強い意思が感じられる。大学は12月21日付けで復学の事務手続きを行なった。	

Ⅳ-03	宮澤弘幸死去による「退学」の手続き文書（1948年１月）
	「休学　退学　復学伺簿　昭和廿三年度以降　工学部教務係」（工／2013／0019）／大学文書館蔵
宮澤弘幸は北大に復学したもの、劣悪な獄中生活で崩した体調が十分戻らず、来学することのないまま、1947年２月22日に逝去した。北大工学部は1948年１月に宮澤逝去の報を受け、「死亡による退学」の事務手続きをとった。	
(2) レーン夫妻の再来日	
Ⅳ-04	レーン夫妻からのクリスマスカード（1957、1958、1961、1962年）
	杉岡昭子氏、青木ミツ氏提供
レーン夫妻の連名で教え子、友人、知人などに毎年、クリスマスカードを送っていた。	
Ⅳ-05	杉岡昭子氏に宛てたP.レーンの手紙（1963年６月18日）
	杉岡昭子氏提供
杉岡昭子氏は当時北海道学芸大学（現在の北海道教育大学）附属中学校教師。「北海道学芸大学付属札幌小中学校」用紙を使用している。	
Ⅳ-06	留学中の杉岡昭子氏に宛てたP.レーンの手紙（1965年５月23日）
	杉岡昭子氏提供
アメリカ留学中の杉岡氏に宛てた手紙。エアメール封筒の表裏いっぱいに書き綴っている。	
Ⅳ-07	H.レーンの逝去を伝える『北海道大学新聞』（1963年）
	『北海道大学新聞』（1963年９月10日）／大学文書館蔵
H.レーンは北大退職を控え、在職のまま逝去した。記事は北大の寮歌やエンレイソウを模した校章をたいへん好んだエピソードを紹介している。	
Ⅳ-08	H.レーンの葬儀順序（1963年８月10日）
	大学文書館蔵
H.レーンは1963年８月７日、70歳で逝去した。札幌北光教会での葬儀では杉野目晴貞北大学長が大学代表、三田村健太郎農学部教授が友人総代として弔詞を読んでいる。	
Ⅳ-09	P.レーン葬儀順序（1966年７月18日）
	大学文書館蔵
P.レーンは1966年７月16日、73歳で逝去した。葬儀は札幌北光教会で行なった。	
Ⅳ-10	*Catalogue of the Library of Harold M. Lane*（1967年）
	大学文書館蔵
1967年、北海道大学はレーン家から旧蔵書の寄贈を受け、教養部に「レーン文庫」を設置した。その後、附属図書館が所蔵し、現在は北図書館にレーン文庫の開架スペースを設けており、手に取って読むことができる。	

Ⅳ-11	レーン文庫蔵書
	D. S. Muzzey, *A History of Our Country ： a Textbook for High-school Students* A. Conan Doyle, *Tales of Sherlock Holmes* *The Royal Prince Readers* R. H. Blyth, *Haiku* Charles Dickens, *The Posthumous Papers of the Pickwick Club* *The Poetical Works of Alfred Tennyson ： Poet Laureate*／附属図書館蔵
英米文学、歴史、伝記、アジア事情などの分野の英書が多い。ハロルドの研究テーマであったイギリスの小説家C.ディケンズ関係が目立つ。また、ポーリンの兄P.ローランドの署名のある英語学習用図書もある。英語講義のテキストとして使用した蔵書には細かい書き込みがあり、使い込んだ様子を覗わせる。	
Ⅳ-12	レーン記念賞賞状
	北海道大学蔵
1、2年生が在籍する教養部の廃止（1995年）に伴い、「レーン奨学金」は、1996年から英語成績優秀者を表彰する「レーン記念賞」へと改まった。	
Ⅳ-13	レーン記念賞メダル
	北海道大学蔵
レーン記念賞受賞者にはH.レーンの肖像をかたどったメダルを授与する。	

Ⅴ. 現代から見る「宮澤・レーン事件」

戦後の重大事件の多くの裁判に携わってきた弁護士上田誠吉（1926-2009年）は、著書『戦争と国家秘密法』（1986年）で「宮澤・レーン事件」に触れ、それをきっかけに宮澤弘幸の実妹秋間美江子氏（1927-2020年）と出会い、事件の解明に取り組んだ。その成果として出版した著書『ある北大生の受難』（1987年）、『人間の絆を求めて』（1988年）により、「宮澤・レーン事件」は冤罪事件として広く知られるようになった。

上田との出会いを契機に、秋間美江子氏は「宮澤・レーン事件」の事実を社会に訴える活動を始めた。秋間氏との対話の中で、北海道大学は「宮澤・レーン事件」に関する資料の調査と収集を行ない、報告書・論考等を作成して、展示等でその成果を公開した。また、国際意識に富んだ宮澤弘幸の名を冠した「宮澤記念賞」を創設して、第二外国語成績優秀者に授与することとした。



秋間浩・秋間美江子夫妻と上田誠吉弁護士

秋間氏を支援する市民は、「北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会」や「宮澤・レーン事件を考える会」などを結成し、刊行物や書籍の発刊、集会や講演会の

開催、構成劇の上演などを通じ、事件を掘り起こし、語り継ぐ活動を続けている。

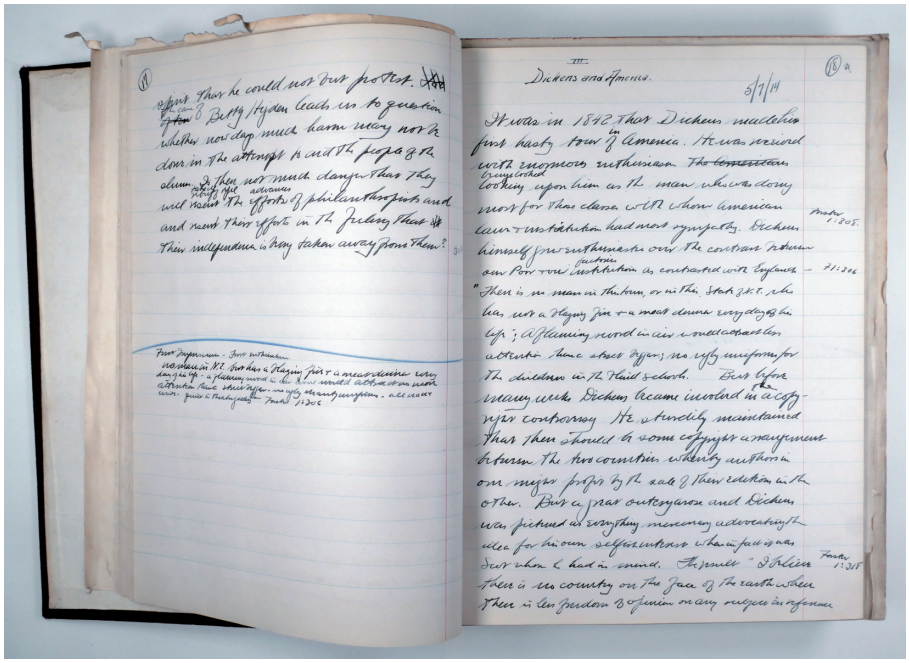
(1) 弁護士上田誠吉による冤罪の告発	
V-01	上田誠吉『戦争と国家秘密法』(1986年)
	上田誠吉『戦争と国家秘密法　戦時下日本でなにが処罰されたか』(イクォリティ、1986年２月)　上田誠吉旧蔵資料1072／大学文書館蔵
1980年代半ばに国会が「スパイ防止法案」の審議を行なった。弁護士上田誠吉は法律家の立場から反対の論陣を張り、戦時期に起きた「宮澤・レーン事件」などを例にその危険性を指摘した。	
V-02	上田誠吉に宛てた秋間浩の手紙（1986年11月９日）
	上田誠吉旧蔵資料0018／大学文書館蔵
『戦争と国家秘密法』で「宮澤・レーン事件」を取り上げていることを知り、宮澤弘幸の実妹秋間美江子の夫秋間浩が上田に手紙を送った。これを機に秋間夫妻と上田の交流と、事件の本格的な解明調査が始まる。	
V-03	秋間浩に宛てた上田誠吉の返信控え（1986年11月20日）
	上田誠吉旧蔵資料0020／大学文書館蔵
「宮澤・レーン事件」を取り上げた自著に、感想の手紙を寄せた秋間夫妻に感謝の念を述べている。	
V-04	『記録集　国家秘密法に反対する市民集会「宮澤事件の真実」』(1987年)
	上田誠吉旧蔵資料0327／大学文書館蔵
1987年７月９日、アメリカ在住の宮澤弘幸実妹秋間美江子が来日し、「宮澤・レーン事件」を取り上げた市民集会で「わが兄宮澤弘幸とわたし」と題した講演を行なった。事件当時の家族が置かれた環境や、戦後釈放された後の宮澤弘幸の様子などを証言している。ほかにF.マライーニがメッセージを寄せている。	
V-05	上田誠吉「M事件通信ファイルⅠ～Ⅲ」(1986年11月～1987年８月)
	上田誠吉旧蔵資料0015／大学文書館蔵
「宮澤・レーン」事件の徹底解明に乗り出した上田は、その日その日に明らかになったこと、疑問点、調査方針等を記述し、調査協力者・関係者と情報を共有した。	
V-06	上田誠吉ノート「宮沢事件研究」(1987年1-4月)
	上田誠吉旧蔵資料0014／大学文書館蔵
上田が「宮澤・レーン事件」についての調査内容等をメモしたノート。	
V-07	札幌地方裁判所宛て刑事事件確定判決閲覧謄写申請の控え（1987年１月27日）
	上田誠吉旧蔵資料0090／大学文書館蔵
上田は「宮澤・レーン事件」判決を復元するため、関係する裁判所、検察所、刑務所などに判決書の所在を照会し、徹底した調査を行なっている。	
V-08	札幌地方裁判所からの返信（1987年２月10日）
	上田誠吉旧蔵資料0092／大学文書館蔵
上田の照会に対し、札幌地方裁判所が判決原本等を保管していない旨を回答した返信。	

V-09	上田誠吉『ある北大生の受難』（1987年）
	上田誠吉『ある北大生の受難　国家秘密法の爪痕』（朝日新聞社、1987年９月） 上田誠吉旧蔵資料1073／大学文書館蔵
上田の「宮澤・レーン事件」への関心は、国家秘密法阻止のための歴史的教訓の一例であったが、秋間夫妻との出会いにより、事件の全貌解明調査へと移っていく。上田は本書で宮澤弘幸とレーン夫妻の冤罪を主張した。	
V-10	上田誠吉『人間の絆を求めて』（1988年）
	上田誠吉『人間の絆を求めて　国家秘密法の周辺』（花伝社、1988年７月） 上田誠吉旧蔵資料1074／大学文書館蔵
上田は、宮澤やレーン夫妻が豊かな人間関係を築いていたこと、また事件の解明調査を通じ自身も秋間夫妻や周囲の人々と交友を深めたことを、人間同士の絆を断つ国家権力のあり方に対置している。	
V-11	ラジオ番組リーフレット「落合恵子のちょっと待ってMONDAY」№25（1988年９月22日）
	上田誠吉旧蔵資料0647／大学文書館蔵
作家落合恵子がパーソナリティーを務める文化放送（ラジオ）の情報番組に、上田誠吉がゲストとして出演し、「宮澤・レーン事件」について語った。上田の著書はメディアでも話題になった。	
V-12	ビデオ『レーン・宮澤事件　もうひとつの12月８日』（1993年12月）
	上田誠吉旧蔵資料1108／大学文書館蔵
上田誠吉の著書を基に作成された「宮澤・レーン事件」紹介ビデオ。市民運動の集会などで上映された。	
V-13	岸本羊一『スキャンダラスな人びと』（1991年）
	岸本羊一『スキャンダラスな人びと　レーン夫妻スパイ事件と私たち』（新教出版社、1991年９月）／大学文書館蔵
戦時中に日本国家が異端視して排斥しようとする「スキャンダラスな人びと」の一例として「宮澤・レーン事件」を取り上げている。法律家の上田とはまた異なるクリスチャンの視点からも、事件の重大性を指摘している。	
V-14	上田誠吉に宛てた岸本羊一の手紙（1989年９月11、21日）
	上田誠吉旧蔵資料0862／大学文書館蔵
『スキャンダラスな人びと』執筆に当たり、著者岸本羊一が上田誠吉の著書を参考にしていると記している。	
(2) 北海道大学の取り組み	
V-15	論考、資料調査報告、寄贈資料目録を掲載した『北海道大学大学文書館年報』
	『北海道大学大学文書館年報』第５、６、７、９号（2010、2011、2012、2014年３月）／大学文書館蔵
大学文書館のスタッフがそれぞれの立場から、「宮澤・レーン事件」に関する論考、資料調査報告、寄贈資料目録を作成し、掲載した。「宮澤・レーン事件」を北海道大学の歴史として捉え、位置付けていくための取り組みである。	

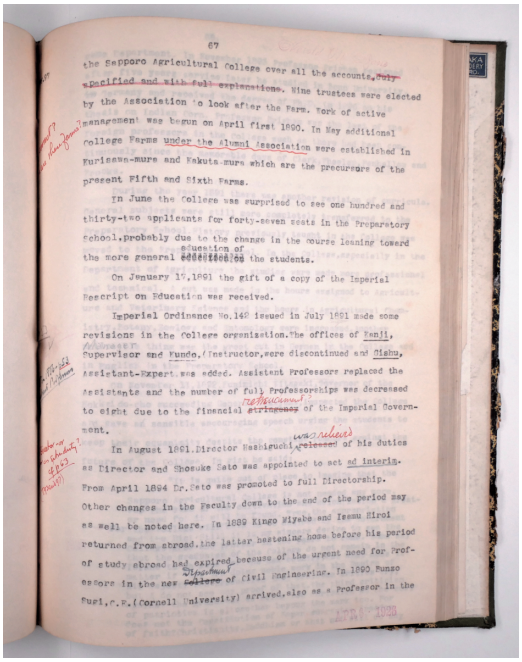
V−16	宮澤記念賞賞状
	北海道大学蔵
第二外国語の成績優秀学生に授与する賞。複数の外国語に堪能で、国際交流の意思に富んだ学生であった宮澤弘幸を顕彰する意図を込めて命名した。「宮澤・レーン事件」に関する北大の取り組みの一端である。宮澤の実妹秋間美江子から名前の使用について快諾を得た。	
V−17	レーン記念賞・宮澤記念賞の授与式を報じる『北大時報』（2015年）
	『北大時報』№736（2015年７月）／大学文書館蔵
2015年６月26日、第１回宮澤記念賞の授賞式を行なった。英語成績優秀者に授与するレーン記念賞と対をなす。	
(3) 市民の視点から問い直す	
V−18	「北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会」の刊行物
	大学文書館蔵
「北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会」は、2013年１月に発足した。秋間美江子の友人山野井孝有氏、上田誠吉の調査にも協力した山本玉樹氏が中心となり、秋間の訴えをサポートする活動を続けた。現在は、国家権力の暴走を批判する運動へと活動を広げている。	
V−19	「宮澤・レーン事件を考える会」の刊行物
	大学文書館蔵
「宮澤・レーン事件を考える会」は、札幌で講演会や演劇、ガイドツアーなどにより事件を語り継ぎ､新たな視点から事件の事実､関係者の人物像や交友関係を掘り起こす活動を行なっている。	
V−20	「構成劇と講演のつどい」（2016年12月11日）の脚本とDVD
	大学文書館蔵
「宮澤・レーン事件を考える会」は、事件を題材にした構成劇「エルムに寄せて」の上演を中心に、合唱、講演を加えたプログラムで集会を行なった。アメリカ在住の秋間美江子も出席し、自らの思いを語った。これが、秋間の最後の来札となった。	

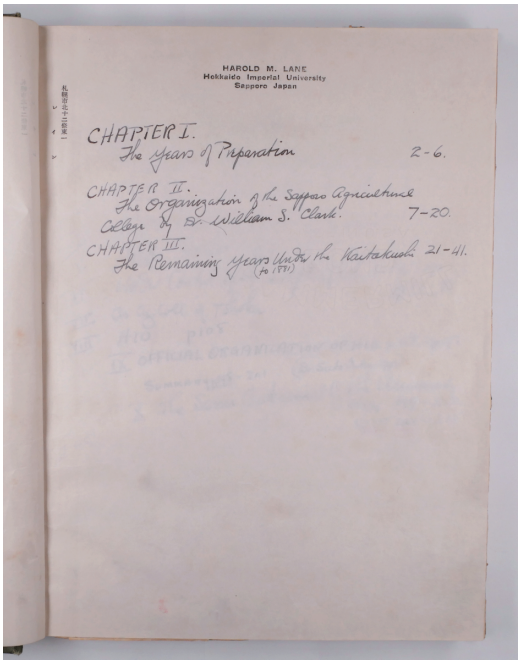
4．資料図録

Ⅰ．北大予科英語教師ハロルド・レーン、ポーリン・レーン

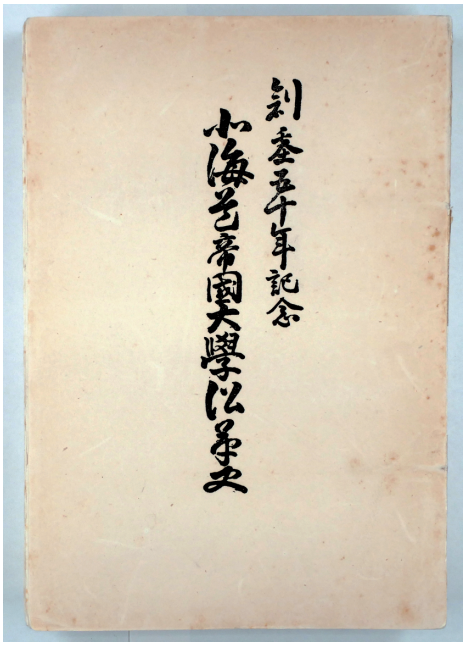


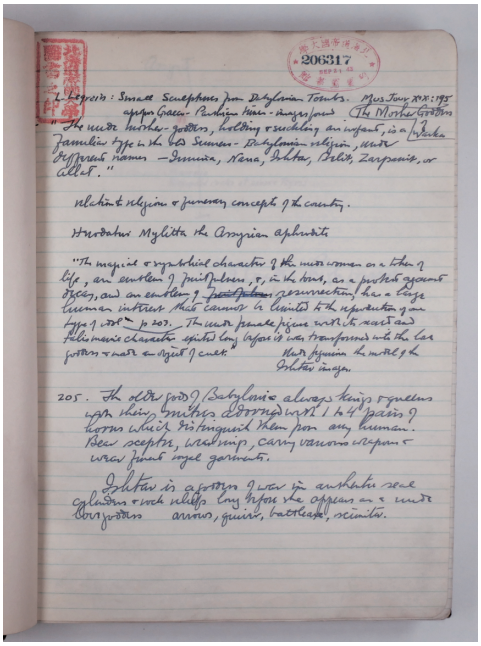
Ⅰ–01　H. M. Lane, “Theses”（1914年）



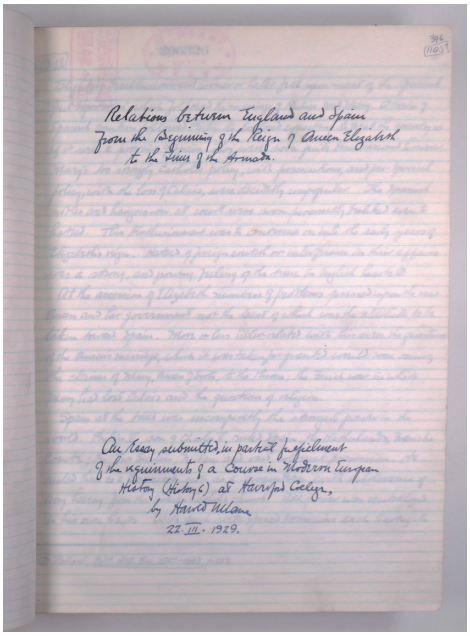


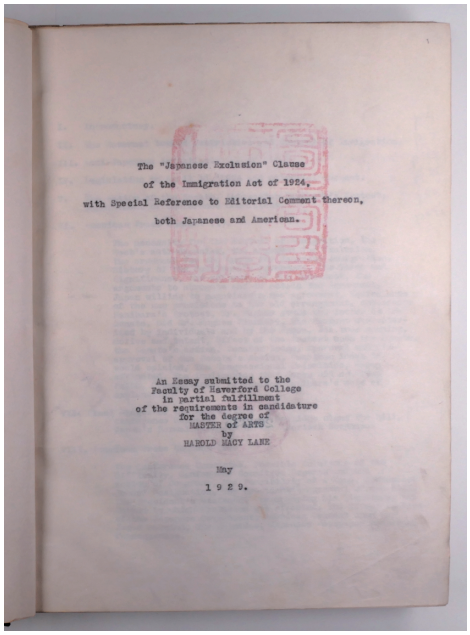
Ⅰ–02　H. M. Lane, “Hokkaido Imperial University History”（1926–1927年）



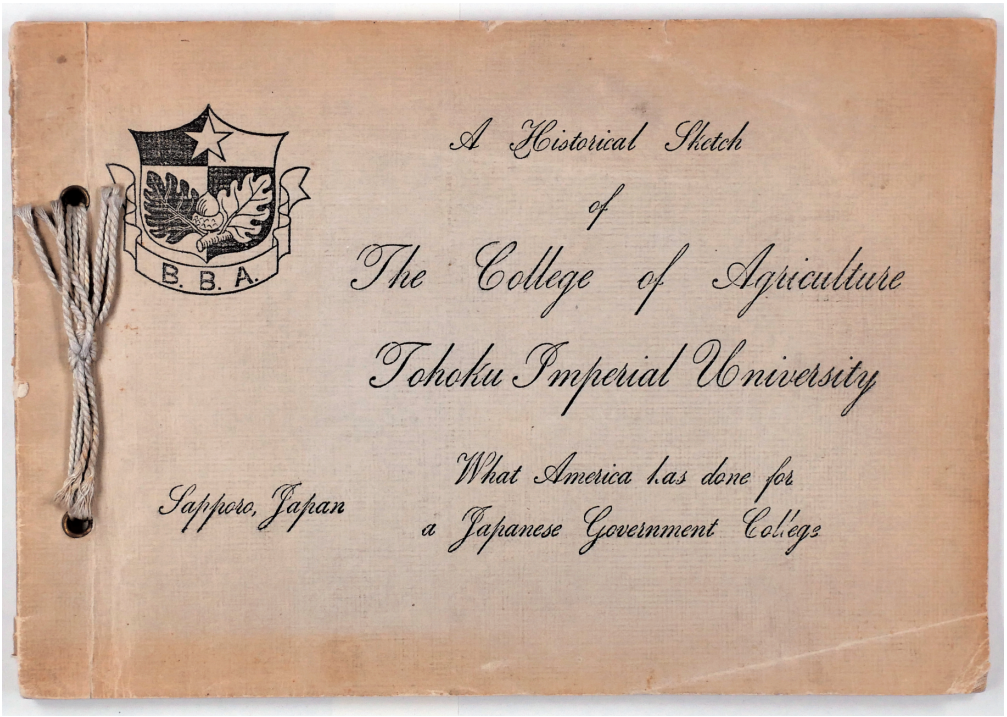


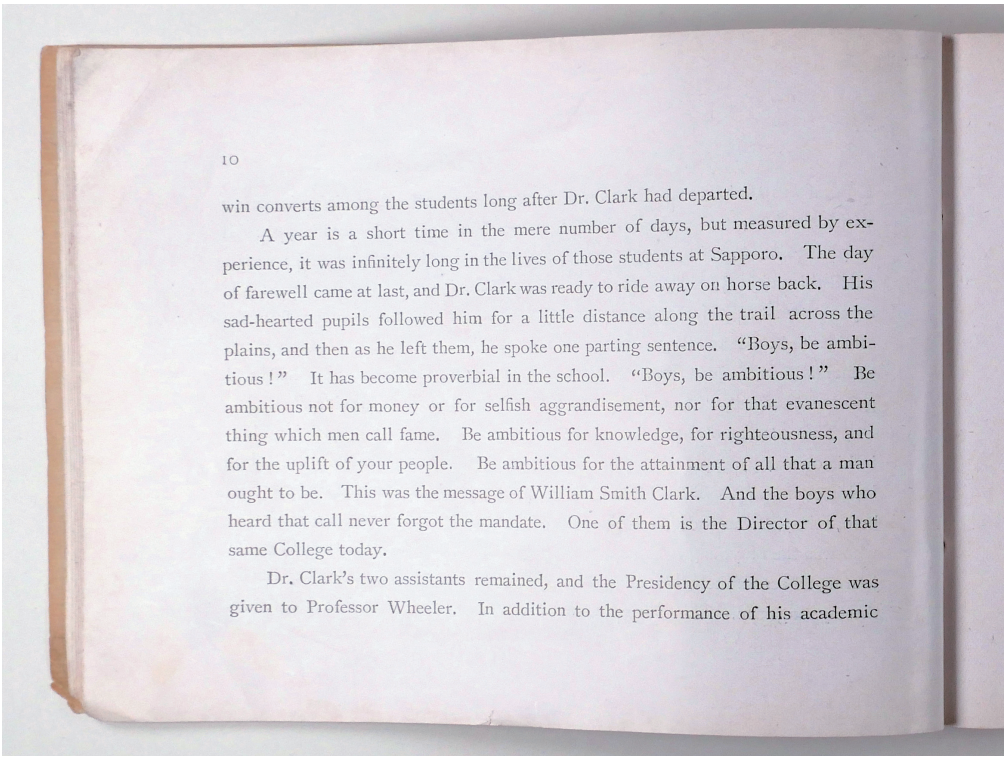
〔左図〕Ⅰ-03　『創基五十年記念　北海道帝国大学沿革史』（1926年）
〔右図〕Ⅰ-04　H. M. Lane, “Archaeology Notes”（1928年）





〔左図〕Ⅰ-05　H. M. Lane, “Relations between English and Spain from the Beginning of the Regina of Queen Elizabeth to the Time of Armada”（1929年）
〔右図〕Ⅰ-06　H. M. Lane, “The ‘Japanese Exclusion’ Clause of the Immigration Act of 1924, with Special Reference to Editorial Comment thereon, both Japanese and American”（1929年）





10

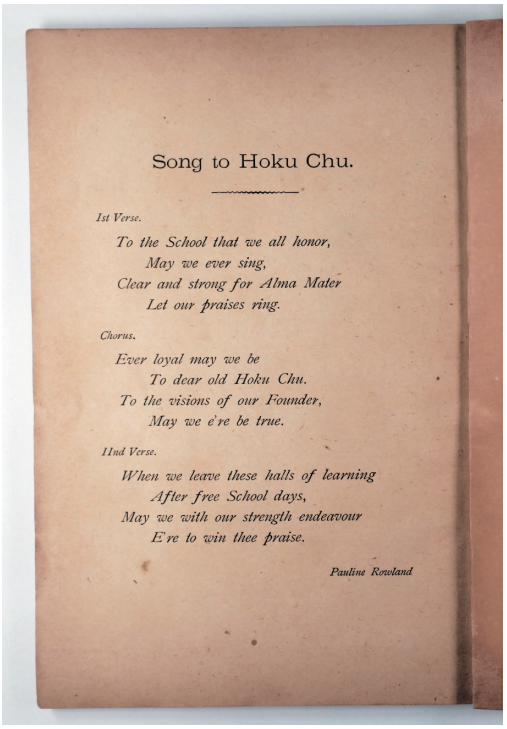
win converts among the students long after Dr. Clark had departed.

A year is a short time in the mere number of days, but measured by experience, it was infinitely long in the lives of those students at Sapporo. The day of farewell came at last, and Dr. Clark was ready to ride away on horse back. His sad-hearted pupils followed him for a little distance along the trail across the plains, and then as he left them, he spoke one parting sentence. "Boys, be ambitious!" It has become proverbial in the school. "Boys, be ambitious!" Be ambitious not for money or for selfish aggrandisement, nor for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. This was the message of William Smith Clark. And the boys who heard that call never forgot the mandate. One of them is the Director of that same College today.

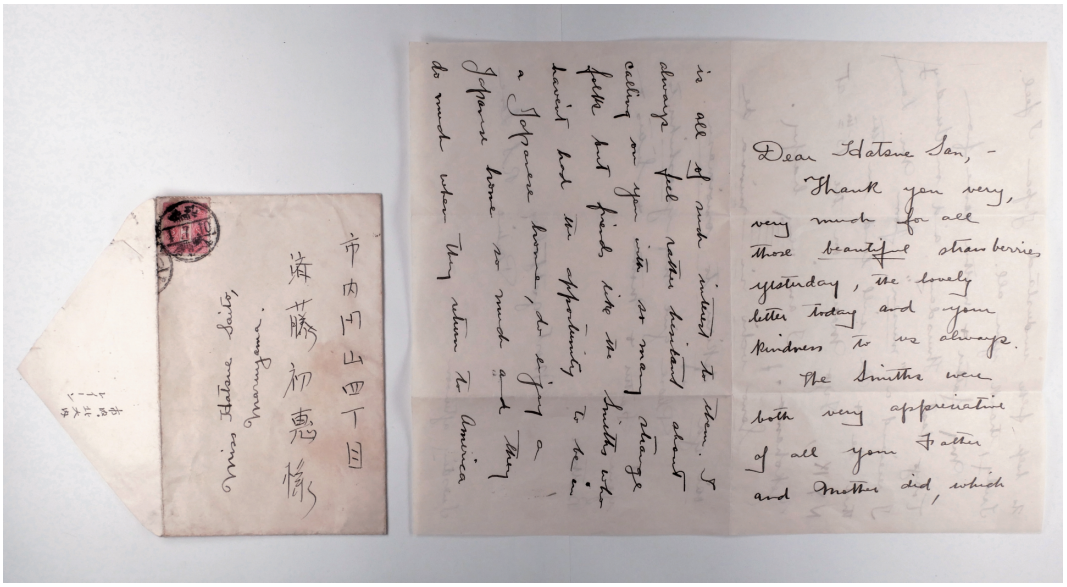
Dr. Clark's two assistants remained, and the Presidency of the College was given to Professor Wheeler. In addition to the performance of his academic

I－07　*Historical Sketch of Agricultural College of Tohoku Imperial University*（1915年）





Ⅰ-08　ポーリン・ローランドが作詩した“Song to Hoku Chu”（1917年）



Ⅰ-09　齋藤初恵に宛てたＰ．レーンの手紙（1926年７月10日）

Ⅱ．北大生宮澤弘幸の青春

(1) 文芸活動



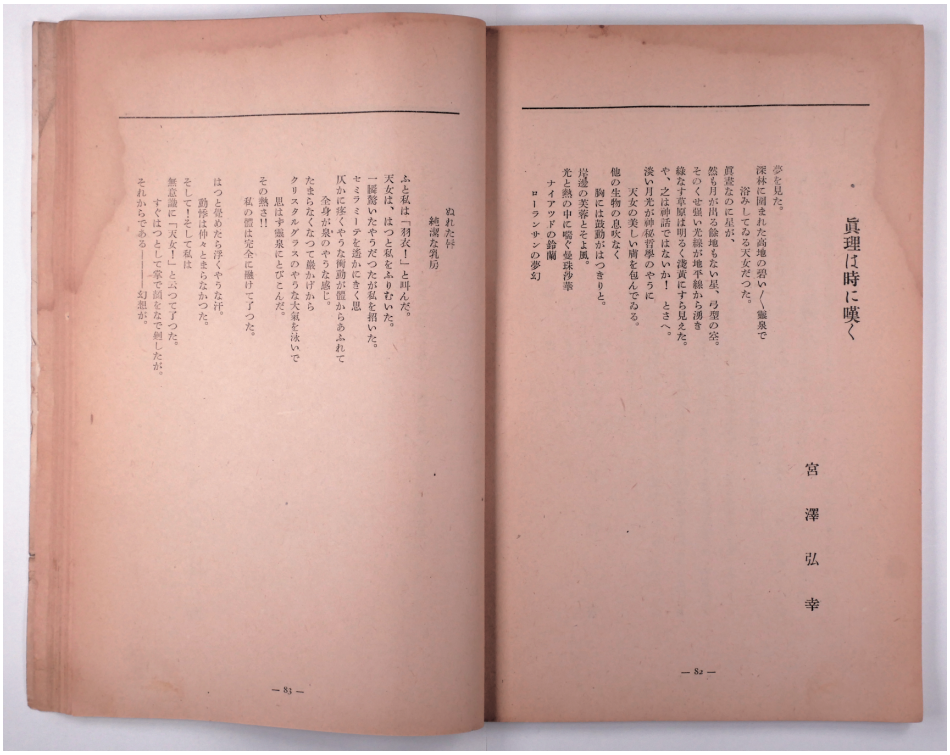
子"のひとり舞台だ、農實は十八名、林實が二十二名である

筈（寫眞は合格發表の刹那）

岡）新美長夫（横濱）小出正樹（愛知）赤木馨（岡山）南部直彦（岩手）荒時美昌、海老澤哲夫（茨城）水谷元吉（京都）以上百二十名

工類　魚住博、原晃一、山木孝幸、小澤保知、伊藤光臣、水野晶、豐田榮二、水野貞夫、三浦三千年、林重雄、澁谷俊夫、渡邊義則、岡田光夫、富樫博、篠木八郎、鎌田克夫、黒川直重、五十嵐節三、齋藤哲夫、相川一郎、由宇公輔、中村貞彦、杉田治八郎、米倉富吉、鈴木源告、長井弘、鵜澤秀男、水野忠治、長谷川亘、石金義信、井澤保信、野原博、佐々木吉哉、水科篤郎、宮本昇、小宮英太郎（以上北海道三十六名）德力幹一郎、成田眞一郎、小津肇、山崎孝治、鈴木久雄、篠原正三、鈴木弘毅、中岡三郎宮澤弘幸、森谷卓宮島貞利、堀政樹、江尻憲二郎、有松武、西山券二、三村寛、森井治彦、阿部恒郎、川上更一、大瀧浩、原和茂、松橋達良、山上德一三浦和郎、音桂二郎、酒井勝太郎（以上東京二十七名）土井藤明、馬場善雄、後藤謙次、方山勝之介（大阪）鈴木泰川、佐藤俊雄、庄司仁一（仙台市）吉田健一郎、園原俊幹、井上佐、豐澤光三、紅谷好章（千葉）乾安行、松本照男、鹽見勉三（京都）三橋廣二、多賀謙次、久越貞孝（朝鮮）藤本和正（山口）小藤英登、茂松元（福岡）竹山久夫、大塚廣源（靜岡）伴康（大連）安藤正夫阿部貞太郎（福島）松井淳（神戸）永矢元政（浦和市）佐々木一男（福井）進景夫（沼津市）伊藤正三、中尾智三郎（愛媛）大石一男（西宮市）的場皎、松藤謙三（滋賀）三輪泰之助（四日市）小田島弘（三重）齋藤進六（宇都宮）陣内輝也（戸畑市）高橋一雄（米澤市）伊藤健次（川崎市）野原博、佐々木洋（神奈川）河口脩二（山梨）以上百二拾名

Ⅱ-01　1937年度北海道帝国大学予科合格者を伝える『北海道帝国大学新聞』（1937年）



眞理は時に嘆く

宮澤弘幸

夢を見た。
深林に圍まれた高地の碧い〳〵靈泉で
浴みしてゐる天女だつた。
眞晝なのに星が、
然も月が出る餘地もない星、弓型の空。
そのくせ强い光線が地平線から湧き
緑なす草原は明るく淺黄にすら見えた。
や、之は神話ではないか！　とさへ。
淡い月光が神秘哲學のやうに
天女の美しい膚を包んでゐる。
他の生物の息吹なく
胸には鼓動がはつきりと。
岸邊の芙蓉とそよ風。
光と熱の中に囁く曼珠沙華
ナイアッドの鈴蘭
ローランサンの夢幻

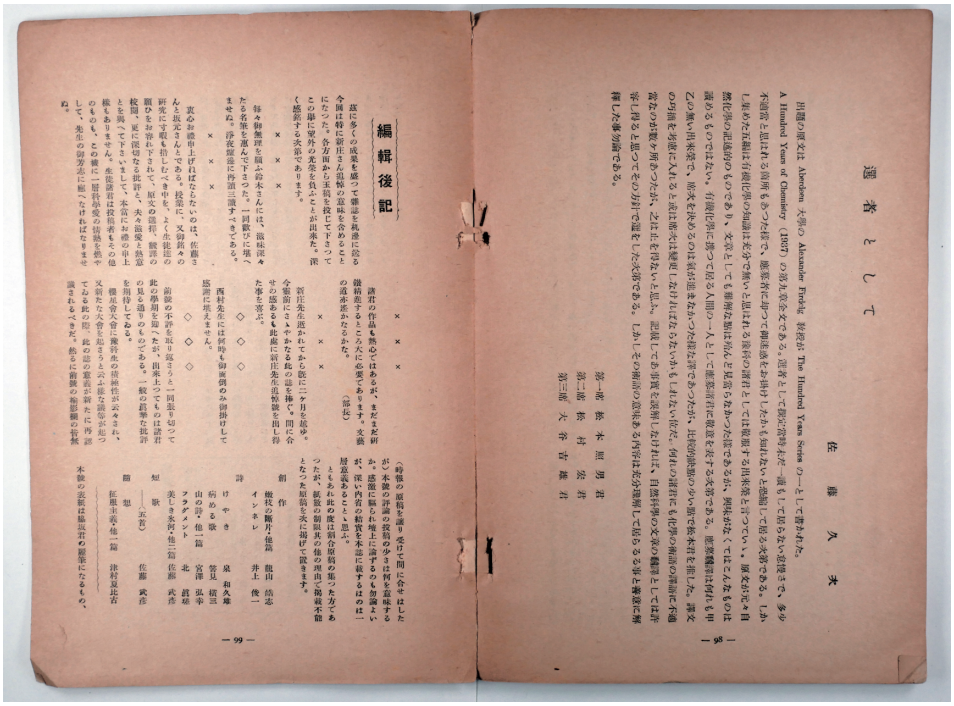
— 82 —

ぬれた唇
純潔な乳房

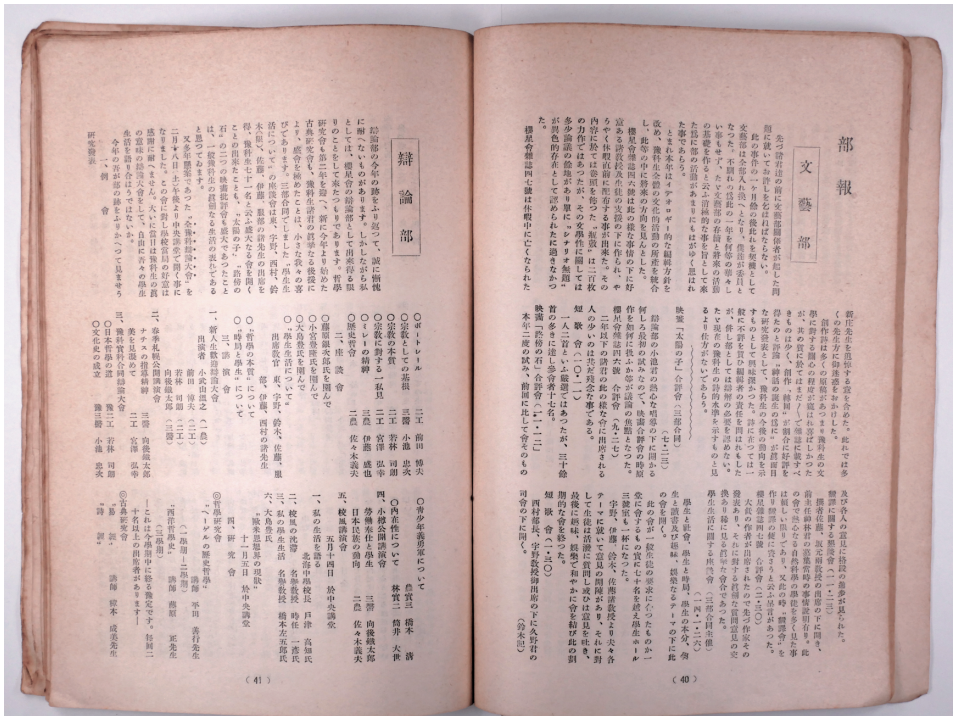
ふと私は「羽衣！」と叫んだ。
天女は、はつと私をふりむいた。
一瞬驚いたやうだつたが私を招いた。
セミラミーテを遙かにきく思
仄かに疼くやうな衝動が體からあふれて
全身が泉のやうな感じ。
たまらなくなつて嚴かげから
クリスタルグラスのやうな大氣を泳いで
思はず靈泉にとびこんだ。
その熱さ!!
私の體は完全に融けて了つた。
はつと覺めたら浮くやうな汗。
動悸は仲々とまらなかつた。
そして！そして私は
無意識に「天女！」と云つて了つた。
すぐはつとして掌で顔をなで廻したが。
それからである――――幻想が。

— 83 —

Ⅱ-02　宮澤弘幸「真理は時に嘆く」（1938年）



Ⅱ-03　『桜星会雑誌』第47号「編輯後記」（1938年）



Ⅱ-04　弁論部での活動を伝える『桜星会会報』（1939年）

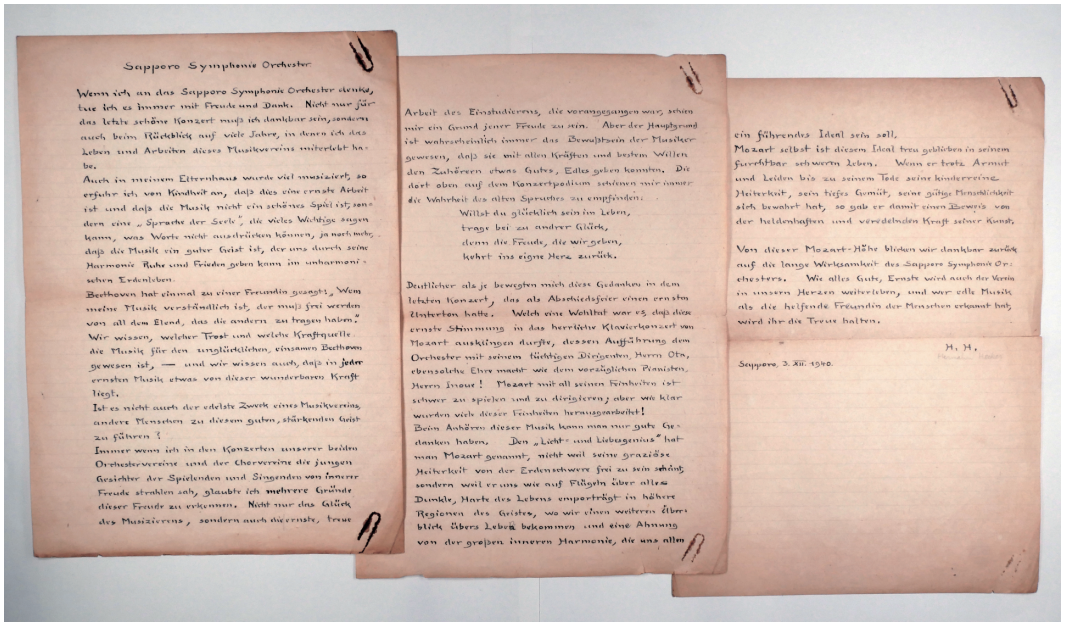

北海道帝國大學新聞

殆んど無投票にて
文武會新理事決定
庶務主任に農學部淺間君

山岳部の
冬期登山計畫
日高山脈へ大學四班を出す

Ⅱ−05　宮澤弘幸の文武会理事就任を伝える『北海道帝国大学新聞』（1938年）

(2) 外国人教師たちとの交流


Sapporo Symphonie Orchester

Wenn ich an das Sapporo Symphonie Orchester denke, tue ich es immer mit Freude und Dank. Nicht nur für das letzte schöne Konzert muß ich dankbar sein, sondern auch beim Rückblick auf viele Jahre, in denen ich das Leben und Arbeiten dieses Musikvereins miterlebt habe.

Auch im meinem Elternhaus wurde viel musiziert, so erfuhr ich von Kindheit an, daß dies eine ernste Arbeit ist und daß die Musik nicht ein schönes Spiel ist, sondern eine „Sprache der Seele", die vieles Wichtige sagen kann, was Worte nicht ausdrücken können, ja noch mehr, daß die Musik ein guter Geist ist, der uns durch seine Harmonie Ruhe und Frieden geben kann im unharmonischen Erdenleben.

Beethoven hat einmal zu einer Freundin gesagt: „Wem meine Musik verständlich ist, der muß frei werden von all dem Elend, das die andern zu tragen haben."

Wir wissen, welcher Trost und welche Kraftquelle die Musik für den unglücklichen, einsamen Beethoven gewesen ist, — und wir wissen auch, daß in jeder ernsten Musik etwas von dieser wunderbaren Kraft liegt.

Ist es nicht auch der edelste Zweck eines Musikvereins, andere Menschen zu diesem guten, stärkenden Geist zu führen?

Immer wenn ich in den Konzerten unserer beiden Orchestervereine und der Chorvereine die jungen Gesichter der Spielenden und Singenden von innerer Freude strahlen sehe, glaubte ich mehrere Gründe dieser Freude zu erkennen. Nicht nur das Glück des Musizierens, sondern auch die ernste, treue Arbeit des Einstudierens, die vorangegangen war, schien mir ein Grund jener Freude zu sein. Aber der Hauptgrund ist wahrscheinlich immer das Bewußtsein der Musiker gewesen, daß sie mit allen Kräften und bestem Willen den Zuhörern etwas Gutes, Edles geben konnten. Die dort oben auf dem Konzertpodium schienen mir immer die Wahrheit des alten Spruches zu empfinden:

Willst du glücklich sein im Leben,
trage bei zu andrer Glück,
denn die Freude, die wir geben,
kehrt ins eigne Herz zurück.

Deutlicher als je bewegten mich diese Gedanken in dem letzten Konzert, das als Abschiedsfeier einen ernsten Unterton hatte. Welch eine Wohlthat war es, daß diese ernste Stimmung in das herrliche Klavierkonzert von Mozart ausklingen durfte, dessen Aufführung dem Orchester mit seinem tüchtigen Dirigenten, Herrn Ota, ebensolche Ehre macht wie dem vorzüglichen Pianisten, Herrn Inoue! Mozart mit all seinen Feinheiten ist schwer zu spielen und zu dirigieren; aber wie klar wurden viele dieser Feinheiten herausgearbeitet!

Beim Anhören dieser Musik kann man nur gute Gedanken haben. Den „Licht- und Liebegenius" hat man Mozart genannt, nicht weil seine graziöse Heiterkeit von der Erdenschwere frei zu sein scheint, sondern weil er uns wie auf Flügeln über alles Dunkle, Harte des Lebens emporträgt in höhere Regionen des Geistes, wo wir einen weiteren Überblick übers Leben bekommen und eine Ahnung von der großen inneren Harmonie, die uns allen ein führendes Ideal sein soll.

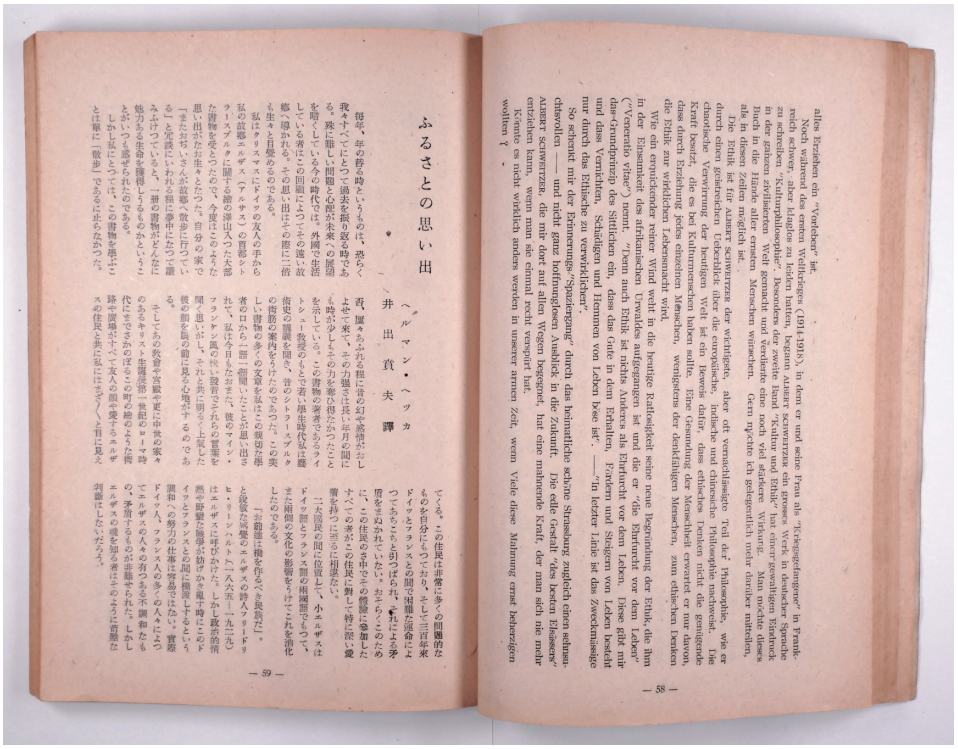
Mozart selbst ist diesem Ideal treu geblieben in seinem furchtbar schweren Leben. Wenn er trotz Armut und Leiden bis zu seinem Tode seine kinderreine Heiterkeit, sein tiefes Gemüt, seine gütige Menschlichkeit sich bewahrt hat, so gab er damit einen Beweis von der heldenhaften und veredelnden Kraft seiner Kunst.

Von dieser Mozart-Höhe blicken wir dankbar zurück auf die lange Wirksamkeit des Sapporo Symphonie Orchesters. Wie alles Gute, Ernste wird auch der Verein in unsern Herzen weiterleben, und wer edle Musik, als die helfende Freundin der Menschen erkannt hat, wird ihr die Treue halten.

H. H.

Sapporo, 3. XII. 1940.

Ⅱ−06　H. Hecker, “Sapporo Symphonie Orchester”（1940年）



ふるさとの思い出

（ルドルフ・ヘッカー）

井出貞夫譯

毎年、年の暮れ時というものは、恐らく我々すべてにとって過去を振り返る時である。殊に難しい問題と心配が未来への展望を暗くしている今の時代では、外国で生活している者にとってその感じは故郷へ帰かれる。その思い出はその際に二倍も生々と自然めるのである。

私はクリスマスにドイツの友人の手から私の故郷エルザス（アルサス）の首都シトラースブルク（ストラスブール）に関する一冊の本を贈られた。今度はこのような書物を受とったので、自分の家で一またたちまち故郷の散歩に行っている。先達いわれる様に夢中になって読み耽つていると、一冊の書物がどんなに魅力ある生命を獲得しうるものかということがいつも感ぜられたのであるが、しかし私にとっては、この書物を通ここと丁度に「懐郷」である心地がした。

— 89 —

alles Erziehen ein „Vorlehen" ist.

Noch während des ersten Weltkrieges (1914-1918), in dem er und seine Frau als „Kriegsgefangener" in Frankreich schwer, aber klaglos zu leiden hatten, begann August Schmarsow seine Arbeit an dem Buch zu schreiben „Kulturphilosophie". Besonders der zweite Band „Kultur und Ethik" hat einen großen Eindruck in der ganzen zivilisierten Welt gemacht und verdiente eine noch viel stärkere Würdigung. Man möchte dieses Buch in die Hände aller ernsten Menschen wünschen. Gern möchte ich gelegentlich mehr darüber mitteilen, aber es ist leider nicht möglich.

Die Ethik ist für Schmarsow der wichtigste, aber oft vernachlässigte Teil der Philosophie, wie er durch einen gedrängten Überblick über die griechische und chinesische Philosophie nachweist. Die chaotische Verwirrung der heutigen Welt ist ein Beweis dafür, daß eine gesunde Ethik nicht die genügende Kraft besitzt, die es bei Kulturmenschen haben sollte. Eine Gesundung der Menschheit kann, so meint Schmarsow, nur durch Erziehung jedes einzelnen Menschen, wenigstens der denkfähigen Menschen, zum ethischen denken die Ethik zur wirklichen Lebensmacht wird.

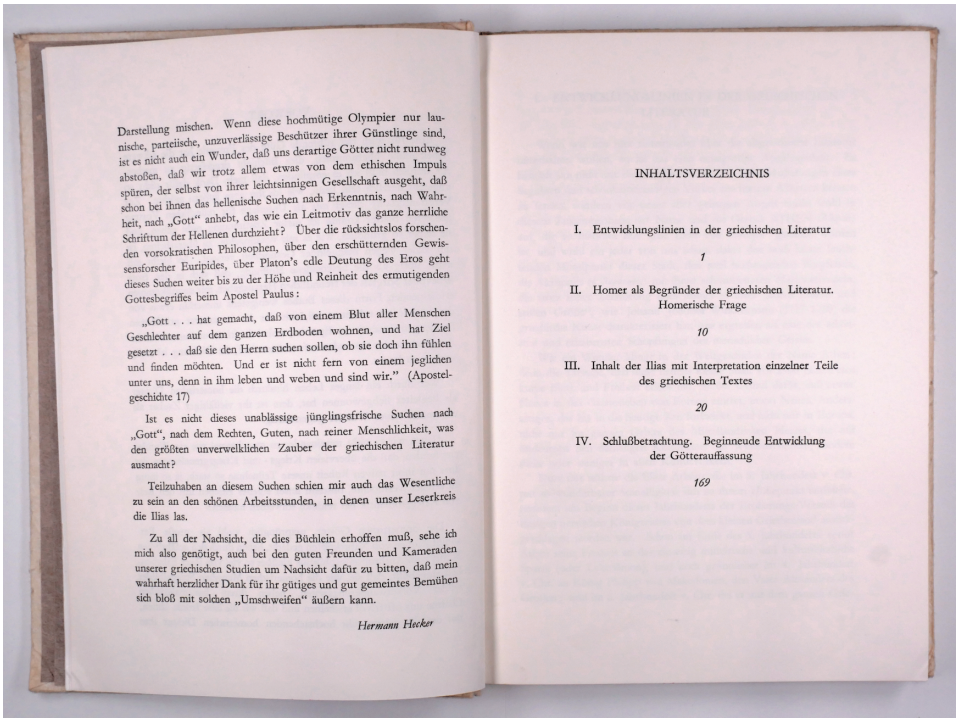
Wie ein ermutigender reiner Wind weht in die heutige Ratlosigkeit seine neue Begründung der Ethik, die ihm in der Einsamkeit des afrikanischen Urwaldes aufgegangen ist und die er „die Ehrfurcht vor dem Leben" („Venerantio vitae") nennt. "Denn auch Ethik ist nichts Anderes als Ehrfurcht vor dem Leben. Diese gibt mir das Grundprinzip des Sittlichen ein, dass das Gute in dem Erhalten, Fördern und Steigern von Leben besteht und dass Vernichten, Schädigen und Hemmen von Leben böse ist". —"in letzter Linie ist das Zweckmässige nur durch das Ethische zu verwirklichen".

So scheint mir der Erinnerungs-"Spaziergang" durch das heimatliche schöne Strassburg zugleich einen sehnsuchtsvollen — und nicht ganz hoffnungslosen Ausblick in die Zukunft. Die edle Gestalt 'des besten Elsässers' ALBERT SCHWEITZER, die mir dort auf allen Wegen begegnet, hat eine mahnende Kraft, der man sich nie mehr entziehen kann, wenn man sie einmal recht verspürt hat.

Krante es nicht wirklich anders werden in unserer armen Zeit, wenn Viele diese Mahnung ernst beherzigen wollten ?

— 58 —

Ⅱ-07　『北大季刊』第２号（1952年）へのH.ヘッカーの寄稿



Darstellung mischen. Wenn diese hochmütige Olympier nur launische, parteiische, unzuverlässige Beschützer ihrer Günstlinge sind, ist es nicht auch ein Wunder, daß uns derartige Götter nicht rundweg abstoßen, daß wir trotz allem etwas von dem ethischen Impuls spüren, der selbst von ihrer leichtsinnigen Gesellschaft ausgeht, daß schon bei ihnen das hellenische Suchen nach Erkenntnis, nach Wahrheit, nach „Gott" anhebt, das wie ein Leitmotiv das ganze herrliche Schrifttum der Hellenen durchzieht? Über die rücksichtslos forschenden vorsokratischen Philosophen, über den erschütternden Gewissensforscher Euripides, über Platon's edle Deutung des Eros geht dieses Suchen weiter bis zu der Höhe und Reinheit des ermutigenden Gottesbegriffes beim Apostel Paulus:

„Gott . . . hat gemacht, daß von einem Blut aller Menschen Geschlechter auf dem ganzen Erdboden wohnen, und hat Ziel gesetzt . . . daß sie den Herrn suchen sollen, ob sie doch ihn fühlen und finden möchten. Und er ist nicht fern von einem jeglichen unter uns, denn in ihm leben und weben und sind wir." (Apostelgeschichte 17)

Ist es nicht dieses unablässige jünglingsfrische Suchen nach „Gott", nach dem Rechten, Guten, nach reiner Menschlichkeit, was den größten unverwelklichen Zauber der griechischen Literatur ausmacht?

Teilzuhaben an diesem Suchen schien mir auch das Wesentliche zu sein an den schönen Arbeitsstunden, in denen unser Leserkreis die Ilias las.

Zu all der Nachsicht, die dies Büchlein erhoffen muß, sehe ich mich also genötigt, auch bei den guten Freunden und Kameraden unserer griechischen Studien um Nachsicht dafür zu bitten, daß mein wahrhaft herzlicher Dank für ihr gütiges und gut gemeintes Bemühen sich bloß mit solchen „Umschweifen" äußern kann.

Hermann Hecker

INHALTSVERZEICHNIS

I. Entwicklungslinien in der griechischen Literatur

1

II. Homer als Begründer der griechischen Literatur. Homerische Frage

10

III. Inhalt der Ilias mit Interpretation einzelner Teile des griechischen Textes

20

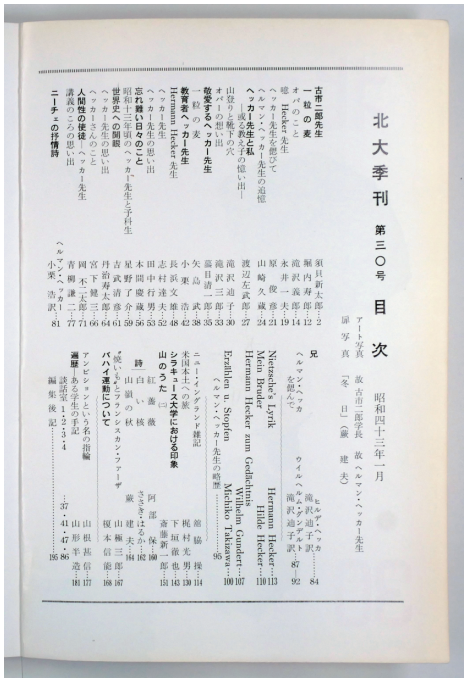
IV. Schlußbetrachtung. Beginneude Entwicklung der Götteraufassung

169

Ⅱ-08　H. Hecker, *Über Homers Ilias*（1962年）

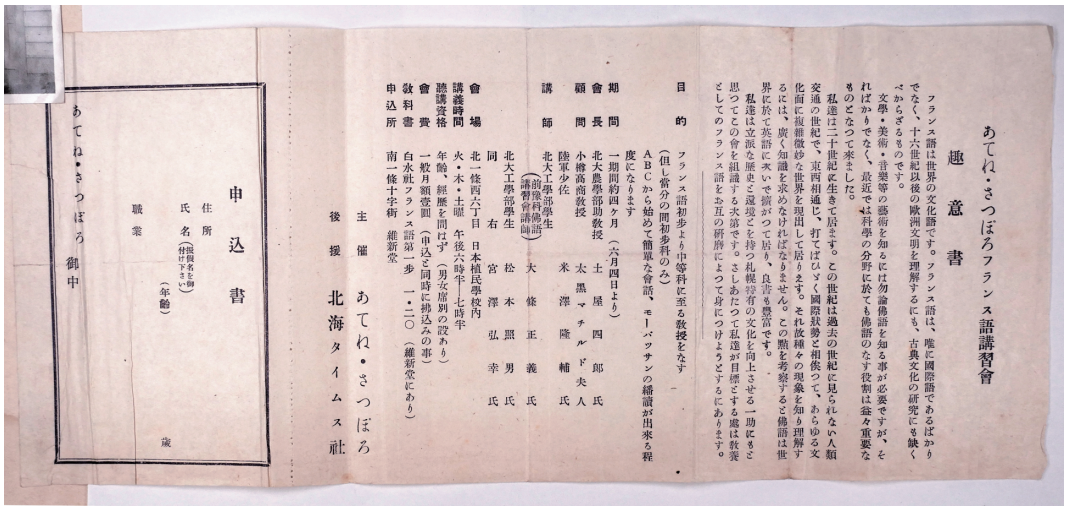


Ⅱ-09　H.ヘッカー追悼号として刊行された『北大季刊』第30号の口絵（1968年）





〔左図〕Ⅱ-09　H.ヘッカー追悼号として刊行された『北大季刊』第30号（1968年）
〔右図〕Ⅱ-10　ヘルマン・ヘッカー先生像



あてね・さつぽろフランス語講習會

趣意書

フランス語は世界の文化語です。フランス語は、唯に國際語であるばかりでなく、十六世紀以後の歐洲文明を理解するにも、古典文化の研究にも缺くべからざるものです。

文學・美術・音樂等の藝術を知るには勿論佛語を知る事が必要ですが、そればかりでなく、最近では科學の分野に於ても佛語のなす役割は益々重要なものとなつて來ました。

私達は二十世紀に生きて居ます。この世紀は過去の世紀に見られない人類交通の世紀で、東西相通じ、打てばひゞく國際狀勢と相俟つて、あらゆる文化面に複雜微妙な世界を現出して居ります。それ故種々の現象を知り理解するには、廣く知識を求めなければなりません。この點を考察すると佛語は世界に於て英語に次いで擴がつて居り、良書も豐富です。

私達は立派な歴史と還境とを持つ札幌特有の文化を向上させる一助にもと思つてこの會を組織する次第です。さしあたつて私達が目標とする處は教養としてのフランス語をお互の研磨によつて身につけようとするにあります。

目的　フランス語初歩より中等科に至る教授をなす（但し當分の間初歩科のみ）ABCから始めて簡單な會話、モーパッサンの繙讀が出來る程度になります

期間　一期間約四ケ月（六月四日より）

會長　北大農學部助教授　土屋四郎氏

顧問　小樽高商教授　太黒マチルド夫人

陸軍少佐　米澤隆輔氏

講師　北大工學部學生（前豫科佛語講習會講師）　大條正義氏

北大工學部學生　松本照男氏

同　右　宮澤弘幸氏

會場　北一條西六丁目　日本植民學校内

講義時間　火・木・土曜　午後六時半―七時半

聽講資格　年齢、經歴を問はず（男女席別の設あり）

會費　一般月額壹圓（申込と同時に拂込みの事）

教科書　白水社フランス語第一歩　一・二〇（維新堂にあり）

申込所　南一條十字街　維新堂

主催　あてね・さつぽろ

後援　北海タイムス社

申込書

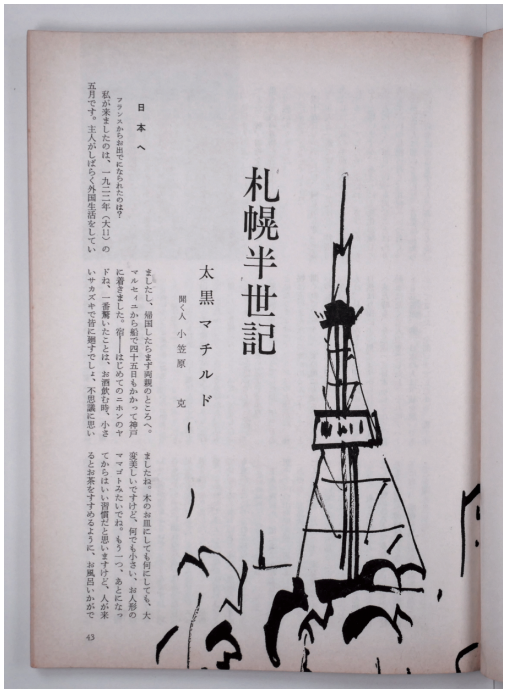
住所

氏名（世俗名を御付け下さい）（年齢）　歳

職業

あてね・さつぽろ　御中

Ⅱ-11　あてね・さっぽろフランス語講習会趣意書（1940年）



札幌半世記

太黒マチルド

聞く人　小笠原　克

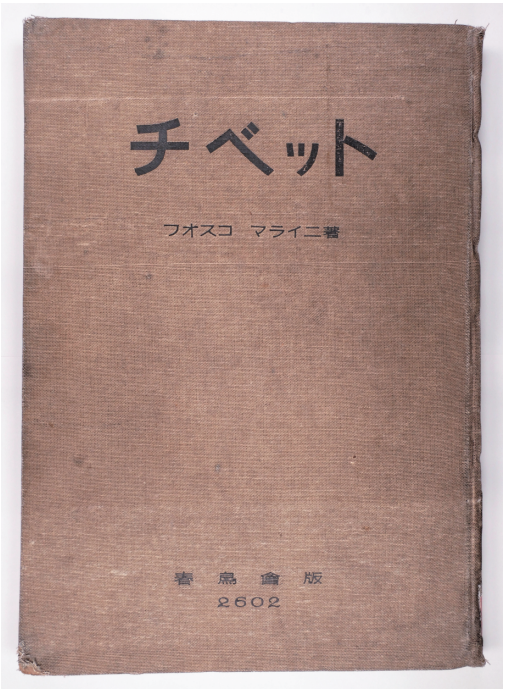
日本へ

フランスからお出でになられたのは？

私が來ましたのは、一九二二年（大11）の五月です。主人がしばらく外国生活をしていましたし、帰国したらまず両親のところへ。マルセイユから船で四十五日もかかって神戸に着きました。宿――はじめてのニホンのヤドね、一番驚いたことは、お酒飲む時、小さいサカズキで皆に廻すでしょ、不思議に思いましたね。木のお皿にしても何にしても、大変美しいですけど、何でも小さい、お人形のママゴトみたいでね。もう一つ、あとになってからはいい習慣だと思いますけど、人が来るとお茶をすすめるように、お風呂いかがで

43

Ⅱ-12　太黒マチルド「札幌半世紀」（1968年）



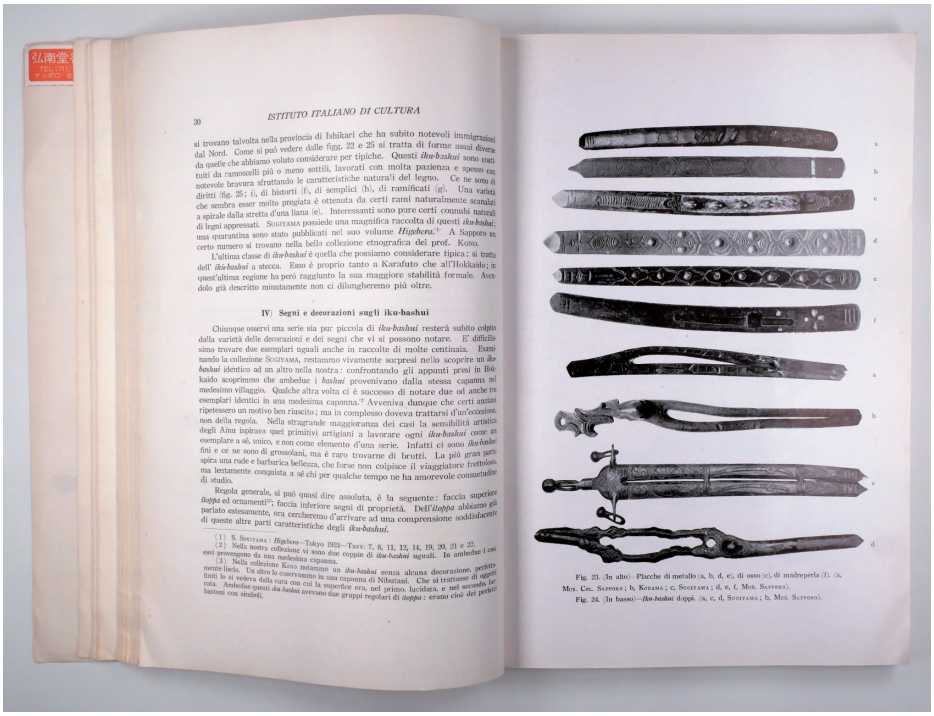
チベット

フオスコ　マライニ著

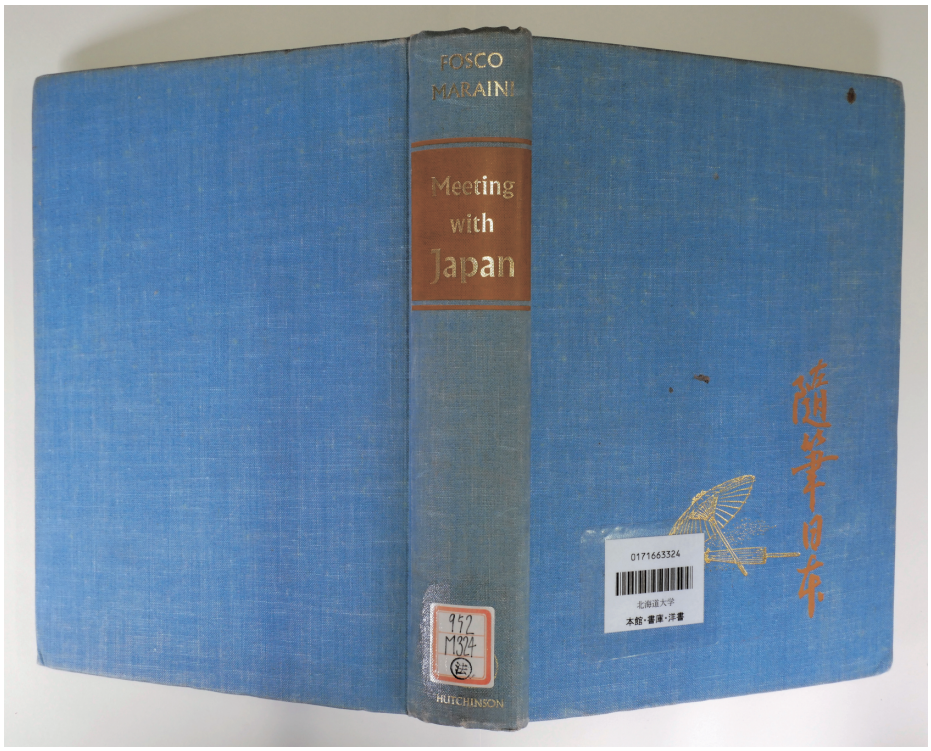
春鳥會版

2602

Ⅱ-13　F.マライーニ『チベット』（1942年）



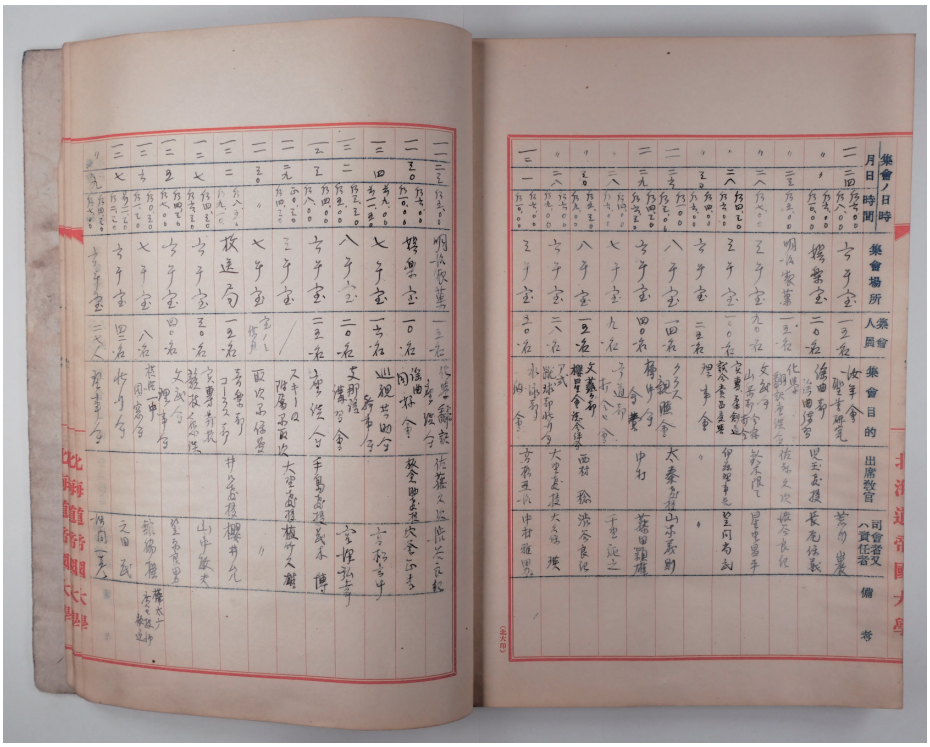
Ⅱ−14　F. Maraini, *Gli iku-bashui dogli Ainu.*（1942年）



Ⅱ−15　F. Maraini, *Meeting with Japan.*（1959年）

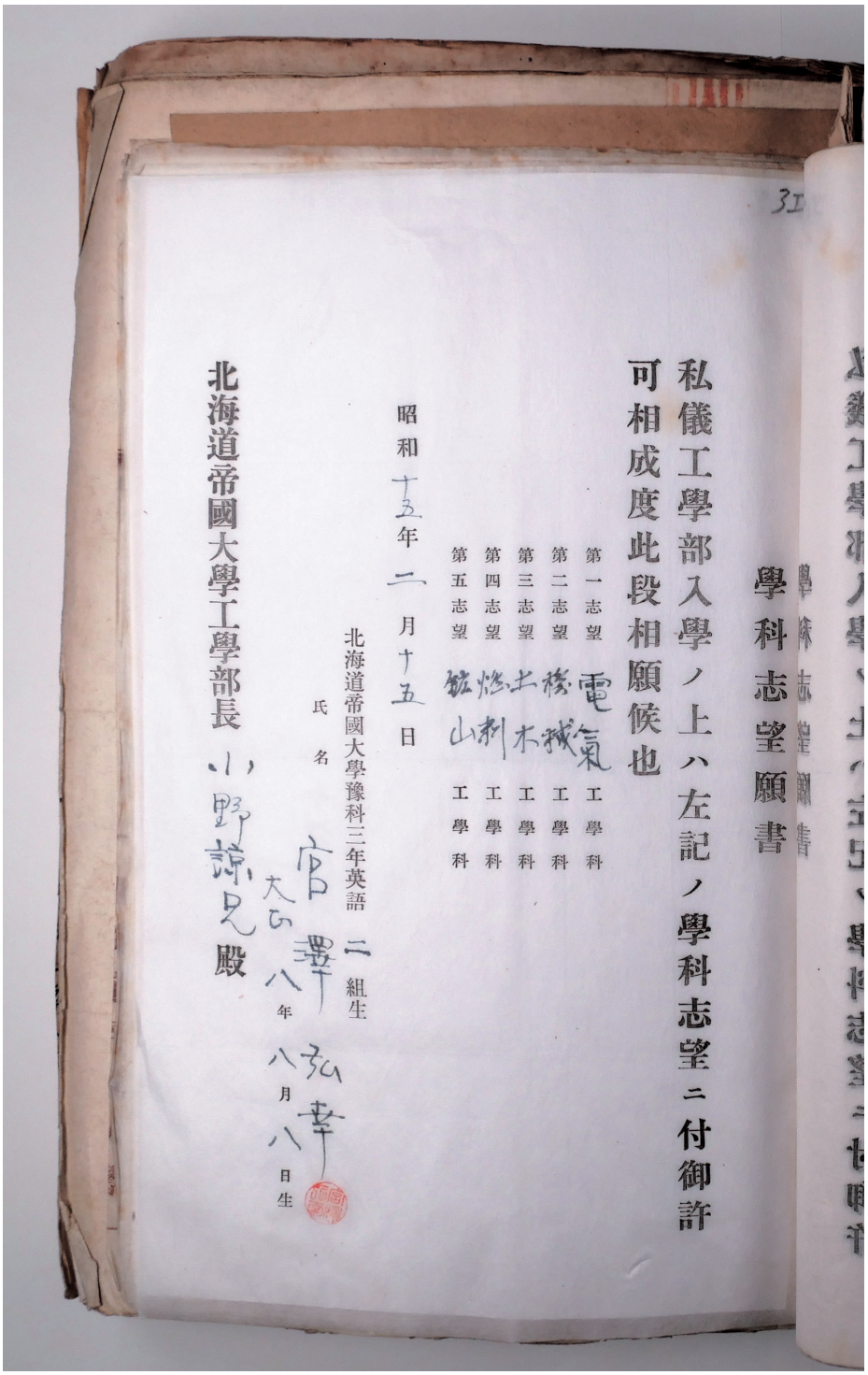


Ⅱ-16　F.マライーニ「アジアにおけるイタリア人の旅行者」（1970年）



Ⅱ-17　宮澤弘幸が届け出た「支那語講習会」（1938年12月２日）

(3) 時代と社会への眼差し



學科志望願書

私儀工學部入學ノ上ハ左記ノ學科志望ニ付御許可相成度此段相願候也

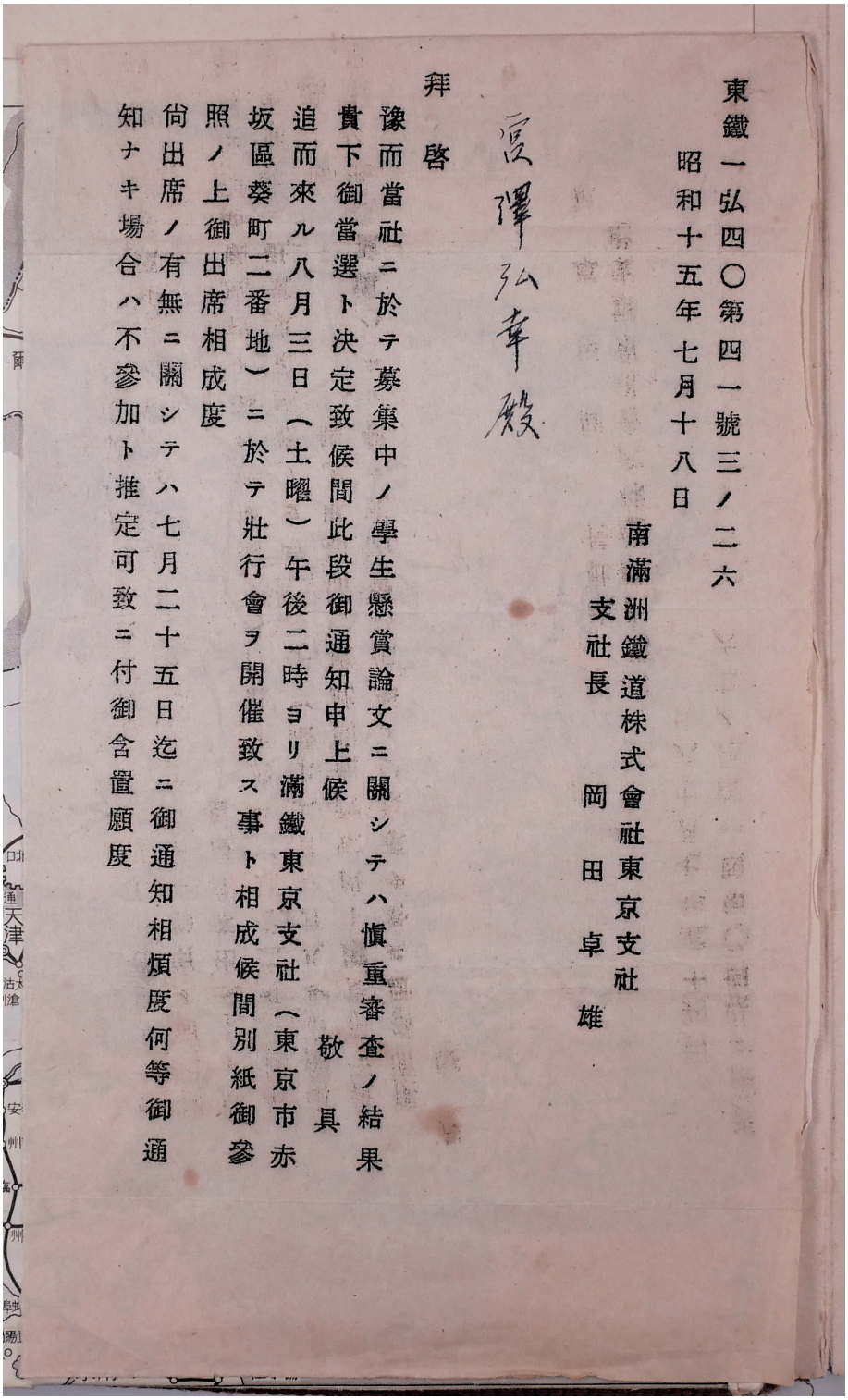
第一志望　電氣　工學科
第二志望　機械　工學科
第三志望　土木　工學科
第四志望　燃料　工學科
第五志望　鉱山　工學科

昭和十五年二月十五日

北海道帝國大學豫科三年英語二組生
氏名　宮澤弘幸
大正八年八月八日生

北海道帝國大學工學部長　小野諒兄殿

Ⅱ−18　宮澤弘幸の工学部「学科志望願書」（1940年２月15日）



東鐵一弘四〇第四一號三ノ二六
昭和十五年七月十八日

南滿洲鐵道株式會社東京支社
支社長　岡田卓雄

宮澤弘幸殿

拜啓

豫而當社ニ於テ募集中ノ學生懸賞論文ニ關シテハ愼重審査ノ結果貴下御當選ト決定致候間此段御通知申上候

敬具

追而來ル八月三日（土曜）午後二時ヨリ滿鐵東京支社（東京市赤坂區葵町二番地）ニ於テ壯行會ヲ開催致ス事ト相成候間別紙御參照ノ上御出席相成度

尚出席ノ有無ニ關シテハ七月二十五日迄ニ御通知相煩度何等御通知ナキ場合ハ不參加ト推定可致ニ付御含置願度

Ⅱ−19　満鉄主催学生懸賞論文の当選通知（1940年７月18日）

滿洲を巡つて（一）

工學部一年　宮澤弘幸

序

滿鐵では從來、內地の學者、藝術家等の知名の士を招いて滿蒙の實情を見學せしめ、又は講演をなすことは屢々行はれてゐるが、本年は始めての試みとして內地の學生達から論文を募集して十名を選び、八月一杯、滿洲の鐵道を見學させて呉れた。

そのお蔭で今迄一度も大陸の土を踏んだことのなかつた私も、たとへ滿鐵沿線のみとは云へ、期間に許しく見て廻る事が出來た。豫め自分まではゆかなくても相當數字の上の知識はしてゐたつもりであつたが、一見にしてどん〳〵と恐から鱗へほされて、過去の概念は遙か遠くに去らねばならぬ羽目に追込まれて了つた。

その間乘つた滿鐵の列車は、滿鐵の自慢の一等車から特急のトあの一等車まで、更に自動車、バス、トラック、ハイヤー、洋車、馬車、三輪快車、飛行機まであり、共に語つた人は國別にして日、鮮滿、露、支、獨、佛、イラク人となり職業別にして滿鐵系では重役から總裁までの間の殆んど凡ての階級、日本官吏、滿洲官吏、大學教授、醫師、農民、苦力、商店商人、職業婦人、農民、開拓者、軍人、滿鐵青年隊、學生、團體、小商人、百貨店支配人、文士、映畫人から下は寄席藝人、醫業婦に至るまで凡ゆる階級の人々と話を交へて見た。その他ホテルのボーイや雜役の人を數へればきりがない。だが、勿論たつた一回一ケ月間の旅行で決論を述りあげて、それを云ふのではない。唯いろ〳〵と云ふのである。

宮澤弘幸

序

滿鐵では從來、內地の學者、藝術家等の知名の士を招いて滿蒙の實情を見學せしめ、又は講演をなすことは屢々行はれてゐるが、本年は始めての試みとして內地の學生達から論文を募集して十名を選び、八月一杯、滿洲の鐵道を見學させて呉れた。

そのお蔭で今迄一度も大陸の土を踏んだことのなかつた私も、たとへ滿鐵沿線のみとは云へ、期間に許しく見て廻る事が出來た。豫め自分まではゆかなくても相當數字の上の知識はしてゐたつもりであつたが、一見にしてどん〳〵と恐から鱗へほされて、過去の概念は遙か遠くに去らねばならぬ羽目に追込まれて了つた。

その間乘つた滿鐵の列車は、滿鐵の自慢の一等車から特急のトあの一等車まで、更に自動車、バス、トラック、ハイヤー、洋車、馬車、三輪快車、飛行機まであり、共に語つた人は國別にして日、鮮滿、露、支、獨、佛、イラク人となり職業別にして滿鐵系では重役から總裁までの間の殆んど凡ての階級、日本官吏、滿洲官吏、大學教授、醫師、農民、苦力、商店商人、職業婦人、農民、開拓者、軍人、滿鐵青年隊、學生、團體、小商人、百貨店支配人、文士、映畫人から下は寄席藝人、醫業婦に至るまで凡ゆる階級の人々と話を交へて見た。その他ホテルのボーイや雜役の人を數へればきりがない。だが、勿論たつた一回一ケ月間の旅行で決論を述りあげて、それを云ふのではない。唯いろ〳〵と云ふのである。

滿鐵が行はれてゐる。日滿一體とはいふものの此際にまだ〳〵至誠に缺めねばならぬ點が多々あらう。日滿ところか、不在地主の幣害等の點では日本內地と滿鐵現地との間にすら云ふべき難問題が潜んでゐる。

この不在地主問題とは、內地富豪が滿洲に於ける土地の恩惠の爲めに滿洲の都市郡農が滿像以上に驕つて、滿鐵を全く滿鐵の手にゆだねた事情から云つても、滿鐵に關かつてゐる諸問題は滿鐵を動かす大勢な役割をする。その二、三を擧げてみようと

丁度雨あがりの日に我々は星嶺から街まで自動車に乘つたが星嶺から昭和橋までの區間は滿鐵が道路經營を許可されてゐて質に立派に鋪裝されてゐるが、橋を越えた途端に自動車はパンクをしたかといふに——全く信じられぬ程凸凹だ。開拓政府としては滿鐵の道路鋪裝にまでは關與及び發ねるといふのだが、さりとて滿鐵がかゝる文化關係事業を積向うまでするのは行政區劃上許されない。いかに交通が文化を生むとは云へ、もとより附屬文化が伴はなくて交通關係のみでは市街は決して國滿な發展を遂げるものでない事は誰にでも明白である。それにも拘らず大規模な滿鐵、滿洲工場に關係する道路や水道、ガス、學校、住宅等について一般文化施設をするには總裁官府には金がなく、さりとて滿鐵會社を滿鐵附屬地帶と決めて一切を滿鐵に委託するのは國家の根本上變だと云ふので、滿鐵當局とても云ふべき特殊施設を規定しようなどと云ふ案が問題になつてゐるが、此細な點に關聯つて、現狀は發行當

ども、その右隣にはたつた一軒、左隣には一軒の家が建つてゐるのみである。二十年後の繁華街滿鐵を目指して名づけたとの事。何と大膽なー

それだけに滿鐵沿線は數多の問題を持つてゐる。元來、此處は滿鐵附屬地帶と稱する點であるが滿鐵は滿洲國の裏面としての重要性に鑑みて、鐵道沿線を全く滿鐵の手にゆだねた事情から云つても、滿鐵に關かつてゐる諸問題は滿鐵を動かす大勢な役割をする。その二、三を擧げてみようと

丁度雨あがりの日に我々は星嶺から街まで自動車に乘つたが星嶺から昭和橋までの區間は滿鐵が道路經營を許可されてゐて質に立派に鋪裝されてゐるが、橋を越えた途端に自動車はパンクをしたかといふに——全く信じられぬ程凸凹だ。開拓政府としては滿鐵の道路鋪裝にまでは關與及び發ねるといふのだが、さりとて滿鐵がかゝる文化關係事業を積向うまでするのは行政區劃上許されない。いかに交通が文化を生むとは云へ、もとより附屬文化が伴はなくて交通關係のみでは市街は決して國滿な發展を遂げるものでない事は誰にでも明白である。それにも拘らず大規模な滿鐵、滿洲工場に關係する道路や水道、ガス、學校、住宅等について一般文化施設をするには總裁官府には金がなく、さりとて滿鐵會社を滿鐵附屬地帶と決めて一切を滿鐵に委託するのは國家の根本上變だと云ふので、滿鐵當局とても云ふべき特殊施設を規定しようなどと云ふ案が問題になつてゐるが、此細な點に關聯つて、現狀は發行當

ばつてゐるから滿鐵する必要もあるまい。この間は帝政ロシアの滿洲政策を並べる時に、實が觸れてみよう。ともかく自然の方面では、滿洲と名づけ日本海は、海として滿鐵はして滿洲の方が數字から見ると、滿鐵に滿らしい。

なほ滿鐵部の一佳人が、滿鐵入を始めとして滿鐵人は滿が滿鐵の事務にうといと思つてゐたからそのまゝ書きとめておく。これはさうと滿鐵滿鐵部自體もいつてゐた事である。

以上を總すれば、民族協和の理想郷とされてゐる滿洲國に、如何に多くの滿鐵が未解決のまゝに殘たはつてゐるかゞ、滿鐵關係の專門とも云ふべき滿鐵に上陸した第一歩からして問題されるのである。

牡丹江まで

羅津の北東滿鐵附屬地帶に屬し星嶺驛、羅津驛、雄基驛、會寧驛、清津驛、羅津驛等の滿鐵の最も重要な驛を始めとして第十九師團司令部より出された表彰狀が眞にうらやましい。ウラヂヴオストクと雖も十里と云はれる滿鐵から四團の現地驛設驛までの廣大な輸送增加並びに滿鐵の發展に寄與貢獻せる者を認め出し、之を表彰し、感謝の意を表するとのことだが、感じたことには感謝狀を頂いて用紙の一に著くや否やキヤラメルを齧めしてゐた。

十枚あるがこれは飛行機にやられたので取換へたとのこと、一體に北滿東滿ルートは滿に關の銃眼が無氣味に見えるのは何時火を吐くかわからぬ位の風景をはらんでゐたためであらうか、それにしても星嶺驛二階の調度に立つ滿鐵驛と同じ構造なる程度であらう。洪水關の後の丘には關兵の裝甲車が建設中で三日後には獨立守備隊の一隊が駐屯するとの事であつた。昭和十二年一月五日から裝設して六日に滿に最滿關が行はれた滿鐵驛員滿時輸送に當つた車掌が待ついて來てくれて二等車の窓から當時の思出を綴かい數字まで加へ乍らしてくれたのには一ぢもかなり心を打たれた。

途中の驛毎に滿から料關された廣、阪岩に大規の關關による石炭液化工場があるとの事で暫ひに滿鐵行の學、家へ滿鐵から滿しい滿へついたら、來るまでに關に滿へ滿へついたら、來るまでに關に滿へついたら、來るまでに關に滿へついたら、來るまでに關に

満洲を巡りて（二）

―旅行メモより

宮澤弘幸

東北滿諸問題

東北道を含んだ東滿は黙々の兵站庫であり作戦基地であり且つ滿洲國軍事の發生地である丈に滿洲の重大な問題をもつてゐる

言を云へば東滿は當局者自身にも不可解な複雑な觀察機能を自々にしてゐるのである。軍事を戰略を戰術の公表は許されないが、東北滿全體の重備が相當なものである事は確である。軍事業も軍事主義で大體計畫通りに戰き始めて來たと云へよう。勿論それと戰をはじくれば種々のものが飛び出して來る。例へば八月九日私達が佳木斯へ向ふ途中に兵若干名をのせた第一輪車の軍隊とすれ違つたが軍隊長の云ふ所によると彌榮村に匪賊が出たので討伐に赴くのだと云ふ。恐らく現地の士を踏んだ人でなければ信じられまいが現地では　またまた戦慄な問題がある

然し今はかゝる方面の記事は避けて移民村自見の所感を述べよう。一體滿洲についての記事には殆ど必ず移民村が登場するのだが、私は北大工學部學生としての立場から敢て臨ぶ臨ぶ道をいふと思ふ

北海道に帰れた私の第一に感じた事は滿洲の移民數の違いは出機根拒のない處にある云ふ點である。勿論滿洲の殺も生活の不安、仕事の苦勞も眞吉に涙し難いものがあらう。然し彼等は兎も角も歎々と聖藏を振つてゐる。國策的決意を持つた優秀な開拓民である點で、特に北海道樺太のそれと一般的に異るこの點で恐らく支那でブラジルのとも異らう。唯々第二世代を負ふべき兵士の體格が問はしくないのは困つた事である

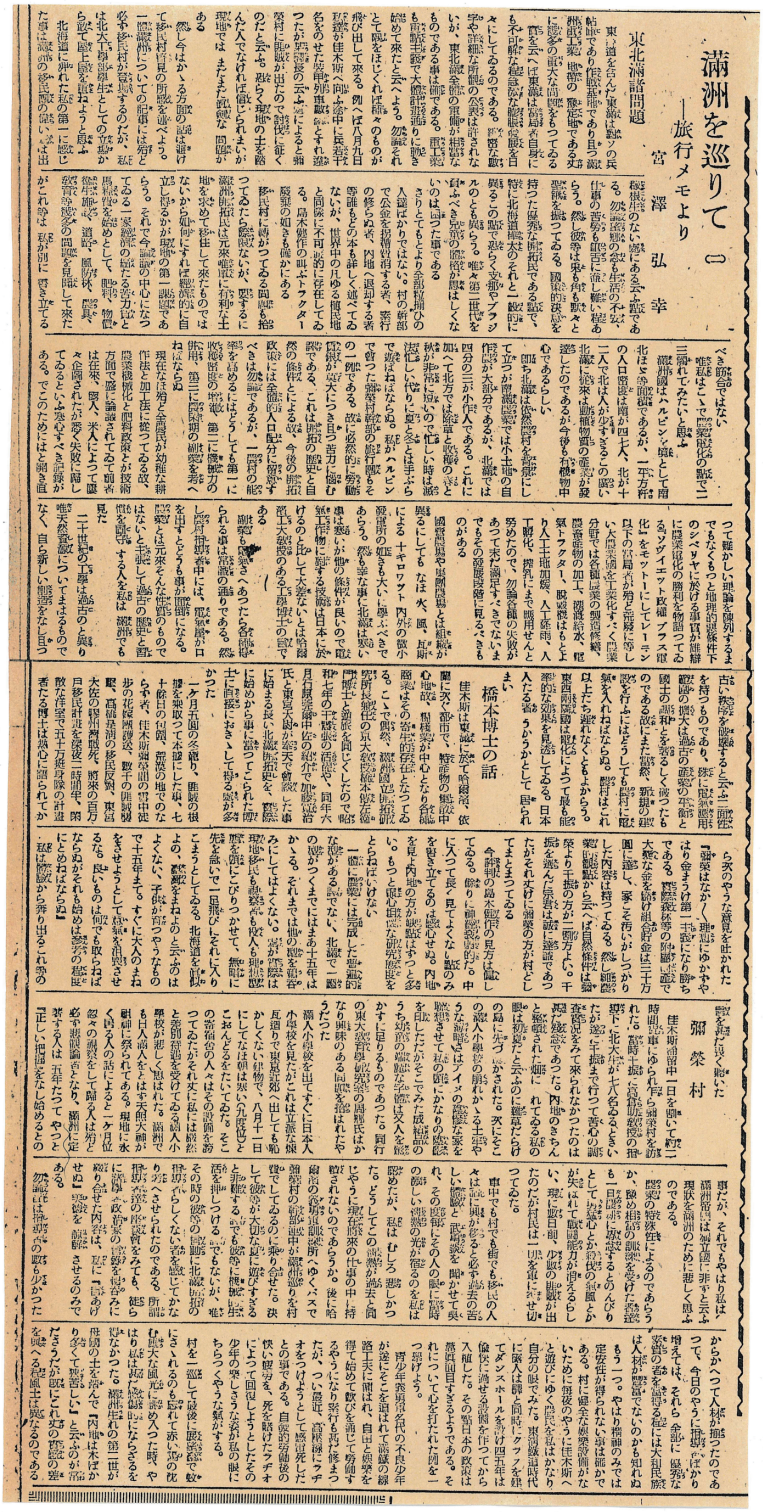
さりとてもとより全部精鋭ひの人達ばかりではない。村の新部で公金を捐物貿易する者、素行の修らぬ者、内地へ退却する者等誰もどの本も詳しく述べてゐないが、世界中の凡ゆる植民地と同樣に不可避的に存在してゐる。島木健作の叫ぶトラクター廢棄の如きも確かにある

移民村に轉がつてゐる問題も拾つてゐたら際限ないが、要するに滿洲開拓民は元來唯一に有利な土地を求めて移住して來たものではないから如何にすれば經濟的に自立し得るかが現地の第一課題である。それで今論議の中心になつてゐる一家經濟の極たる苦力位と馬糧費を始めとして、肥料、物價、燃料、賃金、道路、風防林、農具、教育等幾多の問題を見聞して來たがこれ等は私が別に書き立てるべき筋合ではない

唯私はこゝで農業電化の點で二三觸れてみたいと思ふ

滿洲國はハルビンを境として南北は兵等部隊であるが、一平方粁の人口密度は南が四七人、北が十二人で北は人が少すぎるこの際に北滿に從來は動植物資の產業が發達したのであるが今後も有機物中心であるらしい

即ち北滿は依然農村を經營にして立つが滿洲農業では小土地の自作農が大部分であるが、北滿では四分の三が小作人である。これに加へて北方では鐵道と戰場の寒と秋が非常に短いので忙しい時は滅法忙しい代りに夏と冬とは手ぶらで遊ばねばならぬ。私がハルビンで會つた彌榮村部の旅行團もその一例である。故に必然的に勞働賃銀が莫大につき且つ苦力に極む勞働である。これは開拓の歷史と自然の條件とによる故、今後の開拓政策には全體的人口配分に留意すべきは勿論であるが、一農村の能率を高めるにはどうしても第一に收穫密度の增進、第二に機械力の併用、第三に農業期の副業を考へねばならぬ



現在なほ殆ど全農民が幼稚な耕作法と加工法に從つてゐる故、農業機械化と肥料政策とが技術方面で盛に論議されてゐて聞者は在來、個人、米人によつて農々企圖されたが悉く失敗に歸してゐるといふ寒心すべき記錄がある。でこのためにはと開き直つて難かしい理論を陳列するまでもなくもつと地理的條件下のシベリヤに於ける事實が無辯に農業電化の勝利を物語つてゐる。ソヴイエット政權プラス電化＝をモットーにしてレーニン以下の當局者が殆ど荒廢に等しい大農業國を工業化すべく農業分野では各種農業の製造修繕、農畜產物の加工、灌漑給水、電氣トラクター、脫穀機はもとより人工土地加緩、人工雄雨、人工暢化、擁乳にまで應用せんと努めたので、勿論各種の失敗があつて未だ滿足すべきでないまでもその發展度階に見るべきものがある

國營農場や集團農場とは組織が異るにしても　なほ　火、風、瓦斯による　十キロワット　内外の微小發電所の如きも大いに學ぶべきであらう。然も幸な事に北滿は寒い事は寒いが他の條件が良いので電氣工作物に對する技術は日本に於けるのと比して大差ないとは哈爾濱工大教授のある工學博士の談である

副業も勿論さへあつたら各種得られる事は常識の通りである。然し農村指導者中には、電氣屋が口を出すとどうも事が面倒になる。農業とは元來そんな性質のものではないと主張して過去の歷史と習慣を誤解する人を私は滿洲でも見た

二十世紀の工學は過去の人と異り唯天然資源についてまはるものでなく、自ら新しい能率をなし且つ古い機械を破壊すると云ふ二面性を持つものであり、殊に電氣應用範圍の擴大は過去の產業の平衡と國土の調和とを著るしく破つたものである故にまた當然、新規の建設を行ふにはどうしても農村に電氣を入れねばならぬ。農村はこれ以上たち遲れなくともよからう。東西兩國國は電化によつて最も能率的な効果を見透してゐる。日本人たる者　うかうかとして居られまい

橋本博士の話

佳木斯は東滿に於て哈爾濱、依蘭に次ぐ都市で、特產物の集散中心地故、鐵道業が中心となり各種商業はその寄生的存在となつてゐる。こゝで興然、滿洲國立開拓研究所長鄉任の東大教授橋本博士の鄉和七年の干魃の話題や、同年六月石原完爾中佐の紹介で加藤寛治氏と東宮大尉が奉天で會談した事に始まる長い北滿開拓史を、農業に始めから事に當つてこられた博士に自後におきゝして得る處が多かつた

一ケ月五圓の冬籠り、匪賊の根據を乘取つて本據にした事、七十餘日の包圍、荒蕪の地でのならず者、佳木斯彌榮間の雪中徒歩の花園團護送、數千の匪賊襲撃、高橋大佐の釋州灣戰死、將來の百万戶移民計畫を深夜二時間半、閑散な作業で五十万挺身隊の計畫者たる博士は熱心に語られてから次のやうな意見を吐かれた

「彌榮はなか〳〵理想にゆかずやはり全まうけ第一主義になり勝ちである。農業經營等の附屬建設で大變な金を掛け組合資金は三十万圓に達し、家こそ汚いがしつかりした内容は持つてゐる。然し匪賊の襲撃に對しては自然條件は彌榮より干魃の方が二割方よい。干魃を選んだ農者は誠に達識であつたがそれ丈けに彌榮の方が村としてまとまつてゐる

今評判の島木健作の見方は識してゐる。餘りに神經衰弱的だ。中に入つて長く見てよくなし點のみを書き立てるのは感心せぬ。内地を見た内地の方が地點はずつと多い。もつと眼心的に觀察研究態度をとらねばいけない

一體に農業には完成した理想的な點がある訳でない、北滿で一體の點がつくまでにはまあ十五年はかゝる。それまでは他の點を蔑否にしてはよくない。實が農業は現地移民も勤勞者も投入も理想的に點を強にこびりつかせて、無暗に先を急いで一旦飛びにそれに入りこまうとしてゐる。北海道を訪問の人の、感想をまねよのと云ふのはよくない、子供が育つやうなもので十五年まで。すぐに大人のまねをさせようとして意氣を消費させるな。良いものは何でも取らねばならぬがそれも始めは參考の程度にとめねばならぬ」

私は醫院から奔り出るこれ等の點を聞いた

彌榮村

佳木斯彌榮中一日を動いて約二時間汽車にゆられ乍ら彌榮村を訪れた。當時土振に高橋旅團の指導下に北大生が七八名ゐるときいたが遂に干振まで行つて善心の調査實況をみて來られなかつたのは殆ど遺憾であつた。内地のきちんと整頓された畑にれてゐる私の眼は彼等だと云ふのに雜草だらけの島に先づ驚かされた。次にそこの滿人小學校の崩れかゝる土壁やうな新聞はアイメの醫院な家を聯想させて私の眼にかなりの感慨を印したがそこでみた成績品のうち幼童の端麗な字體は又人を驚かすに足りるものであつた。同行の東大教育學研究室の周藤氏はかなり興味のある問題を拾はれたやうだつた

滿人小學校を出てすぐに日本人小學校を見たがこれは立派な煉瓦造りで東京郡郊へ出しても恥かしくない建物で、八月十一日にしてなほ頭は暴い冗長化とこおんどるをたいてゐた。そこの寄宿舎の人々はその設備を誇つてゐたがそれ丈に私には滿洲の苦勞が想しく思はれた。滿洲でも日人滿人をとはず天照大神が朝廷に祭られてゐる。現地に永く居る人の話によると一ケ月位忽々の視察をして歸る人は殆ど必ず悲觀論者となり、滿洲に定着する人は五年たつてやつと正しい把握をなし始めるとの事だが、それでもやはり私は滿洲留學は滿洲國に非ずと云ふ現狀を滿洲のために悲しく思ふのである。

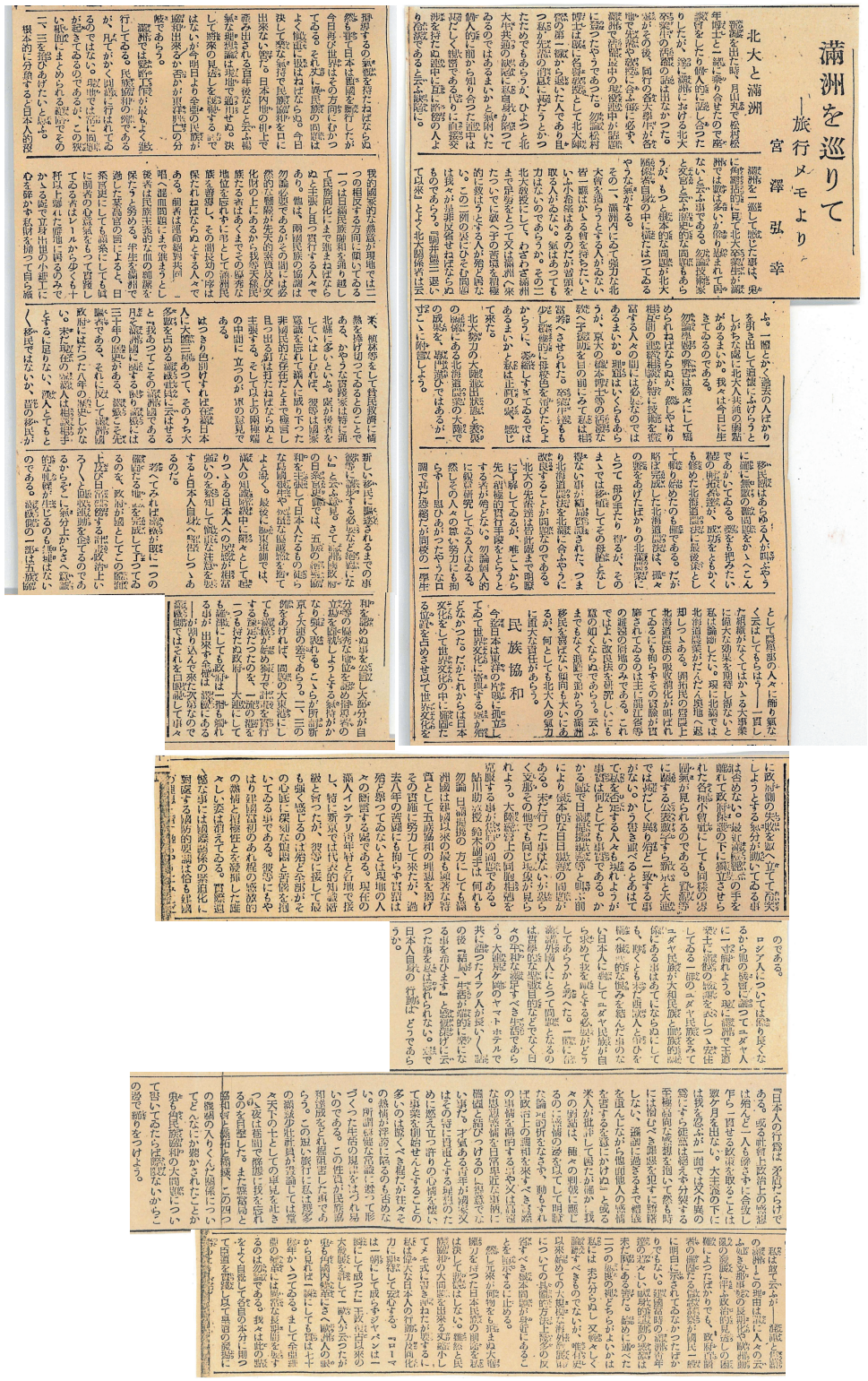
農業の特殊性によるのであらうか、極め相當の訓練を受けた農業も一日醫院に勤務するとのんびりとして居る心とが殺伐の氣風とかが失はれて戰鬪能力が消えるらしい、現に數日前、少數の匪賊が出たのだが村民は一切を重に奪せ切つてゐた。

車中でも村でも街でも移民の人々は誰に興がるを必ず過去の苦しい體驗と戰場談を聞かせて呉れ、その度毎にその人の眼に隱時の激しい戰鬪の光が宿るのを私は認めたが、私はむしろ悲しかつた。どうしてこの戰鬪が過去と同じやうに現在將來の仕事の中に持續されないのであらうか。後に哈爾濱の教育廳訓練所へゆくバスで彌榮村の新部隊中が滿洲通りを村費でしてゐるのに乘り合せた。決して彼等が大切な身に遊びすぎると非難する訳でも彼等に機械的生活を押しつける訳でもないが、唯その時の彼等の言動に北滿開拓の指導者らしくない者を感じてかなり考へさせられたのである。所謂指導者達の座談會をみても、徒らに滿洲の政治家の言葉を聞き、遊び廻りを續け合せた内容は、私に「言あげせぬ」戰鬪を訓練させるのみである。

勿論私は指導者の數も少かつたからかへつて人材が揃つたのであつて、今日のやうに指導者ばかり増えては、それら全部に優秀な素質の者を當得る私には大損民族は人材が豐富でないのかも知れぬもう一つ。やはり精神のみでは定安性が得られない事は確かである。村に優秀な娛樂設備がないために毎夜のやうに佳木斯へと遊びにゆく農民を私はかなり自分の眼でみた。東洲鐵道時代に隣人は歸と同時にクラブを建てダンスホールを設け四五年は偸快に過ぜる設備を作つてから入植した。その點日本の政策は蔑視面目すぎるようである。それについて心を打たれた例を一つ掲げよう。

青少年義勇軍名代の不良少年が遂にそこを追はれて滿鐵の線路工夫に聞はれ、自由と娛樂を得て始めて歡びを通じて勞働するやうになり素行も甚だ修まつたが、つい最近、高橋線にフチオをつけようとして感冒死したとの事である。自然的勞働後の快い疲労を、死を賭けたフチオによつて回復しようとしたその少年の樂しさうな姿が私の眼にちらつくやうな氣がする。

村を一巡して最後に展望臺で蚊にさゝれるのも忘れて赤い雲の沈む眺大な風光に誘め入つた時、やはり私は故に感謝的にならざるを得なかつた。滿洲生れの第二世が母國の土を踏んで「内地は木ばかり多くて驚きしい」と云ふのが常ださうだが既にこれ等の醫院の差を與へる程風土は異なるのである



満洲を巡りて
―旅行メモより

宮澤弘幸

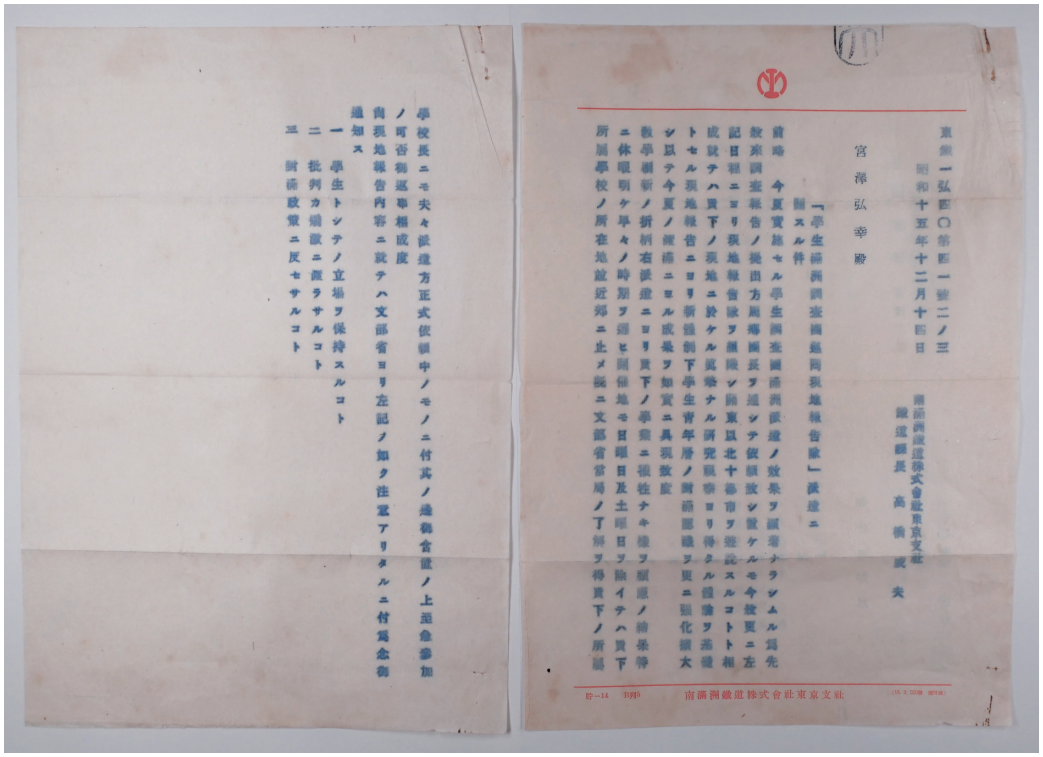
北大と満洲

[illegible]

民族協和

[illegible]

Ⅱ-22　宮澤弘幸「満洲を巡りて――旅行メモより」（1940年）



東第一弘第〇号第二ノ三
昭和十五年十二月十日
南満洲鉄道株式会社東京支社
鉄道部長　高橋威夫

宮澤弘幸殿

「学生満洲調査団並同報告会」開催ノ件

前略　今夏実施セル学生満洲調査団ノ成果ヲ広ク江湖ニ紹介スル為左記日程ニヨリ現地報告会ヲ開催シ以テ学生青年層ノ満洲認識ヲ更ニ強化拡充セントスル所存ニ有之候間貴下ノ学業ニ支障ナキ様ヲ御斟酌ノ上参加ノ可否御返事相成度候

尚現地報告内容ニ就テハ文部省ヨリ左記ノ如ク注意アリタルニ付為念御通知ス

一　学生トシテノ立場ヲ保持スルコト
二　批判力ヲ涵養スルコト
三　時局政策ニ反セサルコト

学校長ニモ夫々派遣方正式依頼中ノモノニ付其ノ通御含置ノ上参加ノ可否御返事相成度

尚現地報告内容ニ就テハ文部省ヨリ左記ノ如ク注意アリタルニ付為念御通知ス

一　学生トシテノ立場ヲ保持スルコト
二　批判力ヲ涵養スルコト
三　時局政策ニ反セサルコト

記

現地報告講演映寫會日程
開催期、場所竝學生ノ配置（〇印ハ座談會併催箇所）

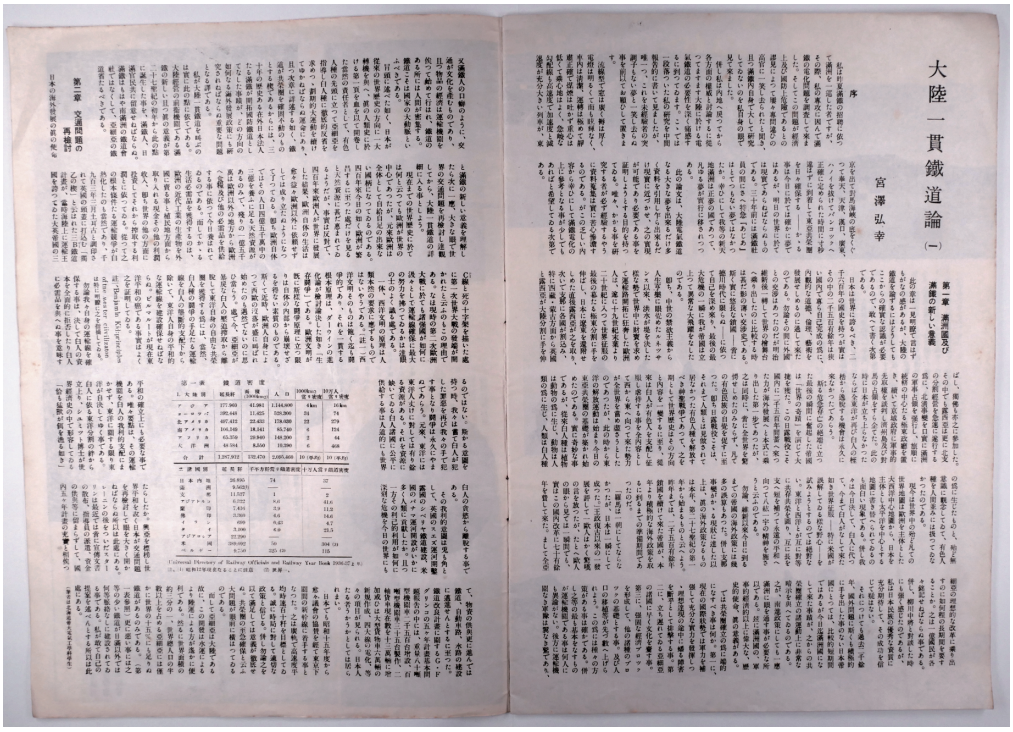
一月一三日　月曜　横濱　中村辰夫（日大工）鍋島日出夫（早大）
〇一六日　木〃　仙臺　坂倉又左衛門（東北大）周郷博團長
一八日　土〃　盛岡　〃　〃
一九日　日〃　函館　上野富造（東商大）　〃
二一日　火〃　小樽　宮澤弘幸（北大）
〇二二日　水〃　札幌　〃
二三日　木〃　山形　坂倉又左衛門（東北大）
二五日　土〃　新潟　張漢卿（東商大）川田秀夫（東大）
〇二六日　日〃　高岡　日高哲三（京大）山崎貞純（大阪商大）
高岡　飯尾堅（大阪日大）

二　經費
旅費、宿泊料一切當社負擔
三　監督ノ方法
當社員隨行ノ上一行ノ指導ニ當ル

滿鐵招聘學生滿洲調査團

團長　東京帝國大學文學部助手　周郷博
團員　（經濟）東京商大　上野富造
（工業）日大工學部工業化學科　中村辰男
〃　北海道帝大工學部　宮澤弘幸
〃　大阪商大　山崎貞純
（鑛業）京都帝大農學部　日高哲三
（農業）東京帝大　川田秀夫
〃　早大法學部　鍋島日出男
（文化）東京商大　張漢卿
（一般）日大大阪專門學校商學科　飯尾堅
〃　東北帝大法學部法科　坂倉又左衛門
〃
〃
（順序不同）

Ⅱ-23　満鉄招聘学生満洲調査団の報告会通知（1940年12月）



大陸一貫鐵道論（一）

宮澤弘幸

第一章　滿洲國及び滿鐵の新しい意義

序

私は昨夏滿鐵の招聘に依つて滿洲を一巡した者ですが、その際、私の專攻に因んで滿鐵の電化問題を調査して來ました。そしてこの問題が經濟上及び國防上危險であるとの謬見によつて屢々專問違ひの高官に一笑し去られたと聞き、且つ滿鐵内自身で大して研究してゐないのを私自身の眼で見て來ました。

併し私は内地へ戻つてから各方面の權威と討論するに從つてますます大陸に於ける電氣鐵道の必要性を深く痛感するに到つてゐます。こゝでは一段落ついた私の研究を中間報告的に書いて見ましたが、唯一つ、これを未經驗者の突調子もない夢と一笑し去らぬ事を前以てお願ひして置きます。

流線型で窓は廣く褥は厚く電燈は明るくて面も眩暈なく、車内は清潔、運轉は極めて靜肅正確で煤煙は吐かず重心は低くて乘心地はよく、急峻な勾配線も高速度で加速度と減速度が充分大きい列車が、東京を出て對馬海峽の底をくぐつて奉天、天津、漢口、廣東、ハノイを抜けてバンコックへ正確に定められた時間に寸秒違はずに到着して東亞共榮圈を日々確保する――かゝる事は今日に於ては確かに夢ではあるが、明日の世界に於ては現實であらねばならぬものである。三十年前には滿鐵社員の間にさへ特急「あじあ」はとてつもない夢ではなかつたか。幸ひにして我等の新天地滿洲は正夢の國であつて、凡ゆる夢が實行に移されつつある。

此の論文は、大陸電氣鐵道なる大きな夢を出來るだけ多く資料を引用し乍ら出來るだけ現實に近づかせ、之の實現が可能であり必要である事を証明しようとする目的を持つてゐる。唯々、かかる事を研究する者が必ず經驗するやうに資料蒐集は實に苦心慘澹するものである。がこの乏しい内容から幸ひにして滿鐵電化の上に參考となる事が少しでもあればと希望してゐる次第である。

第一章　滿洲國及び滿鐵の新しい意義

此の章は一見明瞭で言はずもがなの感があるが、大陸の鐵道を論ずるにはどうしてもここからの確實な認識が必要であるので、敢へて書く次第である。

日本は世界に誇るべき、二千六百年の國史を持つが實はその中の二千五百有餘年は狹い國内で專ら自己完成の爲に、内觀的な道德、倫理、藝術を發展せしめるのに過して來たのである。勿論その間に外國との交渉はあつたのだが明治維新後一轉して世界の檜舞台へ乘り出したのに比較する時は甚だ影の薄い交渉史である。斯く實に悠長な鎖國――昔に德川時代に限らぬ――に依つて自己を深め來り、最後の最大危機の一瞬に我が帝國は立上つて異常な大飛躍をなしたのである。

即ち、中世の禁欲主義から人生享樂に眼覺めたルネッサンス以來、淡水が堤を決した樣な勢で世界中に財寶を求めて運輸路開拓に狂奔した歐洲人は、遂に十九世紀末葉より二十世紀に入つて世界征服の最後の幕たる極東分割に手を伸ばし、日本に遼東を還附せしめた直後露西亞が之を取り、次いで支那に各國が割込み、特に西藏・蒙古方面から英國と露西亞が大陸分割に手を伸ばし、獨佛も亦之に參加した。その中でも露西亞は更に北支の分割經營を急速に遂行する爲に、北滿事變を口實に滿洲の軍事占領を强行し、旅順に統轄の中心たる極東政廳を置き、續いて京城政府に軍事的先取權を談判し濟州島及び對馬の占領をすら企てた。此の時に日本が立ち上らなかつたならば全東洋が再び白人の桎梏から逸脱する機會は永久に來なかつたであらう。

斯る危急存亡の絶端に立つた最後の瞬間に奮起した帝國は「世界の奇蹟」を演じて大捷を獲た。この日露戰役こそ國内に二千五百年間蓄へ來つた力が海外發展へと本式に乘り出した第一歩であつたが、之は同時に、當に全世界を驚愕せしめたのみならず、凡ての有色民族の自覺を促すに至つた。即ち日露戰役こそは、それまで人類とは見做されて居なかつた有色人種を解放すべき神聖戰爭であつて、之を期として世界歴史はその方向と内容を一變するに至り、從來は白人が有色人を支配し征服し奉待する事を全内容として西から東へ向つて來た勢力が全世界を當め盡さうとしたのであつたが、此の時から東洋の解放運動は始まり今日の東亞共榮圈の基礎が築かれ始めたのである。實に奇妙な事であるが、從來白人種は植物は動物の爲に生じ、動物は人類の爲に生じ、人類は白人種の爲に生じたものと、殆ど無意識に觀念してゐて、有色人種を人間並みには扱つてゐなかつたのである。

現今は世界中の殆ど凡ての世界地圖は歐洲を主体とした大西洋中心地圖から、日本を主体とし太平洋を中心とする地圖に書き替へられてゐるのも面白い現象である。併し我々は今日決して、白人に代つて、今まで白人がなして來た如き世界征服――特に米國が誤解してゐる樣な野心――を試みようとするのでは絶對ない。東洋と西洋とが互に對等に共存共榮を圖り、互に長を支へ短を補つて永遠の平和へ向つて八紘一宇の精神を施さうと云ふのである。

勿論、維新以來今日に到るまでの帝國の海外政策には幾多の誤算もあつた。併し支那事變がかゝる現狀に達した以上は、眞の海外政策なるものは本年、第二十七聖紀の第一年から始まるものと云へよう。昨年までは、二千五百有餘年鎖國を續けて來た帝國が、本年より積極的な海外政策を取るに到るまでの準備期間であつたのだ。

「羅馬は一朝にしてならなかつたが、日本は一瞬にして成つた。」王政復古以來の一發展を評して一歐人はかく驚嘆の言を放つたが、たとへ歐人の眼から見ては一瞬間でも、實はこの國内改革に七十有餘年を費して來た。まして全亞細亞の理想的な改革に乘り出すのに如何程の長期間を要することか。之は一億國民が各々銘記せねばならぬ事である。併し、柳川中將と對談した時にも强く感じたのであるが、私は日本民族の優秀な資質に充分期待して、その成功を信じて疑はない。

それにつけても過去二千餘年、國外問題に斯くも積極的に手を出した事のない日本帝國にとつては、比較的短期間ではあるが今日迄滿洲國になして來た事蹟が、之からの共榮圈確立の諸運動上に非常な暗示を與へてゐるのである。之が、南進政策にしても一應滿洲に眼を通す事が必要な所以である。茲に滿洲國の、軍事的經濟的以上に偉大な、歴史的使命、眞の意義がある。

では共榮圈確立の爲に端的になすべき事は何か。第一に、現在の國際狀勢では軍力を補强して充分な實力を發揮しつゝ理想達現の途中に蟠る障害を斷平として排撃する事。第二に、立ち遲れてゐる亞細亞の諸國に早く文化を齎す事。第三に、强固な經濟ブロックを形成して、他の諸種のブロックの基礎とする事。及び人口の移植等が先づ數へ上げられよう。この爲には種々の方策がある事は確かである。併し之等の最も基本をなすものが運輸機關である事は何人にも異論がない。後方に運輸機關なき軍隊は翼なき鷲であり、又滿鐵人の口癖のように、交通が文化を産むものであり、且つ物品の經濟は運輸機關を俟つて始めて行はれ、鐵道のある所には人間が密集する。鐵道こそは國家の大動脈といふべきである。

冒頭に述べた如く、日本が從來の世界歴史の方向に一大轉機を與へ、眞の人類史に於ける第一頁を血を以て開卷した當然の責任者として、有色人種の先頭に立つて亞細亞を指導し白人種に徹底的反省を求めつゝ、劃期的大運動を續けてゆかねばならぬ運命にあり、且つ次章に詳述する如く、鐵道が共榮圈を確固不動のものとする機であるからには、三十年の歴史ある在外日本法人たる滿鐵が開拓國防鐵道としてなした事蹟が、どの方向の如何なる海外發展政策にも研究されねばならぬ重要な問題となる譯である。

私が大陸一貫鐵道を叫ぶのは實に此の點に依てである。大陸經營の前衛機關である滿鐵の新しい且つ眞の意義が第二十七聖紀の初年から此の點に誕生した事を、滿鐵人、日滿官民共に留意せねばならぬ。滿鐵はもはや南滿洲の鐵道會社ではなくして、亞細亞の鐵道省たるべきである。

第二章　交通問題の再檢討

日本の海外發展の眞の使命と滿鐵の新しい意義を理解したら次に一應、大きな眼で世界の交通問題を再檢討し達觀してから、大陸一貫鐵道の詳細に入る事としよう。

現在までの世界歴史に於ては何と云つても歐洲が世界の中心であつたが、元來歐洲は全体として自給自足の出來ない國柄になつてゐるのである。四百年來今日の如く歐洲が繁昌するに至つた處だけを見ると天然資源に甚だ惠まれてゐるようだが、事實は反對で、四百年來歐洲人が世界に發展した結果、歐洲自体の生活は愈々益々歐洲以外に依賴せずしては成り立たぬようになつて了つてゐる。即ち歐洲自体ではその人口四億五千萬中の三億を養ふに足る天然資源があるのみで、殘りの一億五千萬は歐洲以外の地方から歐洲へ食糧及び他の必需品を供給する事に依つて今日養はれてゐるのである。而してかゝる生活必需品を獲得するのは、歐洲の近代工業の生産物を外國に賣る事と植民地方面から取り入れる現金その他の利潤收入、即ち世界の他の方面に投資してそれから搾取する利潤とに依つてゐる。從つて之の根本條件たる運輸競爭が自然化したのも當然であり、千九百三年三月土耳古と調印されて英國の頭蓋に打込む「獨乙の楔」と云はれた三B鐵道計畫が、當時海陸上に運輸王國を誇つてゐた大英帝國の三C線と死の十字架を描いた處に第一次世界大戰の發端が開かれたと云ふのもこの理由である。なほ現時の第二次歐洲大戰に於ても諸强國が如何に汲々として運輸線確保に最大の努力を拂つてゐるかは達眼の士のよく識る處である。

一体、西洋文明の原理は人類本然の要求に應ずるものではないやうである。（註一）西洋文明そのものは飽く迄も競爭的であり、それを一貫する根本原理は、ダーウインの進化論が檢討論決した如き「生存競爭」である。歐洲文明が既に斯樣な競爭原理に立つ限りは自体の内部から崩壊せざるを得ない素質のものである。斯くて近時、歐洲人自身によつて西歐の沒落が盛に叫ばれ始めたのも遺憾でないのに思ひ當らう。處で今、亞細亞が暴戾な白人の壓迫搾取から離脱して東洋自身の自由な共榮圈を獲得する爲には、當然、白人種の競爭の手足たる運輸線を白人の壟斷的支配下から除いて、東洋人自身の平和的な運輸線を建設確保せねばならぬ。ビルマルートが現在東洋平和の癌である事實はよく之を証明してゐる。

註「Benjamin Kiltpriscipies of the Western civilization」は特に明瞭に之を指摘してゐる。

勿論我々自身の運輸線を確保する事は、決して白人の資本を全面的に拒否したり白人に必需品を與へぬ事を意味するのではない。斯かる意圖を持つ時、我々は嘗て白人が犯した罪惡を再び我々の手で犯す事となり競爭は永久にやまぬであらう。元來、東洋には東洋人丈けに對しては有り餘る資源がある。それを資源に缺いてゐる白人諸國に公平に供給する事は人道的にも世界平和の確立上にも必要な事である。唯々要點は、その運輸機關を白人の我利的支配にまかせず、東洋に關する限り東洋が自決してゆく事である。白人に依る東洋分割の絆から立上り、シュミット博士が世界經濟史の中で形容してゐる「恰も猛獸が餌を漁る如き」白人の貪慾から離脱する事である。

その我利的意圖は兎も角として、英國のスエズ運河開鑿露國のシベリヤ鐵道建設、米國のパナマ運河開設がいかに多く人類に貢獻したか。且つ一方その利己的利用が如何に深刻な危機を今日の世界にもたらしたか。興亞を標榜し世界平和を說く日本が交通問題を再檢討して眼を大きく開かねばならぬ所以は此處にある。レーニンの後をついだスターリンは最近では昔に宣傳文書の散布、指導員の派遣、資金の供與等に留まらずして、國内五ヶ年計畫の充實と相俟つて、物資の供與更に進んでは鐵道、自動車路、水路の建設に邁進せんとするに至つた。鐵道改良計畫に關するG・Fグリンコの五ヶ年計畫基本問題報告の中には、重量八十噸型機關車二千五百台增設、百噸型機關車三十五台製作、二軸貨車現在數を十三萬輛に增加或ひは大型貨物車六萬輛の新規作成、四大線の電化、等々の項目が見られる。日本人たる者うかうかとしては居られまい。

日本でも昭和十五年度から愈々議會の協贊を經て東京下關間の新幹線に着手する事となつた。之は廣軌で高速度平均時速百十粁を目標としてゐる。誠に時局に對して適切な政策と信じる。併し勿論之を以て滿足しては意義が徹底せぬ。共榮圈の至急確保と云ふ大問題が眼前に横はつてゐるのである。

而して亞細亞は大陸である故に、この開發は水運によるより陸運による方が遙かに便利である。然るに世界面積の約三分の一、世界總人口の半數以上を占める亞細亞には僅かに世界の十五%にも足りぬ鐵道があるのみである。（第一表參照）更に惡い事には之等の少い鐵道が日滿以外では何等脈絡なしに建設されてゐる事である。私が敢て自己の提案を述べんとする所以は此處にある。

（筆者は北海道帝大電氣工學科學生）

上大陸別	延長粁	面積（1000km²）	人口	1000km²當り密度	10万人當り密度
アジア	177.960	41.981	1,144,800	4km	16km
ヨーロッパ	392.448	11.425	528,200	34	74
北アメリカ	497.412	22.433	178,030	22	279
南アメリカ	106.349	18.541	85,740	6	124
アフリカ	65.359	29.940	148,200	2	44
大洋洲	48.584	8.550	10,290	6	468
合計	1,287,912	132,470	2,095,460	10（平均）	10（平均）

三津國別	延長粁	千平方粁當り鐵道密度	十万人當り鐵道密度
日本内地	26.895	74	37
滿洲	9.562(1)	—	—
支那	11.527	1	2
アジアトルコ	6.222	8.6	41.6
蘭印	7.434	3.9	11.2
佛印	3.369	4.6	14.6
イラン	699	0.43	4.7
タイ	3.000	4.9	23.5
アジアロシア	22.290	—	—
米國	389.092	50	304 (2)
ベルギー	9.750	325 (3)	115

Universal Directory of Railway Officials and Railway Year Book 1936-37より。
(1)、(2)昭和12年現在なることに注意　(3)異常。

Ⅱ-24　宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（一）」（1941年）

大陸一貫鐵道論（二）

宮澤弘幸

第二章　ルートについて

以上述べて來た事により、大規模な大陸鐵道が至急、亞細亞の盟主日本の手によつて建設されねばならぬ事が了解出來たと思ふが、更に第四章で説明する通り之は電氣鐵道を主としたものでなければならぬ。この電化の提議が決して私の專制に對する自己滿足的な我田引水でない事を次章で詳述する積りであるが、然らばどう云ふ線が目下の大陸に最も必要であるかを本章で論じたいと思ふ。

（一）根幹線

東京―（對島海峽底隧道）―奉天―天津―漢口―廣東―ハノイ―バンコック

之は東亞の最重要部を縫ふ、共榮圈の大動脈たるべき線である。

一體、支那は農業國である。支那人民の八割は農業に從事してゐる。然も支那の輸入品の大部分は米、棉花、小麥、木材・葉煙草等支那全體から見れば有り餘つてゐる農產品である。又支那は恐らく世界一の石炭埋藏國であらうが、然も年々莫大の石炭を支那は輸入してゐる。此の矛盾は結局、交通機關の發達が不十分なるに歸せられる。昭和十六年二月の帝國議會では、高度國防國家建設の基本は鐵、石炭、その他の重要物資の增產自給と食糧の自給自足にあつて、少くとも内外を通じて石炭一億噸、鐵鑛一千萬噸及び水力電力の開發、國民食糧の自給確保が一日も遠く達成せられねばならぬと提唱されて、全議員一致の贊意を得た。

この點で本線は資材勞務の配給を圓滑適正ならしめ產業計畫に新機軸を劃す事は瞭かである。然も之は昔に支那本土の資源開發、支那市場の擴大、日支のみの共存共榮を計るのみでなく、亦、全亞細亞、を一歩ひきあげて東西南北の文化交通を確實な地盤でなさしめる爲の最も基本的な線である。北進なすべし。未だ開かれざる資源地帶が荒漠として橫たはり、米露の壓迫は日毎に無言の中にも增して來てゐる。北進政策の背後にはこの大幹線があつて如何なる經濟的軍事的負擔にも耐へるであらう。南進また大いになすべし。日本は年々百萬の人口增殖に悩んでゐる。然るに大陸には人口稀薄の沃野が展開してゐる。この大幹線は、南へは人と文化を、日本へは日々の生活必需品の原料をどんどんと運ぶであらう。

ましてこの大幹線の持つ精神的意義に於ては喋々の要はあるまい。日・滿・支・佛印・泰の諸國民はゆるぎなき楔によつて密接に結びつけられるのである。

此の線が電氣鐵道でなければならぬ所以は次章に詳しく述べるが、簡單に云ふならば一般に幹線運轉の改善は主として列車の總本數より列車速度の昂上と、直通列車の本數增加とにあるからである。

處で此の線は日本鐵道省、滿鐵、華北交通、華中交通等幾多の別個の團體に分割されるのである。新支那の例で云へば、軍事行動が北支と中支とで別々に始められたように、そして又地理的、經濟的及び政治的環境が異つてゐるのに從ふかのやうに、鐵道の接收も南北異つた系統の手によつて行はれ、今日も別々の國策會社によつて運轉されてゐる。

一體、現在歐洲各地でみられる國際列車や米國にある如き數種の異系會社線を一貫する列車等の例に徵しても、起點から終點まで經營者が變る事は全然不都合ではない。唯々大切な事は之等の異系の經營者達が緊密な連絡を取つて、東京を出た旅客又は貨物列車が乘替や遲延なしにバンコックへ着く事である。

この幹線が餘りに長いのを見て、實現され得ぬ夢と蔑笑し去る人があるかも知れぬ。だがもつと長い英國の三C線の存在する事を忘れてはならぬ、又嘗て英國鐵道界の權威者モーレンは埃及のアレキサンドリヤから上海へ抜ける一萬二千五十粁の大鐵道を計畫し、孫文は亡命中民國十年に鐵道十萬哩、鋪裝道路百萬哩を計畫して國民政府がそれに準據した實行をし始めた事もある。然も今日既に東京下關間には廣軌の新幹線が建設され始め、且つ釜山から廣東まではレールが續いてゐる。あとは之を電化し、且つ廣東からバンコックまで延長すればよいのである。即ち之は到達し得ぬ夢ではなくして明日からすぐ實行手段に移せるものである。

なほ對島海峽の隧道、この幹線建設の爲の費用及び年限、並びに沿線の地勢に關しては後に項を改めて述べる事としたい。

（二）第一支線

大連―ハルビン間の四粁を大陸一貫鐵道の第一支線として先づ電化せねばならない。既設蒸氣鐵道の電化に依り得らるべき利益に關しては種々の意見がある。私は眞に眞剣な氣持で之を滿鐵社員諸賢に提唱したいと思ふのだが、既に施設せられたものを變更せんとする場合には常に之に對し嫌ふ感情が伴ふのが自然であつて、世界の鐵道電化史を調べてみても、今日なほ蒸氣運轉の支持者が鐵道の電化に對し此の態度を示すのも稀ではない。

電化問題の詳細な討議については次章に讓る事とし、此處では特に滿鐵に關する分だけを述べてみたいと思ふ。

電化を是認する爲には蒸氣から變更する爲に要する附加資本に對し相當の利益が上る見込みが立たねばならぬ。鐵道電化は多くの利點を有するがそれは必ずしも凡ての場合に經濟的に是認されるとは限らぬ。從つて各種の因子を充分考慮するを要するのであるが、結局地方的條件の爲に非常に異つた理由が電化の決定を左右する事にもなるのである。

滿鐵の大連ハルビン間の電化に關する限りは、その主要目的は、石炭の經濟と輸送力の增加とに要約出來る。速度とか快速性とかは第二義である。

滿鐵は海順なる大炭礦を所有してゐる故、石炭資源の缺乏による値上りは考慮せずともよいが、現今海順炭は採掘量に於て既に峙を越した事は滿鐵人凡てが承知してゐる通りである。然も他の炭山は凡て各種重工業その他に割り充てられて少しの餘裕もない。從つて現狀のまゝにあれば自然、滿洲外の供給に賴らねばならなくなる。今日此の狀態にある事は、佛・伊・瑞典・瑞西に於ける程極端ではないにせよ相當危險な事であり、特に共榮圈全體の計畫產業に支障を來たす事おびたゞしい。滿洲に於てもなほ水力發電所の資本負擔は莫大な爲に實際の動力費は安價な石炭を利用し得る汽力發電所より安い事は稀であらう。從つてその利點は無盡藏の水力を先づ利用する事にあるので、水力電氣の價格にあるのではない。なほ石炭に關する詳細な議論は重複を避けて次章に讓る。

次に輸送力問題である。大連港は元來滿洲農產物大豆・豆粕・豆油を中心とする特產品の輸出港として東洋に冠絶した港灣設備を有し且つ滿洲沿岸線の短少や良港の僅少等に依り獨自の使命を擔ひ累年呑吐數量を增加しつゝあつたが、今事變を契機とし關東州が大陸に對する據點として再認識されるに及び從來の如く特產品の輸出港として敬盛を誇るのみならず、滿洲開發資源に要する重要物資の輸入港として、又聖戰遂行途上の大陸に對する特殊港として輸入貨物は昭和七年に比し昭和十四年度の四倍に激增し遂に昭和十三年四月に於てすら埠頭及び鐵道に百五十萬噸の滯貨を生ずるに至つた。（註一）勿論之は滿鐵輸送陣の手薄のみに歸せらるべきでない事は明かであるが、兎に角滿鐵創業以來の滯貨を見、未曾有の輸送難時代に逢着したのである。大連港勤務の社員諸君は蒸氣機關車の入れ換へがどれ程無駄な時間と勞力を空費するかをよく感じて居られる事と思ふ。

（註一）昭和十五年八月九日弘報課發表の大陸資料「大連港の滯貨問題」に詳細な數字がある。

なほ旅客輸送上に於ても此の線は既に行きつまつてゐる事は奉天大連間を旅行した者は誰でもうなづけやう。

次章に述べる如く、石炭及び人的資源を節約し速度及輸送力を增加し旅行を快適ならしめる電氣鐵道こそ大滿洲國のこの第一幹線を完全にならしめるであらう。滿鐵二十萬社員の賢明な認識を乞ふ所以である。

その外東邊道及び北滿の電化問題も興味ある研究題目であるが之については機會を改めて述べる事としよう。

（三）第二支線

奉天―張家口―包頭―甘州―肅州―ハミー庫車―カシガル―タシュクルガン―カンダハル―テヘラン―バグダット

之は從來の「支線」の觀念を遙かに超えた長大な線で歐亞を結ぶ軸である。即ちバクダットからは歐洲の各都市へ容易に聯絡される譯である。今日、奉天から包頭までは少距離の延長と改修で直達せられるが、包頭からバグダッドまで七千四百七十四粁（註）間は全然の新設工事である。之は既に熱心な提唱者も數名居る。彼等の研究によれば十二億圓位掛かるそうであるが、之は費用の章で詳しく述べよう。この線全部に電動力を使ふ事は云ふは易いが正直の處甚だ實行に困難であるから電化は一部分に留まらう。今日東京から伯林まではシベリヤ經由で十四日、スエズ經由で四十二日、米國經由で二十四日を要するが、此の線完成の曉は東京伯林は一萬六千粁の距離となり九日で行ける事となら う。之は當然シベリヤ鐵道に對抗する防共鐵道である。

（註）渇本昇氏は中央亞細亞橫斷鐵道論はよく研究してゐる。

現在のシベリヤ鐵道は信書や輸出入品を信賴して托送品來ず、旅客輸送も亦不愉快極まるものであるのは萬人周知であるが、シベリヤ經由の歐亞連絡が圓滑性と誠實性を缺いてゐると不平をこぼすより、東洋人自身の鐵道を建設すべきである。蓋し海路の如き迂回線のみでは之からの世界には間に合はない。

元來亞細亞の北邊を一周するシベリヤ鐵道は斷じて亞細亞救濟の意圖はなく、亞細亞十一億の民衆を、不動金縛りにして自由を永久に奪はんとするにある事は、日滿が過去に何回この軌條提携をしようとして、失敗したかを省れば判然としやう。建設者たるロマノフ王朝の壞滅後もなほ專ら東洋赤化の道具としてのみ使用され全く他國に對して封鎖されてゐる。

赤露の投げかける支那問題を解決するには先づその根據である中央亞細亞問題と、亞細亞土耳古に關聯した西部亞細亞問題とから入らねばならない。露西亞が赤色帝國主義の下に實行補助手段として如何に多くの鐵道を此の地帶に建設せんと計畫してゐるかを考へる時、我々はどうしても中央亞細亞を貫通する防共鐵道を必要とする。

然も幸ひにして此の防共鐵道の貫通地帶は、共產主義と永炭相容れぬ敬虔な回教徒一億七千八百萬の住居地帶である。昔砂漠の王者たる回教徒は駱駝を使用し交通民族として興隆し、當時の歐洲文化を盡かに凌いだサラセン文化を作りあげた。即ち彼等が最も多く住む西部亞細亞及び中央亞細亞の地は隅々東西交通の要衝に當り、彼等は此の地で支那の絹玉等を西方に運び或ひは西洋の工藝品を東洋に傳へる等東西の交易を助けつゝ、自ら亦その文明を吸收して自己の文化を發達せしめた。然るにその後東西の交通は印度洋とシベリヤに移された爲、彼等は交通民族としての地位を滑つて今日の如く沒落して了つたのである。故に此の回教徒に昔の繁榮を取り戻させ全世界中の三億二千萬信徒の地位を向上させるには中央亞細亞橫斷鐵道を建設するに限る。

中央亞細亞は斯く歴史的にみても歐亞交通の要衝に當るのみならず又世界稀にみる資源地帶である。新疆省特にタルバクタイ山脈南側の石炭及鐵鑛、石油、金、アフガニスタンの農產物、イラン、イラクの石油等々此の沿線は現時の世界で恐らく最も資源が豐富な未開發の秘境で、人口移植上も有望でシベリヤの如き荊北無人の野を行く貧弱な鐵道とは比較にならない。

此の線を建設するに當つて技術的難點を如何に征服すべきかは第六章に述べよう。

（四）第三支線

ハノイ―昆明―會理―昌都―吉丁西林―布隆臺―アヤクムリリ湖畔―車爾―于闐―和闐―葉爾羌―カシガル

之は總延長約五千八百粁で、大谷先瑞師の計算に依ると總工費約八億圓である。之は世界有數の礦產地帶を縫ふもので、石油、石炭、水力皆豐富故、ディゼール電氣機關車でも水力による電氣機關車でもよいが、勾配がかなり急故、蒸氣機關車ではいけない。恐らくはディーゼル電氣機關車が最良と信ずる。何故なら架空電線は要らず寧靜の石油がそのまゝ使へるから。

（五）第四支線

ハノイを起點としてビルマを抜けカルカッタへ出る線

之はカルカッタから英國系の諸鐵道と提携して印度及び阿弗利加と聯絡をとる線である。印度の獨立運動と阿弗利加の有色人種問題が世界の注目を浴びてゐる今日、東洋及び有色人種の盟主日本に是非とも必要な線である。

この線の建設が含む諸問題を論じてゐると餘り長くなり且つ今日の滿鐵とは大分離れた問題となるから此處では唯々暗示の程度に留める。

（六）その他の鐵道

以上述べたのは長年月を要する遠大な計畫のみであつて此の他東洋地圖を睨んでゐると幾多の小線が必要となつて來るのが感じられよう。例へば石炭と鐵の永定河線、石炭の滄石線等々枚擧に暇ないが、之等は現に當局者が實行に移りかけてゐるから今回は割愛して置く。（筆者は滿鐵招聘學生の一人で北海道帝大電氣工學科生）

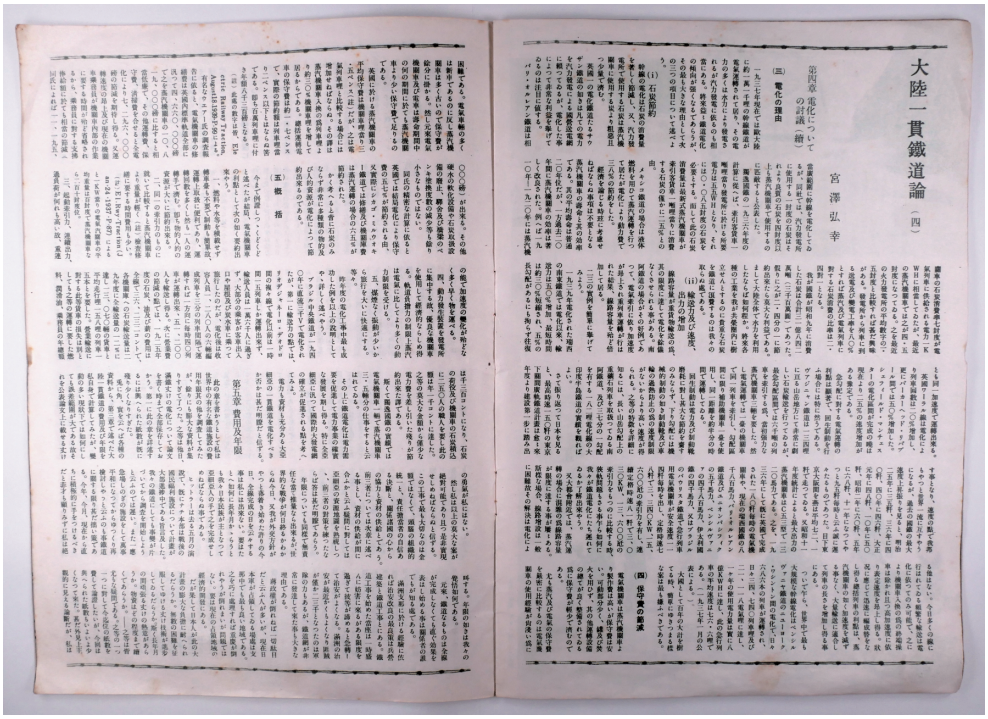
Ⅱ-25　宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（二）」（1941年）



大陸一貫鐵道論（三）

宮澤弘幸

Ⅱ-26　宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（三）」（1941年）



大陸一貫鐵道論（四）

宮澤弘幸

Ⅱ-27　宮澤弘幸「大陸一貫鉄道論（四）」（1941年）

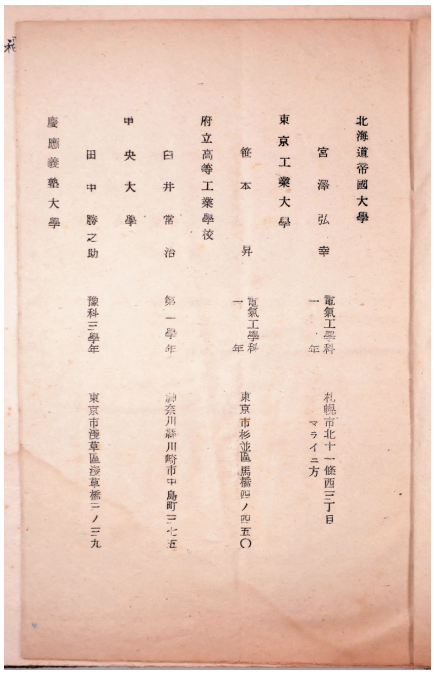


朝から朝まで

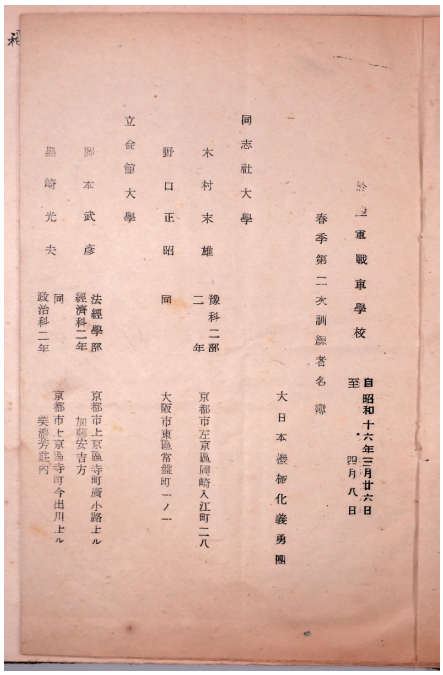
開拓風景

宮澤弘幸

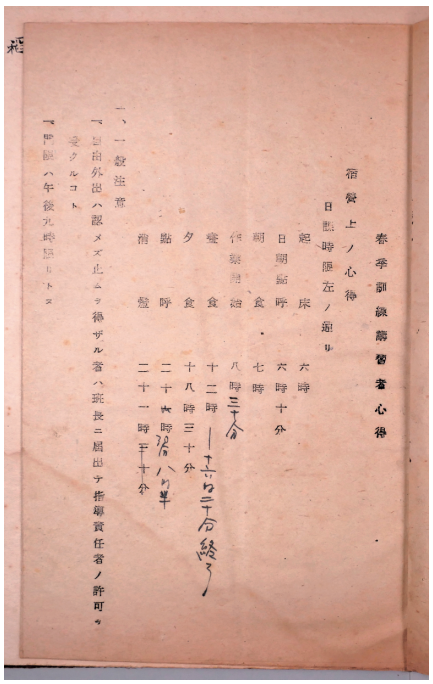
Ⅱ−28　宮澤弘幸「開拓風景　朝から朝まで」(1941年)



北海道帝國大學
宮澤弘幸　電氣工學科一年　札幌市北十一條西三丁目マライニ方
東京工業大學
笹本昇　電氣工學科一年　東京市杉並區馬橋四ノ四五〇
府立高等工業學校
臼井常治　第一學年　神奈川縣川崎市中島町三七五
中央大學
田中勝之助　豫科三學年　東京市淺草區淺草橋二ノ三九
慶應義塾大學



於陸軍戰車學校　自昭和十六年三月廿六日　至四月八日
春季第二次訓練者名簿
大日本機械化義勇團
同志社大學
木村末雄　豫科二部二年　京都市左京區岡崎入江町二八
野口正昭　同　大阪市東區常盤町一ノ一
立命館大學
岡本武彦　法經學部經濟科二年　京都市上京區寺町廣小路上ル加藤安吉方
黒崎光夫　同　政治科二年　京都市上京區寺町今出川上ル美濃芳莊内



春季訓練講習者心得
宿營上ノ心得
日課時限左ノ通リ
起床　六時
日朝點呼　六時十分
朝食　七時
作業開始　八時三十分
晝食　十二時
夕食　十八時三十分
點呼　二十六時
消燈　二十一時三十分
一、一般注意
「自由外出ハ認メズ止ムヲ得ザル者ハ班長ニ屆出テ指導責任者ノ許可ヲ受クルコト
「門限ハ午後九時限リトス



〔上図・左図〕Ⅱ-29　陸軍戦車学校における訓練（1941年3-4月）
〔右図〕Ⅱ-30　陸軍戦車学校での記念撮影（1941年３月）



戦車を習ふ

工學部　宮澤弘幸

陸軍の機械化に關しては諸外國の中で日本が最も遲れてゐると云ふのが世界の定說である。機甲本部なるものがやつと先月誕生したからこそ目下ジヤーナリズムは軍の機械化戰力なるもので持ちきりだが、實際の兵隊の實力はその點でまだ〳〵絶對である。武器は揃つてもそれを運轉出來る兵員が少數では何にもならぬ。これではと云ふ譯で、國民全部に機械化の知識を普及させる目的の下に機械化國防協會なる財團法人が昨年創設された事は既に御承知の事と思ふ。この協會は特に次代を背負ふ學徒を對象とした大日本機械化義勇團なる組織を內部に持つてゐる。

この義勇團が實際事業として、關東、關西の學生六十名を二期にわけて二週間宛千葉縣稻毛の陸軍戰車學校で、戰車及び自動車に關する諸技術を習得させた事は新聞で御覽になつたと思ふが、僕もその一員に加へてもらつて後期の訓練に參加した。

以下その時の所感を求められるまゝに二、三綴つて職責に代へる次第である。

× × ×

三月二十六日から四月八日迄の間に一日休暇があつただけで毎日朝八後半から夕方四時まで日曜も休まずにかなり辛い訓練であつた。その間、日課の大部分は、兵技術校から各種の講義と中隊長級の人から方々の實戰談を聽くのと、實地に戰車を分解し機關を修理掃除する事とであつた。

此處で一番心を打たれたのは、飛行隊に於けるのと同じ樣な整備員は殆ど常に基地に待機してゐるのだからまだよいが、戰車隊のは常に最前線に近い處で然も不足な工具でとてつもなく重いものを取扱ふのだから一層大變であらう。

整備員によると戰車は極端に無理した車だからすぐ故障ばかり起き易くて『スペーナーと兵隊』とでもいふ漫談じみた苦心談を何回となく聽いたが、中隊長によると、戰車はよく出來たもので對戰車砲で眞向からぶちこまれぬ限り滅多に故障する物でないとのこと整備員は何時も使用過ぎで故障の起きた、又は起きかゝつてゐる戰車ばかり見てゐるし、他方、前戰で活躍した中隊長には常に最良條件の戰車が配給されたのだらうからどちらも本當のことを云つたのであらう。然し兎も角兩方の云ひ分を聽いて人間とは面白いものだとつく〴〵感じた。

× × ×

猶この軍事使節にも見せないと云ふ某型の輕戰車と中戰車とを一臺宛、三十人が二組に分れて分解を始めた。大きさが違ふから組立比較は出來ぬまでも自然と操縱は對抗的に伸よく張り合ひ始めた教官は如何にも軍人らしく、くどく〳〵と敎へないから實際がいろいろと自分で考へて仕事をせねばならなかつたが、その代りどうしても分らなかつた事は實に親切に敎へて呉れた。簡潔で徹底的——この點では軍隊式の良さがとても感じかつた。

後期には餘り寒い日はなかつたが、前期の連中の話に依ると、部分品をガソリンの中へどぶりとつけて掃除をすると悲さに涙が出る程の日もあつたとの事。

また擦のすり合せを完全にするのに、金剛砂などをつけて三時間もカタンコトン叩いてやつと出來上つた時は、阿呆みたいな仕事だつただけに成就してその價値を知つた時には、僕等、所謂要領の好い學生に見失はれてゐるあるものを再發見したやうに感じた。

操縱して見れば自動車よりは樂な位。外觀車であつたが、帶で體を腰掛に縛りつけ頭に保護帽を被つて運轉する時、『快適』などと云ふ氣持は全く縁のないものである。一度動き始めると息吹く暇もなく云ふ通りで、人間らしい吾儘さなどは

『車』なる字も『戰』なる字も『事』に關係あるが支那事變長期化の今日戰車學校の附屬工場の忙しさはまた格別であつた。

軍需工場總てに汎つてそうだらうが特に二週間も一緒に居て此處の年若い戰工達が汗をたらして働くことと豚のやうに寢ることとで毎日を過してゆくのを見るにつけ日本の社會福祉施設について相當考へざるを得なかつた。

× × ×

講義も一通り濟んだ時、僕達は廣い原に連れられ戰車をあてがはれて、各自適宜に操縱せよと云はれたきり、敎官はさつさと引込んで了つた。おつかなびつくりと僕達は互に相談し合ひ乍らいぢくり廻し始めた。

丁度連よく訓練期間中に、タイ國全權のワンワイ殿下を歡迎して吾志野で戰車大運動戰の演習が擧行され、それに出席したが、曠野東の兩端から數百の戰車が天地を搖かしながら縱橫に砂塵と共に突進する時は本當に地獄に居るやうな感じである。凄絶な天地を一瞬に阿修羅場と化する戰爭とは何と偉大な現實であらう、斯う考へざるを得なかつた。

出來るだけ容積を少くして出來るだけ武器を多く載せる、乘組員などはどうでもよいので武器が第一である。こんな戰車に乘り込むと途端に學生らしさなど消し飛んでしまふ。

兎も角、僕の操縱は大勢の中でも特に凄絶で、君の戰車は跳り狂つてゐると評されたものだ。

てんで認められない。天性吞氣な僕には耐へられない緻密冷靜な數、數、數の世界だ。

Ⅱ-31　宮澤弘幸「戰車を習ふ」(1941年)





〔左図〕Ⅱ−32　「大本営」看板（1936年）
〔右図〕Ⅱ−33　「大本営」となった農学部本館の写真（1936年）

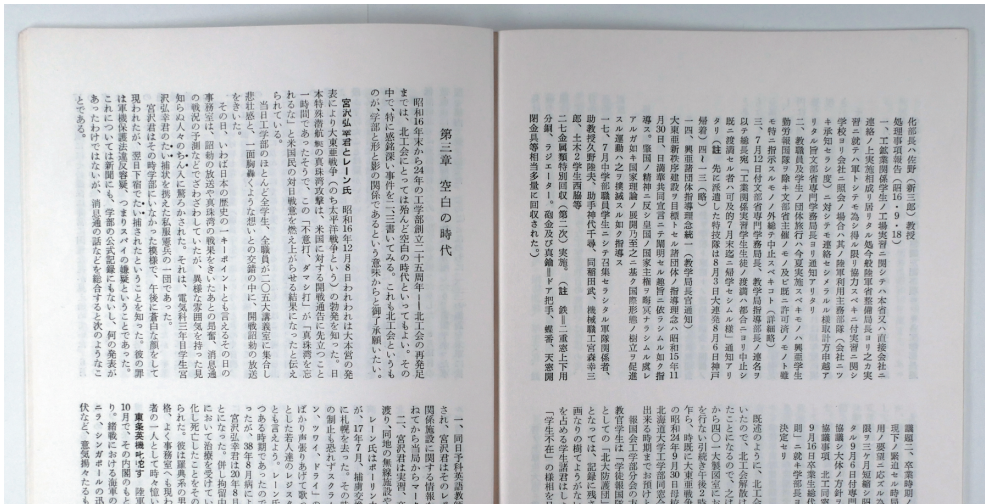


Ⅱ−34　「聖蹟碑」除幕式の写真（1937年）

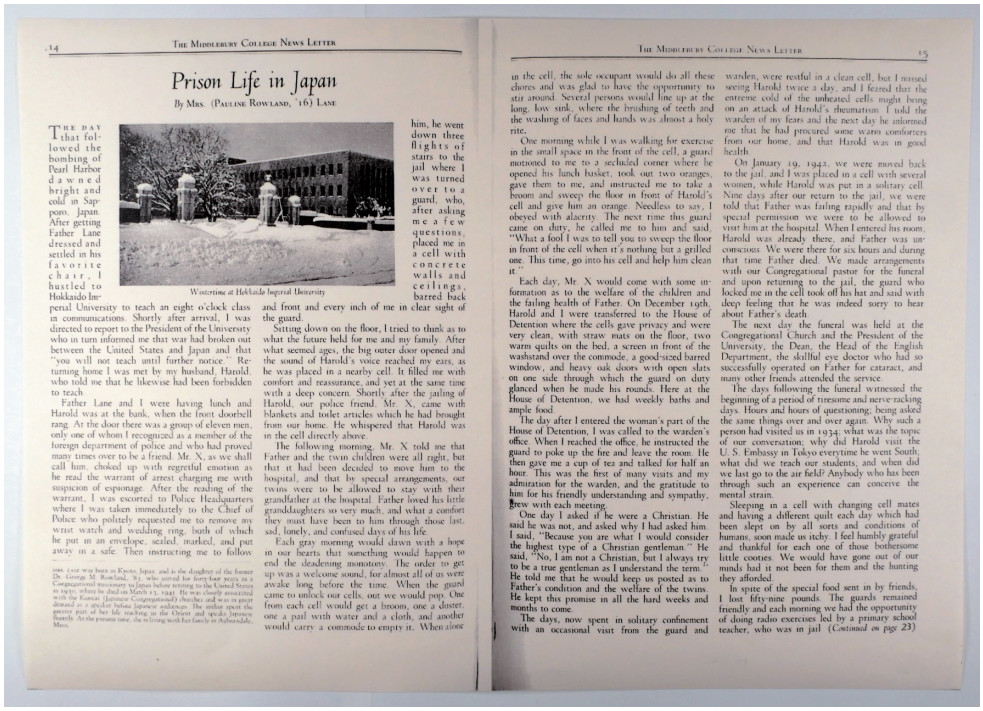
Ⅲ.「宮澤・レーン事件」


北海道帝國大學新聞
宣戰の大詔渙發
祖國つひに干戈を取る日
詔書
總長訓示
學年曆臨時措置決定
猛進軍する科學陣
北方科學の心臟部
低溫科學研究所
時代に即應愈々開所
發明奬勵金

Ⅲ-01　アジア・太平洋戦争開戦を伝える『北海道帝国大学新聞』(1941年)


第三章　空白の時代
宮沢弘幸君とレーン氏
当日工学部のほとんどの学生、全職員が二〇五大講義室に集合し
その日、いわば日本の歴史の一キーポイントとも言えるその日の
戦死の公報が入り、異様な緊迫感を持った見
送る人々の中に驚かされました。それは、電気科三年目学生宮
沢弘幸君の姿でした。補欠を携えた私服憲兵の一団であった。
宮沢君はその時学部にいなかった捕えたとうことを知った。彼の罪
は軍機保護法違反容疑、つまりスパイの嫌疑ということであった。
これについては新聞にも、学部の公式記録にも全くない、何の発表が
あったわけではないが、消息通の話だと総合すると次のようなこ
とである。
昭和16年末から24年の工学部創立二十五周年――北工会の再発足
までは、北工会にとって暗黒の時代といってもよい。その
中で、村に盛況な事務を、三言葉にしてみる。これも北工会としても
のが学部と彼との関係であるという意味合いを込めて承認したい。
昭和16年12月8日われわれは大本営の発
表により大東亜戦争（のち太平洋戦争という）の勃発を知った。日
本特有の赤飯の真珠湾攻撃は、米国に対する開戦通告に先立つこと
一時間であったそうで、この「卑怯打」が「真珠湾を忘
れるな」と米国民の対日戦意を燃え上がらせる結果になったと伝え
られている。
当日工学部のほとんどの学生、全職員が二〇五大講義室に集合し
悲壮感と、一面興奮ぎみのような想いとの交錯の中に、開戦詔勅の放送
をきいた。
その日、いわば日本の歴史の一キーポイントとも言えるその日の
事務室には、詔勅の放送や真珠湾の戦果をきいたあとの感奮、消息通
の戦況の予測などでわざわざ集まりました。異様な緊迫感を持った見
知らぬ人々の一人一人に驚かされました。それは、電気科三年目学生宮
沢弘幸君の姿でした。補欠を携えた私服憲兵の一団であった。
宮沢君はその時学部にいなかった捕えたとうことを知った。彼の罪
は軍機保護法違反容疑、つまりスパイの嫌疑ということであった。
これについては新聞にも、学部の公式記録にも全くない、何の発表が
あったわけではないが、消息通の話だと総合すると次のようなこ
とである。
一、同日予科英語教師ハロルドM・レーン氏がスパイ容疑で逮捕され、宮沢君はそのレポ（連絡係）をしたとのこと。レーン氏は軍
関係筋迄に関する情報を、上海経由で本国に送っていた嫌疑で、か
ねてから当局からマークされていた。
二、宮沢君は実習、卒論などにかこつけ、通信の便利で手島に
渡り、同地の無線設備や軍施設に関する情報をレーン氏に提供した。
レーン氏はポーリン夫人英人大通信員事務所に拘置されていたらし
い。
レーン氏は米国に帰国することになり、塞英附属の
ようである期間であったので、その再予入については、若干の問題が
あったが、38年8月病のために亡くなるまで在住した。
宮沢弘幸君は20年8月15日の終戦により、学部復帰が許されるこ
とになった。併し病気中彼は病気に罹り、東京帝国大学医学部病院
において治療を受けていた。昭和22年8月22日結核性腹膜炎が悪
化し死亡にしたことをその父君から聞いた。彼は最愛の父君から別
れ、一人ぼっちの男のうえスタンドに小柄だがガッシリした体
格、一人と事務室へも現われる学生であった。学部における戦争犠牲
者の一人として特に心から悼む出である。
東条英機ヒゲ
10月で、その内閣の東条英機の開戦に踏切った。
り、精神における海軍の良き理解、陸軍では
ニラ、シンガポールの迅速な占領、インドネシア和蘭軍の即時の降
伏など、意気揚々たるものがあった。戦線は広範な地域へ拡大し

Ⅲ-02　村田豊雄「北工会四十年史」(1965年)



14 THE MIDDLEBURY COLLEGE NEWS LETTER

Prison Life in Japan

By Mrs. (PAULINE ROWLAND, '16) LANE

THE DAY that followed the bombing of Pearl Harbor dawned bright and cold in Sapporo, Japan. After getting Father Lane dressed and settled in his favorite chair, I hustled to Hokkaido Imperial University to teach an eight o'clock class in communications. Shortly after arrival, I was directed to report to the President of the University who in turn informed me that war had broken out between the United States and Japan and that "you will not teach until further notice." Returning home I was met by my husband, Harold, who told me that he likewise had been forbidden to teach.

Wintertime at Hokkaido Imperial University

Father Lane and I were having lunch and Harold was at the bank, when the front doorbell rang. At the door there was a group of eleven men, only one of whom I recognized as a member of the foreign department of police and who had proved many times over to be a friend. Mr. X, as we shall call him, choked up with regretful emotion as he read the warrant of arrest charging me with suspicion of espionage. After the reading of the warrant, I was escorted to Police Headquarters where I was taken immediately to the Chief of Police who politely requested me to remove my wrist watch and wedding ring, both of which he put in an envelope, sealed, marked, and put away in a safe. Then instructing me to follow him, he went down three flights of stairs to the jail where I was turned over to a guard, who, after asking me a few questions, placed me in a cell with concrete walls and ceilings, barred back and front and every inch of me in clear sight of the guard.

Sitting down on the floor, I tried to think as to what the future held for me and my family. After what seemed ages, the big outer door opened and the sound of Harold's voice reached my ears, as he was placed in a nearby cell. It filled me with comfort and reassurance, and yet at the same time with a deep concern. Shortly after the jailing of Harold, our police friend, Mr. X, came with blankets and toilet articles which he had brought from our home. He whispered that Harold was in the cell directly above.

The following morning, Mr. X told me that Father and the twin children were all right, but that it had been decided to move him to the hospital, and that by special arrangements, our twins were to be allowed to stay with their grandfather at the hospital. Father loved his little granddaughters so very much, and what a comfort they must have been to him through those last, sad, lonely, and confused days of his life.

Each gray morning would dawn with a hope in our hearts that something would happen to end the deadening monotony. The order to get up was a welcome sound, for almost all of us were awake long before the time. When the guard came to unlock our cells, out we would pop. One from each cell would get a broom, one a duster, one a pail with water and a cloth, and another would carry a commode to empty it. When alone in the cell, the sole occupant would do all these chores and was glad to have the opportunity to stir around. Several persons would line up at the long, low sink, where the brushing of teeth and the washing of faces and hands was almost a holy rite.

One morning while I was walking for exercise in the small space in the front of the cell, a guard motioned to me to a secluded corner where he opened his lunch basket, took out two oranges, gave them to me, and instructed me to take a broom and sweep the floor in front of Harold's cell and give him an orange. Needless to say, I obeyed with alacrity. The next time this guard came on duty, he called me to him and said, "What a fool I was to tell you to sweep the floor in front of the cell when it's nothing but a grilled one. This time, go into his cell and help him clean it."

Each day, Mr. X would come with some information as to the welfare of the children and the failing health of Father. On December 19th, Harold and I were transferred to the House of Detention where the cells gave privacy and were very clean, with straw mats on the floor, two warm quilts on the bed, a screen in front of the washstand over the commode, a good-sized barred window, and heavy oak doors with open slats on one side through which the guard on duty glanced when he made his rounds. Here at the House of Detention, we had weekly baths and ample food.

The day after I entered the woman's part of the House of Detention, I was called to the warden's office. When I reached the office, he instructed the guard to poke up the fire and leave the room. He then gave me a cup of tea and talked for half an hour. This was the first of many visits and my admiration for the warden, and the gratitude to him for his friendly understanding and sympathy, grew with each meeting.

One day I asked if he were a Christian. He said he was not, and asked why I had asked him. I said, "Because you are what I would consider the highest type of a Christian gentleman." He said, "No, I am not a Christian, but I always try to be a true gentleman as I understand the term." He told me that he would keep us posted as to Father's condition and the welfare of the twins. He kept this promise in all the hard weeks and months to come.

The days, now spent in solitary confinement with an occasional visit from the guard and warden, were restful in a clean cell, but I missed seeing Harold twice a day, and I feared that the extreme cold of the unheated cells might bring on an attack of Harold's rheumatism. I told the warden of my fears and the next day he informed me that he had procured some warm comforters from our home, and that Harold was in good health.

On January 19, 1942, we were moved back to the jail, and I was placed in a cell with several women, while Harold was put in a solitary cell. Nine days after our return to the jail, we were told that Father was failing rapidly and that by special permission we were to be allowed to visit him at the hospital. When I entered his room, Harold was already there, and Father was unconscious. We were there for six hours and during that time Father died. We made arrangements with our Congregational pastor for the funeral and upon returning to the jail, the guard who locked me in the cell took off his hat and said with deep feeling that he was indeed sorry to hear about Father's death.

The next day the funeral was held at the Congregational Church and the President of the University, the Dean, the Head of the English Department, the skillful eye doctor who had so successfully operated on Father for cataract, and many other friends attended the service.

The days following the funeral witnessed the beginning of a period of tiresome and nerve-racking days. Hours and hours of questioning; being asked the same things over and over again. Why such a person had visited us in 1934; what was the topic of our conversation; why did Harold visit the U. S. Embassy in Tokyo everytime he went South; what did we teach our students, and when did we last go to the air field? Anybody who has been through such an experience can conceive the mental strain.

Sleeping in a cell with changing cell mates and having a different quilt each day which had been slept on by all sorts and conditions of humans, soon made us itchy. I feel humbly grateful and thankful for each one of those bothersome little cooties. We would have gone out of our minds had it not been for them and the hunting they afforded.

In spite of the special food sent in by friends, I lost fifty-nine pounds. The guards remained friendly and each morning we had the opportunity of doing radio exercises led by a primary school teacher, who was in jail (*Continued on page 23*)

『ミドルベリー大学ニュースレター』（1947年１月１日発行）
https://archive.org/details/middleburyNewspapers_1947-01-01/page/n13

日本での監獄生活

ポーリン・ローランド・レーン夫人

パール・ハーバーの爆撃に続いて明けた朝、日本の札幌の空は明るく、しかし寒い日でした。父ヘンリーに着替えをさせ、お気に入りの椅子に落ち着かせてから、私は８時の会話クラスの授業のため、北海道帝国大学に急ぎ向かいました。着いてすぐに、私は大学の学長に連絡するよう指示され、学長は私にアメリカと日本の間に戦争が勃発したことと、"追って指示あるまでもう教えなくて良い"こととを告げました。家に戻ると、夫ハロルドに会いましたが、彼もまた同様に教えることを禁じられたと話してくれました。



冬の北海道帝国大学

父と私は、昼食を摂っていて、ハロルドが銀行に出かけていたとき、玄関のベルが鳴りました。入口には11人の男たちがいましたが、その内の一人だけは警察の外事課に所属していた知り合いで、友だちとして何度も会っていたのでした。

仮にＸ氏と呼ぶことにしますが、彼はスパイ容疑の嫌疑で私の逮捕令状を、残念そうな様子で声を詰まらせながら読み上げました。令状の読み上げ後、私は中央警察署に護送され、直ちに警察署長のもとに連れて行かれ、彼は私に腕時計と結婚指輪をはずすように丁重に要求し、その二つを封筒に入れ、封印をして金庫に納めました。それから自分について来るよう私に指示して、階段の踊り場で３つ下の留置場に向かい、そこで私は看守に引き渡され、彼はいくつかの質問をした後、私を壁と天井はコンクリートの、正面も後も施錠された、かつ私のすべてが警備員の視界に入る監房に入れました。

床に腰を下ろして私は、私と家族の将来に何が待ち受けているかを考えてみました。長い年月が経ったように感じた後、外側の大きなドアが開き、ハロルドの声が私の耳に届き、彼は近くの監房に入れられた様でした。それは私をほっと一安心させましたが、しかし同時に深い懸念も抱かせました。ハロルドが投獄されてまもなく、友人である警官Ｘ氏は、我が家から持ち出した毛布やトイレ用品を持ってやってきました。彼は、ハロルドはすぐ真上の監房にいると耳打ちしました。

翌日の朝にＸ氏は、父と双子の子どもたちは大丈夫であり、しかし父は病院へ移動することが決定され、特別の配慮で双子たちも祖父と一緒に病院に居ることが許されたことを私に教えてくれました。父は小さな孫娘たちを大変可愛がっていたので、彼の人生の中で悲しい、淋しい、かつ困惑の日々を過ごす父にとって、二人は大きな慰めであったに違いありません。



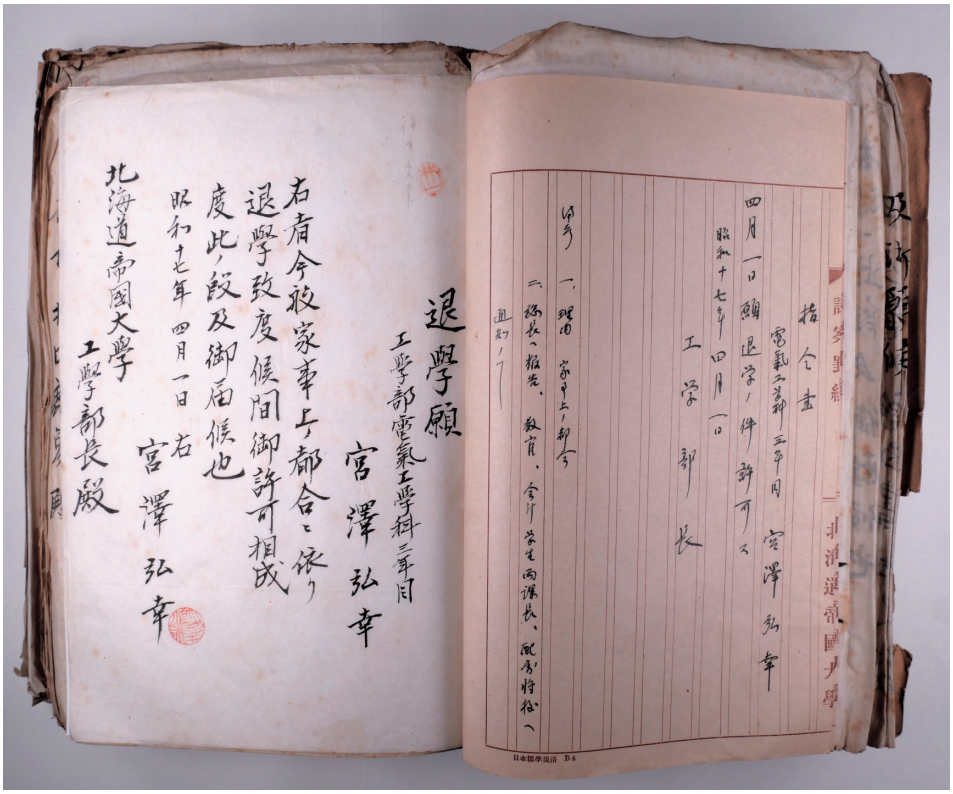
何かが起きて沈鬱な単調さを終わりにしてくれるなら、灰色の毎朝も私たちの心に希望の夜明けとなるでしょう。起床の号令は歓迎の警きでした。というのも私たちのほとんどはその時間よりずっと以前に目覚めているからでした。看守が監房の鍵をはずすと、わたしたちは飛び出すのです。それぞれの独房からある人はほうきを握り、ある人はゴミ箱を、ある人はバケツに水とぞうきんを、また別の人は便器を空にすべく運び出すことになります。牢屋に独りでいると、孤独な住人はあれこれの雑用をしたがり、忙しく立ち居ふるまう機会があればうれしいのです。何人かの人たちは、長い、低い流し台に並びますが、そこで歯磨きをしたり、顔や手を洗うことは、ほとんど神聖な儀式の様でした。

ある朝、自分の監房の前の小さなスペースで運動のため歩いていると、一人の看守が角の奥まったところへ私を手招きし、そこで彼は自分の弁当箱を開け、ミカンをふたつ取り出して私にくれました。そしてほうきをもってハロルドの監房の前の廊下を掃くように、またミカンを一個彼に与えるよう指示しました。言うまでもなく、私はすぐさま応じました。この看守は、次ぎに当番になったとき、私を呼び寄せて言いました。"監房には格子窓があるだけなのに、(ハロルドの) 監房の前の床を掃除しなさいと言いつけたのは何と愚かだったか。今度はハロルドの監房に入ってそこをきれいにするのを手伝いなさい"と。

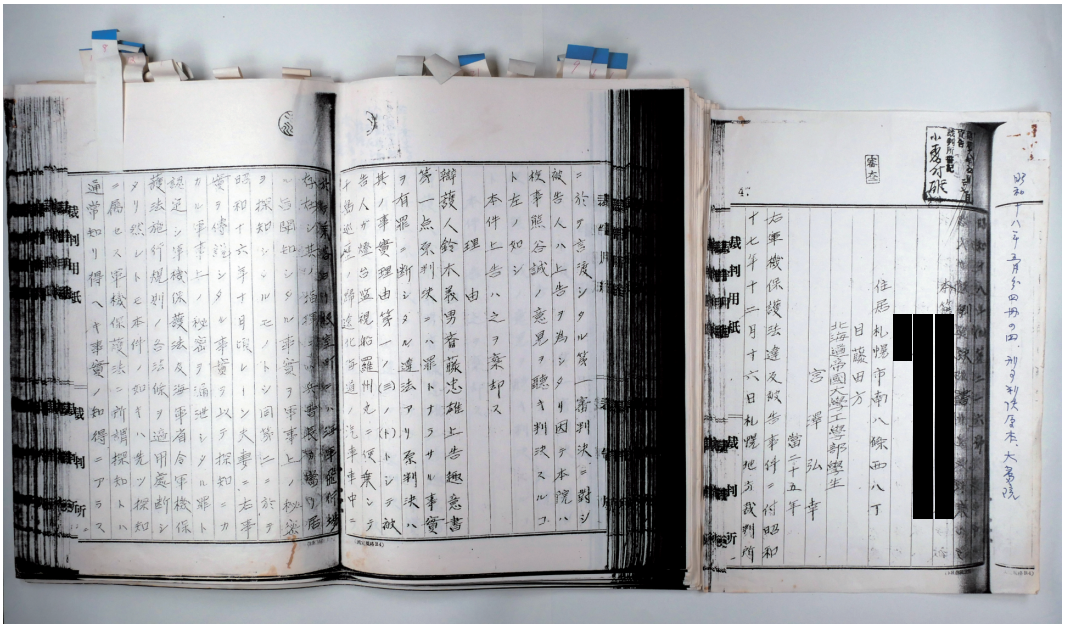
毎日、Ｘ氏は子どもたちが安泰かどうかや父の体調の悪化などに関していくばくかの消息を持ってきました。12月19日になって、ハロルドと私は拘置場に移されました、そこはプライバシーがあり、大変清潔で、床にはたたみがあり、ベッドにはあたたかそうな布団が２枚、便器の上の洗面台のまえには衝立があり、大きめの格子付きの窓、重たい樫のドアの片側にはのぞき窓があり、そこを通して当番の看守は巡回をするときに一瞥をくれました。ここ拘置場では週毎の入浴と十分な食物がありました。

拘置場の女性房に入所してからのある日、私は所長の事務所に呼ばれました。事務所に着くと、所長は看守に火を起し、立ち去るように指示しました。それから彼は一杯の紅茶を私に与え、30分ほど話をしました。これは何度もあった面接の最初でしたが、所長への尊敬の念、彼の率直な理解と同情に対する感謝の気持は、そのたびごとに深まって行きま

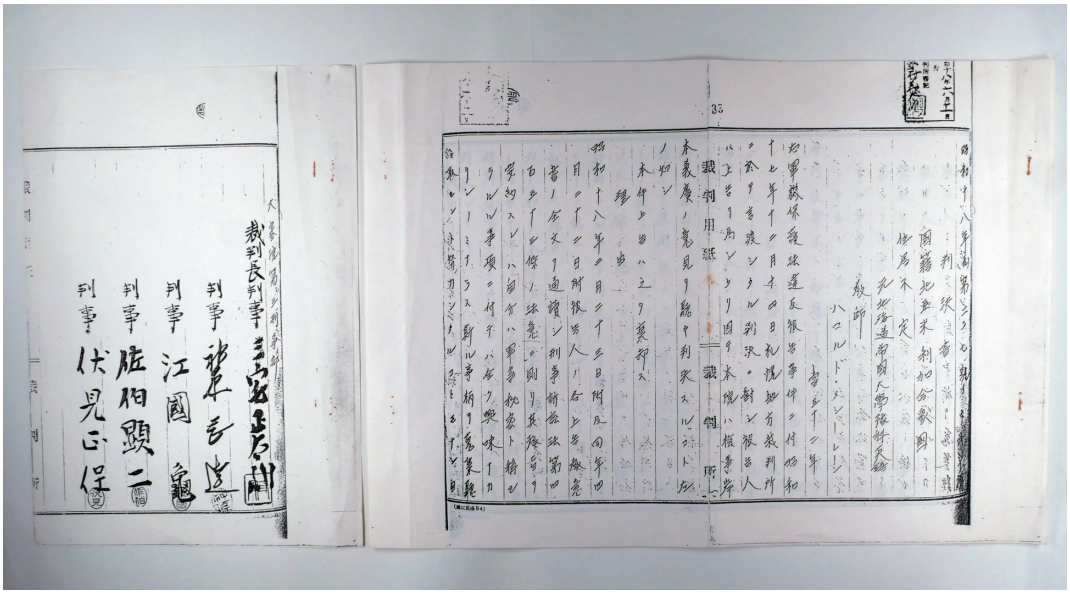
Ⅲ-03　P. Lane, "Prison Life in Japan"（1947年）



Ⅲ-04　宮澤弘幸の「退学願」（1942年４月１日）



Ⅲ-05　宮澤弘幸判決書のコピー（1943年）



Ⅲ-06　ハロルド・レーン判決書のコピー（1943年）



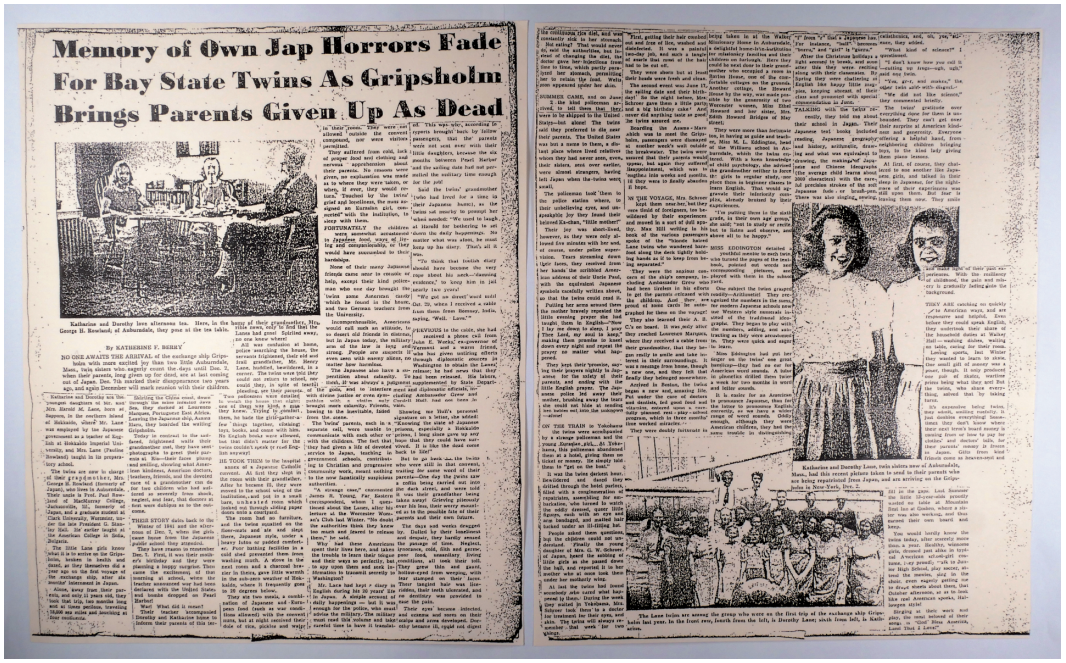
Ⅲ-07　ポーリン・レーン判決書のコピー（1943年）



Ⅲ-08　レーン夫妻のアメリカ送還の経緯に言及する『日米交換船』(2006年)



Ⅲ-09　レーン夫妻の娘姉妹のアメリカ送還に言及する『嵐の中を』(1991年)



Memory of Own Jap Horrors Fade For Bay State Twins As Gripsholm Brings Parents Given Up As Dead

By KATHERINE F. BERRY

NO ORE AWAITS THE ARRIVAL of the exchange ship Gripsholm which nears eastport Jay than two Belle Auburndale, Mass., twin sisters who eagerly count the days until Dec. 2, when their parents, long given up for dead, are at last coming out of Japan. Dec. 7th marked their disappointment two years ago, and again December will mark reunion with their children.

Katherine and Dorothy Lee, the youngest daughters of Mr. and Mrs. Harold M. Lees, born at Auburndale, in the southern island of Shikoku, Ehime Ken, Lees, they boarded the waiting Tenkyo in contrast to the sad-faced, nightgowned waifs their grandmother said, they have sent photographs to greet their parents. Katherine is a teacher of English in Imperial University, and Mrs. Lees (Pauline Rowland) taught in its preparatory school.

The twins are sure to sleep on the gripsholm, Mrs. George H. Rowland (formerly of Japan), who lives in Auburndale. Their uncle is Prof. Paul Rowland, Ph.D., formerly of Japan, and a graduate student at Clark University, Worcester, under the late President G. Stanley Hall. He earlier taught at the American College in Sofia, Bulgaria.

The Little Lees girls know what it is to arrive on the Gripsholm, broken in health and dated, as they themselves did a year ago on the first voyage of the exchange ship, after six months internment in Japan.

Alone, keep four days' gruelly, and only 11 years old, they "took that trip, two months long, and at times perilous, traveling in hold-ups aisles and dreading a fire under-foot.

Entering the Shiba coast, dreary and cheerless in the cold rain of Dec. 7, they docked at Lemming Mudgues, Portuguese East Africa. Leaving the Japanese ship, Asama Maru, they boarded the waiting Tenkyo.

Today in contrast to the sad-faced, nightgowned waifs their grandmother said, they have sent photographs to greet their parents. Katherine is a teacher of English at Shikoku Imperial University, and Mrs. Lees (Pauline Rowland) taught in its preparatory school.

The twins are sure to sleep on the gripsholm, Mrs. George H. Rowland (formerly of Japan), who lives in Auburndale. Their uncle is Prof. Paul Rowland, Ph.D., formerly of Japan, and a graduate student at Clark University, Worcester, under the late President G. Stanley Hall. He earlier taught at the American College in Sofia, Bulgaria.

THRILL STORY dates back to the Winter of 1941 and the storm of Dec. 7, when the girls, aware hopes from the Japanese public school they attended.

They have exams in mysterious Tokyo. Dec. 7 was Katherine's birthday and they were planning a happy surprise. Then came the excitement, of that morning at school, when the Japanese principal announced a declared with the United States and bombs dropped on Pearl Harbor.

Wee! What did it mean?

Then the principal announced Dorothy and Katherine hides to inform their parents of this im-

portant, they were not allowed outside the convent compound, nor were visitors permitted.

They suffered from cold, lack of proper food and clothing and the fear of bombing raids on Tokyo. No censors were given, no explanations was made as to when they were to leave, or when, if ever, they would reunited by the latter's grief and loneliness, the nuns assigned an Eurasian girl, "protected" with the institution, to sleep with them.

FORTUNATELY the children, accustomed to the simple diet of Japanese food, were of rugged constitutionality, or they would have succumbed to their hardships.

None of their many Japanese friends came near to console or help, except their kind gatekeeper, a man who one day brought the twins some American candy which he found in the trash can of the German military attache at the University.

Incomprehensible, Americans would call such an attitude, to most of their friends in distress, but in Japan today, the military police are very, very strong. People are censors of even seeing with secret silent, or neither how hesitated.

The Japanese also have a sensitiveness about nationality. Often, it was always a judgment for good, not to intermingle with citizen justice or even sympathy with those who have brought more nationality. Friends, vanished.

Showing me Hull's personal signature on a letter of appointment, "Knowing the style of Japanese diplomacy, when a Nakasaki [illegible] does give up any hope that they could have survived. It is like the dead come back to life!"

The twins' parents, each in a separate camp, were kept incommunicado with each other or prison, I long since gave up any with the children. The fact that they had given a life of devoted civil service to Japan, teaching in government schools, certified to the twins' grandfather being a Christian and progressive also to the new fascistically suspicious authorities.

"A strange case," commenting Mr. James R. Young, Far Eastern correspondent, whom I spoke about the Lees, after his return from Japan. "Mr. Lees is Phi Beta Kappa from Harvard, and his friends associated with the Clark and Winter. He duly reported to the authorities think they knew the Lees well and feared to release by them," he said.

Why had these Americans chosen to spend their lives here, and taken their wives and children here, and their ways so patriotic, but to spy upon them and sent to threaten to transmit secretly to Washington?

Mr. Lees had kept a diary in English during his 10 years in Japan, and two years, a combination of Japanese and European food (such as war conditions allowed) with the convent's rules, but at night carried their dole of rice, pickles and weeds.

[illegible] This was also, according to reports brought back by fellow passengers, that the parents were not sent ever with their little daughters, because the six months between Pearl Harbor and the sailing date had not permitted the military time enough for the job!

And the twins' grandmother (who had lived for a time in their Japanese home), as the twins sat nearby to prompt her school needed: "We used to laugh, at thought her barbering to all charm the daily happenings. No matter what was silent, he must keep up his story. That's all it was.

"To think that twelve story should have become the very cage about his neck—damning evidence," to keep him in jail nearly two years!

"We got an sheet" word until Oct. 20, when I received a cable from them from Norway, India, saying, "Well. Love."

PLAYLOUS in the castle, she had received a phone call from John E. Weeks, ex-governor of Massachusetts and warm friend, who has given untiring efforts to the Japanese problem in the Washington as chief the Lees' minister; he had news that they had been released. His labors, supplemented by State Department officials, had not gone in vain.

Awaiting Ambassador Grew and Mrs. Grew and other members of the [illegible] staff.

Soaring the Asama Maru, which was to meet the Gripsholm, passengers were diverted to another week's web outside the breakwater. The twins were assured that their parents would be on board, and that they were [illegible] which was to be [illegible] it hope.

ON THE VOYAGE, Mrs. Schoonmaker kept them near her, but they were full of foreigners, too be soldered by their experiences and moved in a sort of dull stupor. Mr. Max Hill writing in his book of the Japanese people, "Their sense of humor is dead."

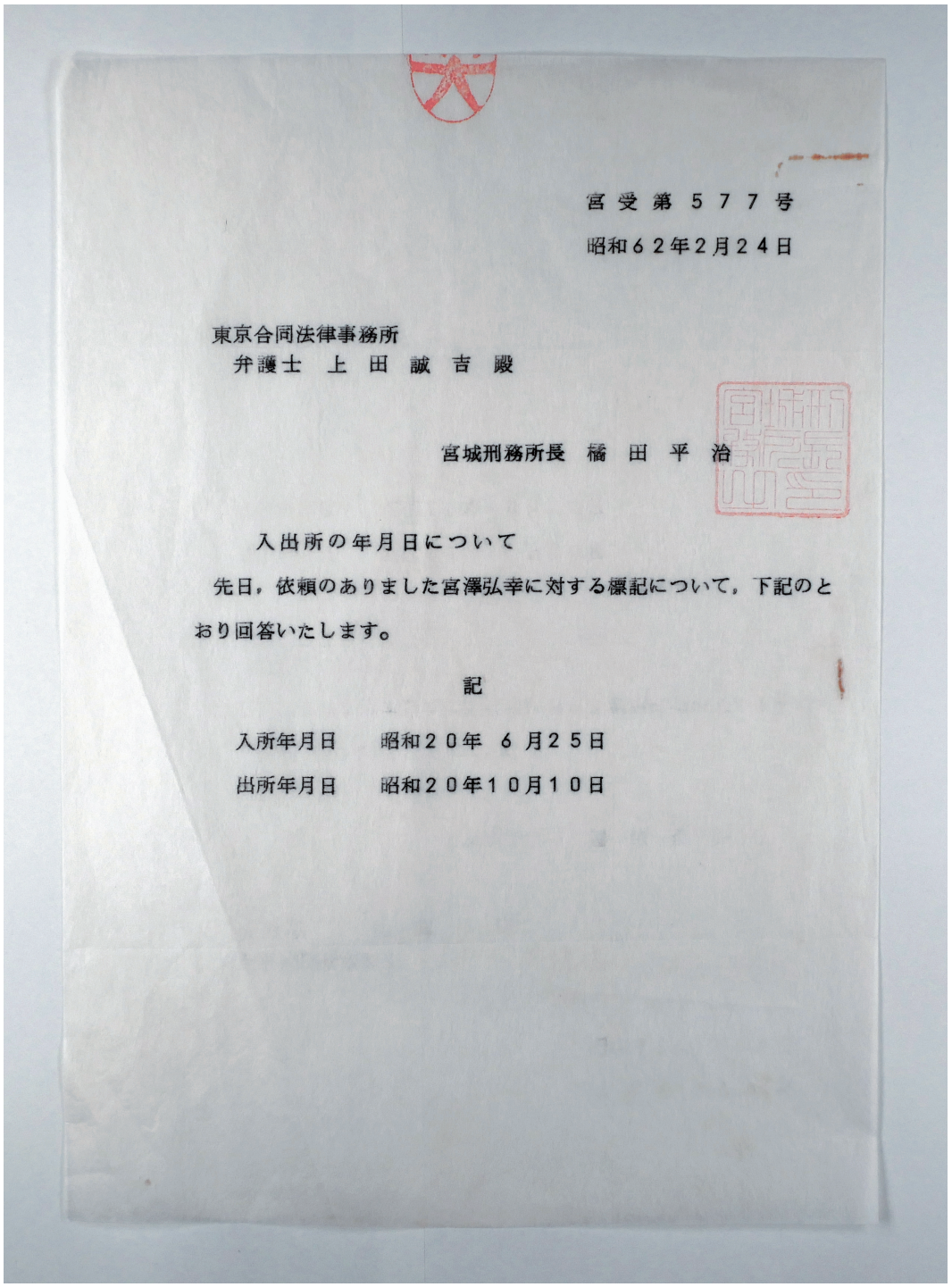
Soon twins who wandered beyond along the deck tightly holding hands as if to keep from being separated."

They were the saddest case [illegible] Ambassador Grew was [illegible] had been civilians in his efforts to get the parents released with the children. And they were proud of twins (with be seen [illegible] laughed for these on the voyage!

They also learned their A. B. C's on board. It was jolly after They [illegible] Lord, my soul to keep," they chorused when they received a cable from their parents, [illegible] to be [illegible] to smile and take [illegible] [illegible] [illegible]

Ⅳ. それぞれの戦後

(1) 宮澤弘幸、再起の日々



宮受第５７７号
昭和６２年２月２４日

東京合同法律事務所
弁護士　上　田　誠　吉　殿

宮城刑務所長　橘　田　平　治

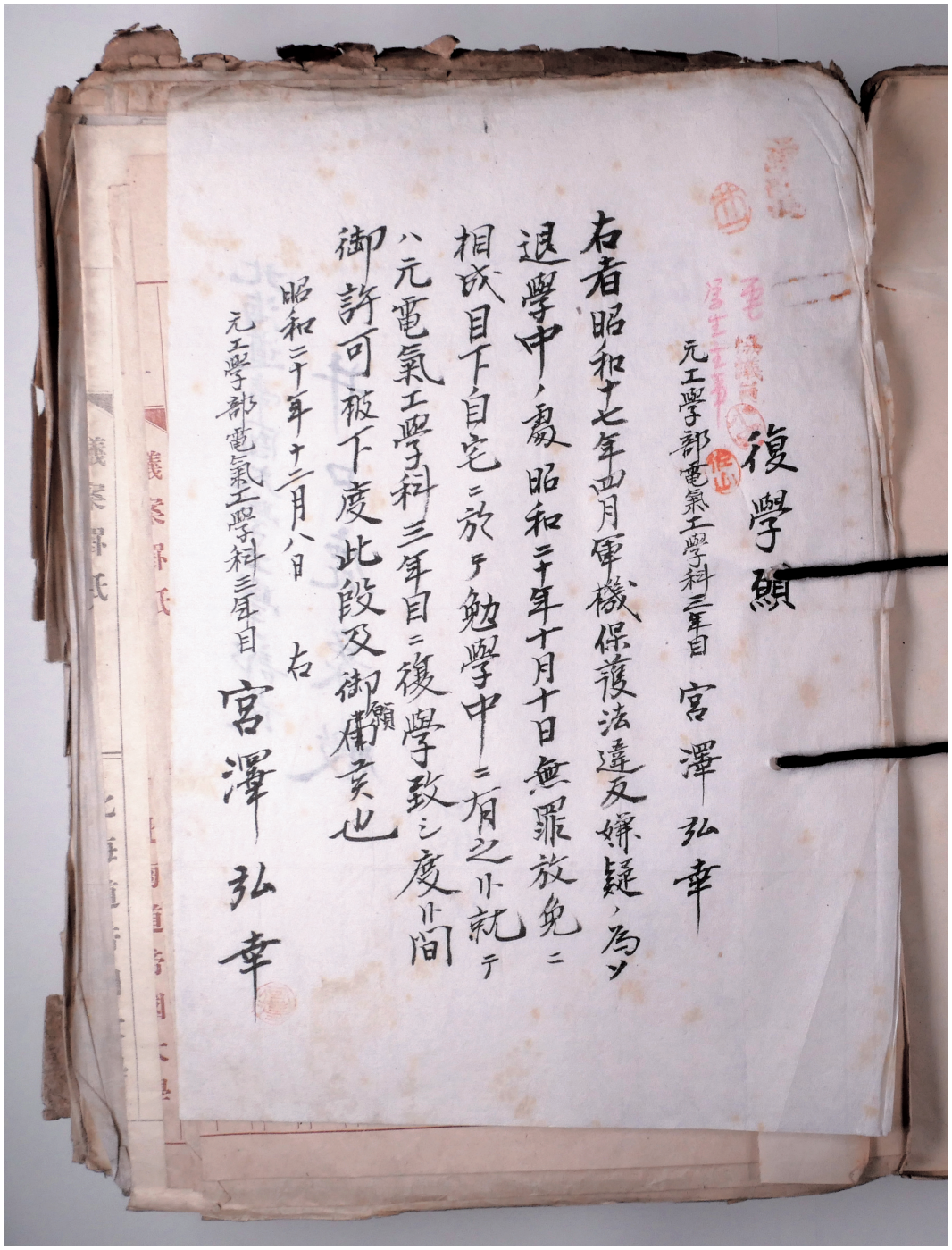
入出所の年月日について

先日，依頼のありました宮澤弘幸に対する標記について，下記のとおり回答いたします。

記

入所年月日　昭和２０年　６月２５日
出所年月日　昭和２０年１０月１０日

Ⅳ-01　宮澤弘幸の宮城刑務所入出所年月日を記した文書（1987年２月24日）


復學願

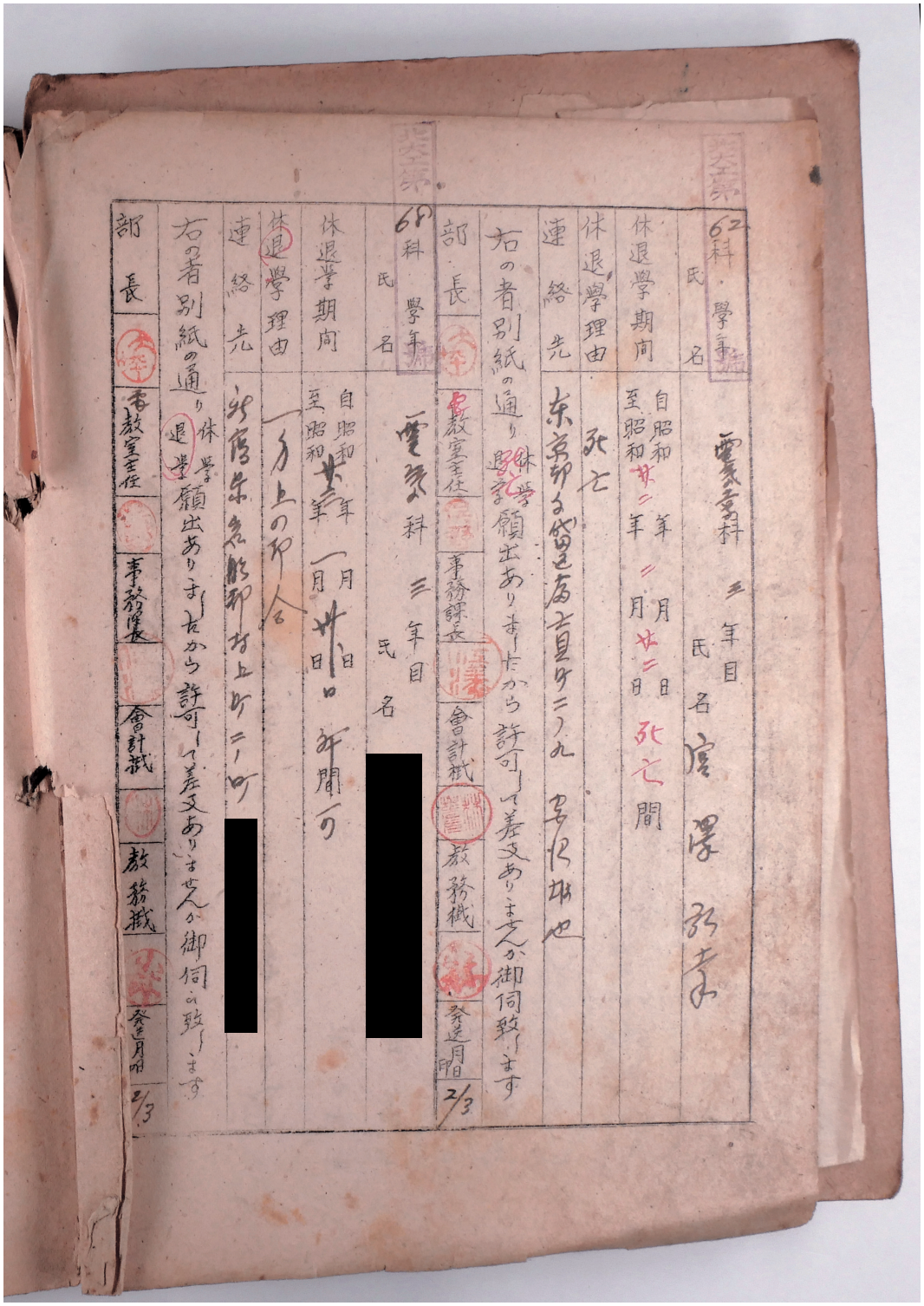
元工學部電氣工學科三年目　宮澤弘幸

右者昭和十七年四月軍機保護法違反嫌疑ノ為メ
退學中ノ處昭和二十年十月十日無罪放免ニ
相成目下自宅ニ於テ勉學中ニ有之ニ就テ
ハ元電氣工學科三年目ニ復學致シ度ニ付
御許可被下度此段及御願候也

昭和二十年十二月八日　右

元工學部電氣工學科三年目
宮澤弘幸

Ⅳ-02　宮澤弘幸の「復学願」（1945年12月８日）

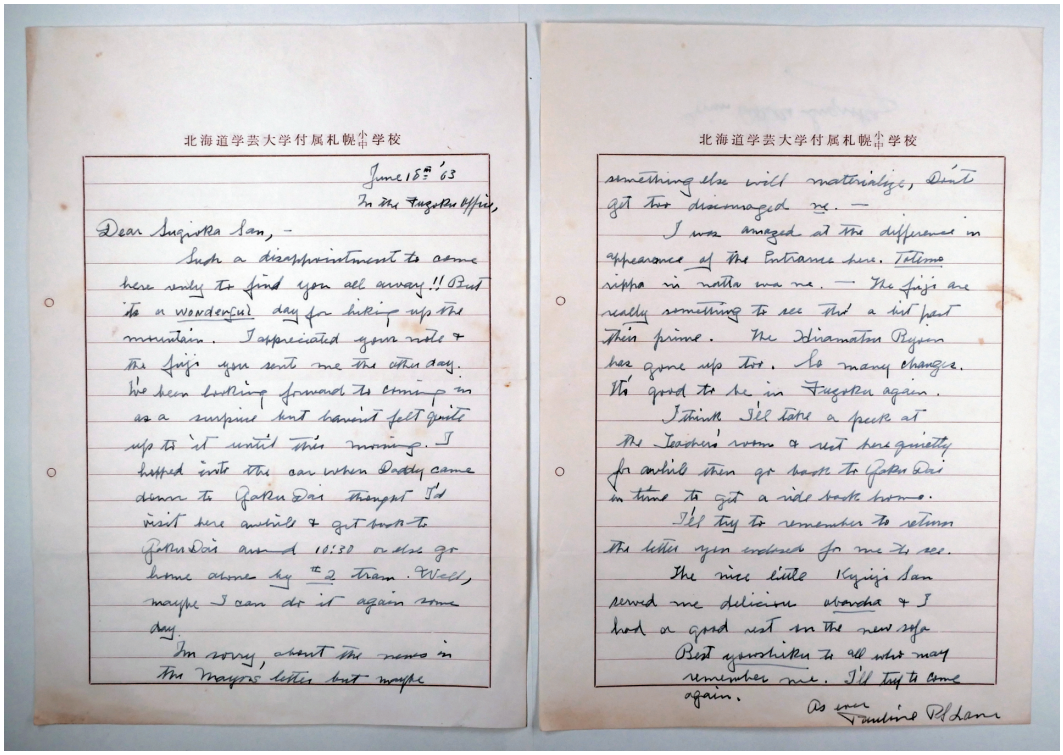


Ⅳ-03　宮澤弘幸死去による「退学」の手続き文書（1948年１月）

(2) レーン夫妻の再来日



Ⅳ-04　レーン夫妻からのクリスマスカード（1957、1958、1961、1962年）



Ⅳ-05　杉岡昭子氏に宛てたＰ．レーンの手紙（1963年６月18日）



Ⅳ-06　留学中の杉岡昭子氏に宛てたＰ．レーンの手紙（1965年５月23日）



レーン先生逝く

八月七日、北大病院で急性心不全などの病気のため七十才の生涯を終えられた。レーン先生は大正十一年北大英語教師として来道。第二次大戦中は抑留生活、そして本国への強制送還と不幸な思い出を体験したにもかかわらず、日本を愛し、日米文化交流に努めてきた。昭和二十六年再び客員教授として招かれ、北大教養部で講義をもち英語の勉強に、又、学術的英文論文の添削に学生を助け、教えを授けてきた。昭和三十五年その日米親善活動と英語教育の巧労により勲五等瑞宝章を受けている

◇◇◇

大好だった北大寮歌

明かるく独特の家庭生活を共に築いてこられたポーリン夫人にレーン先生についての二、三のエピソードを語ってもらった。ここから先生の人柄がわずかながらしのばれるであろう。

先生は本当に北大を愛し、自分が北大で教鞭をとっていることを大きな誇りとしていて、先生の洋服のどれにも（後に数えて十いくつにもなる）北大のエンレイ草のバッヂが付けてあったそうである。現在の家に住んで三十五、六年にもなるが、昔、恵迪寮（現在の低温科学研究所附近にあった）の予科生が夜間、大声で家の前を寮歌をうたいながら通り、又先生の名を大声で叫びながら歩き過ぎるのを、大そう喜んで聞いておられたという。大へん北大寮歌を好まれたそうである。先月の葬儀の際、北大生の寮歌合唱を聞かれて地下の先生も大そう喜ばれたに違いないとポーリン夫人も感慨深げに語っていた。また現在の北大生と旧制予科生を比べて大きな変化はないが、のんびりした気風の予科生に比べ、今の学生はホープレスだと感じておられたようである

三十年前のレーン先生一家

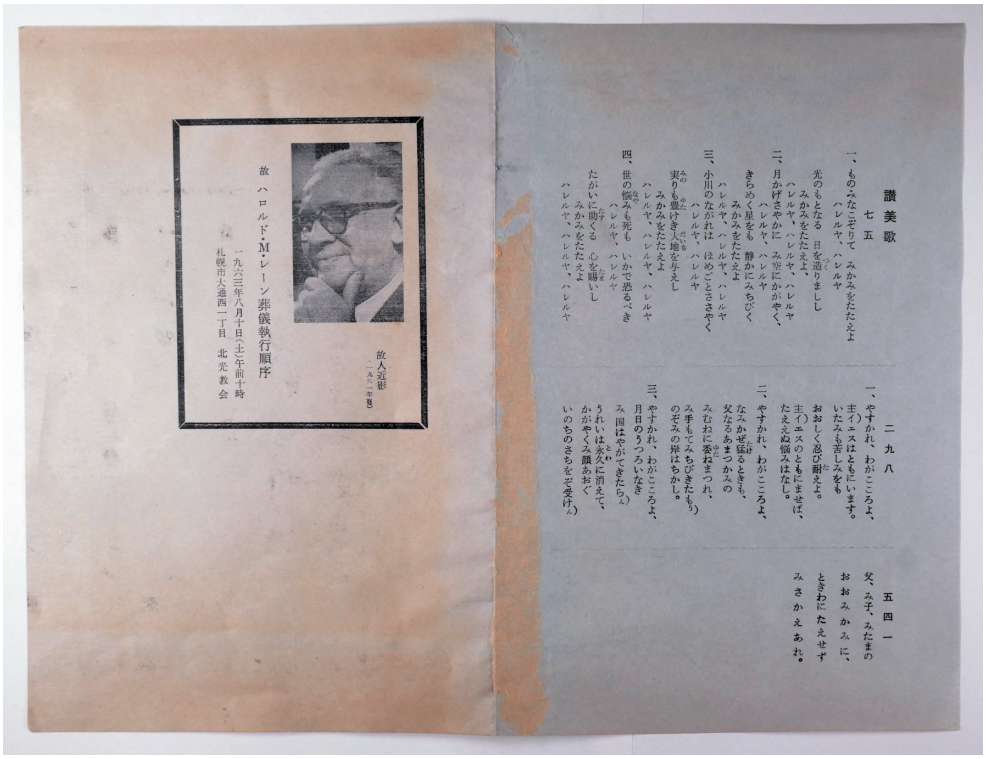
古本屋 弘南堂
北12条電停前
TEL(71)九四二九番

投稿歓迎

記事に関するユニークな投稿をお待ちします。

（編集部）

Ⅳ-07　Ｈ．レーンの逝去を伝える『北海道大学新聞』（1963年）



讃美歌

七五

一、ものみなこぞりて　みかみをたたえよ
　ハレルヤ、ハレルヤ
　光のもとなる　日を造りましし
　みかみをたたえよ、
　ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ
二、月かげさやかに　み空にかがやく、
　ハレルヤ、ハレルヤ
　きらめく星をも　静かにみちびく
　みかみをたたえよ
　ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ
三、小川のながれは　ほめごとささやく
　ハレルヤ、ハレルヤ
　実りも豊けき大地を与えし
　みかみをたたえよ
　ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ
四、世の悩みも死も　いかで恐るべき
　ハレルヤ、ハレルヤ
　たがいに助くる　心を賜いし
　みかみをたたえよ
　ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ

二九八

一、やすかれ、わがこころよ、
　主イエスはともにいます。
　いたみも苦しみをも
　おおしく忍び耐えよ。
　主イエスのともにませば、
　たえぬ悩みはなし。
二、やすかれ、わがこころよ、
　なみかぜ猛るときも、
　父なるあまつかみの
　みむねに委ねまつれ、
　み手もてみちびきたもう）
　のぞみの岸はちかし。
三、やすかれ、わがこころよ、
　月日のうつろいなき
　み国はやがてきたらん）
　うれいは永久に消えて、
　かがやくみ顔あおぐ
　いのちのさちをぞ受けん）

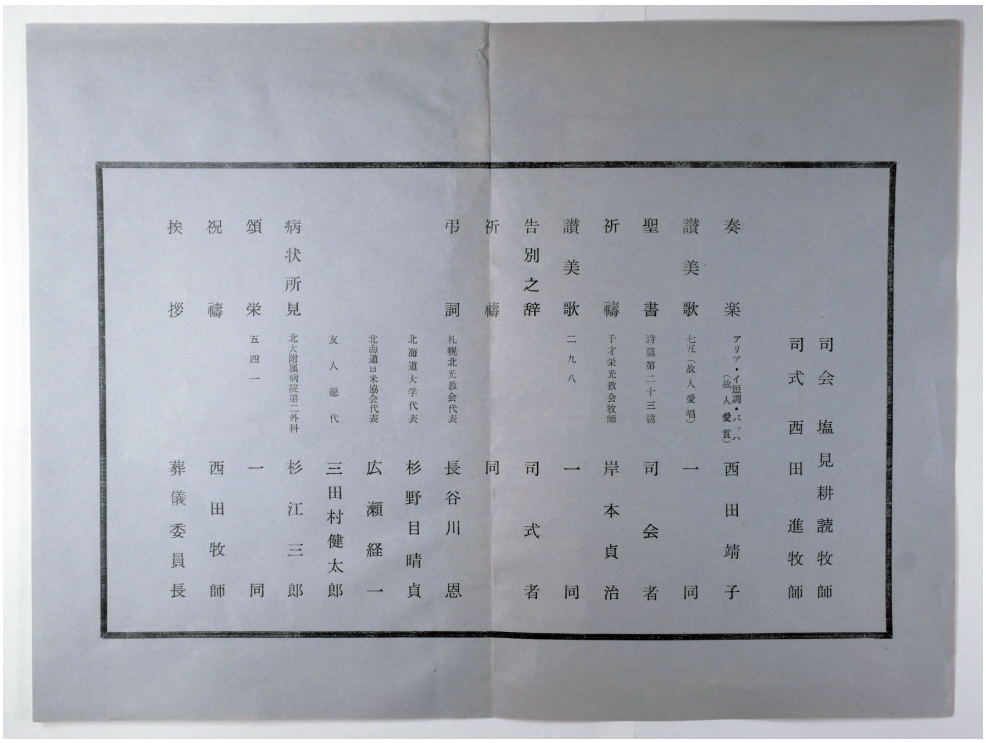
五四一

父、み子、みたまの
おおみかみに、
ときわにたえせず
みさかえあれ。

故人近影（一九六一年頃）

故ハロルド・M・レーン葬儀執行順序

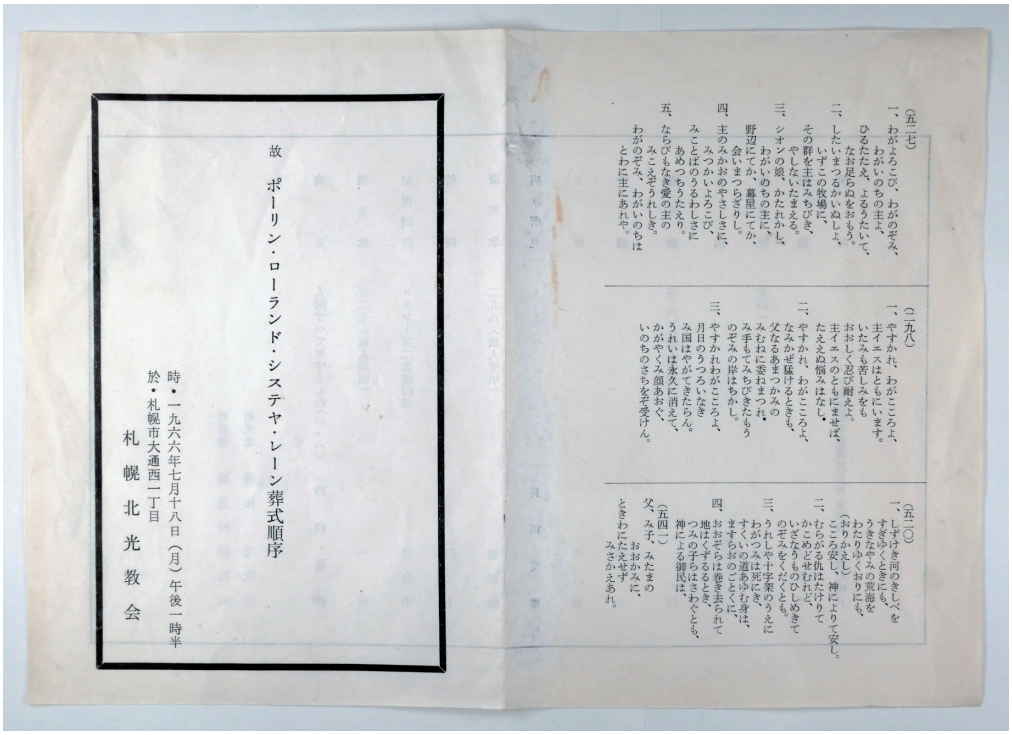
一九六三年八月十日（土）午前十時
札幌市大通西一丁目　北光教会



司会　塩見耕読牧師
司式　西田進牧師

奏楽　アリア・イ短調・バッハ（故人愛賞）　西田靖子
讃美歌　七五（故人愛唱）　一同
聖書　詩篇第二十三篇　司会者
祈禱　千才栄光教会牧師　岸本貞治
讃美歌　二九八　一同
告別之辞　司式者
祈禱　同
弔詞　札幌北光教会代表　長谷川恩
北海道大学代表　杉野目晴貞
北海道日米協会代表　広瀬経一
友人総代　三田村健太郎
病状所見　北大附属病院第二外科　杉江三郎
頌栄　五四一　一同
祝禱　西田牧師
挨拶　葬儀委員長

Ⅳ-08　H.レーンの葬儀順序（1963年８月10日）

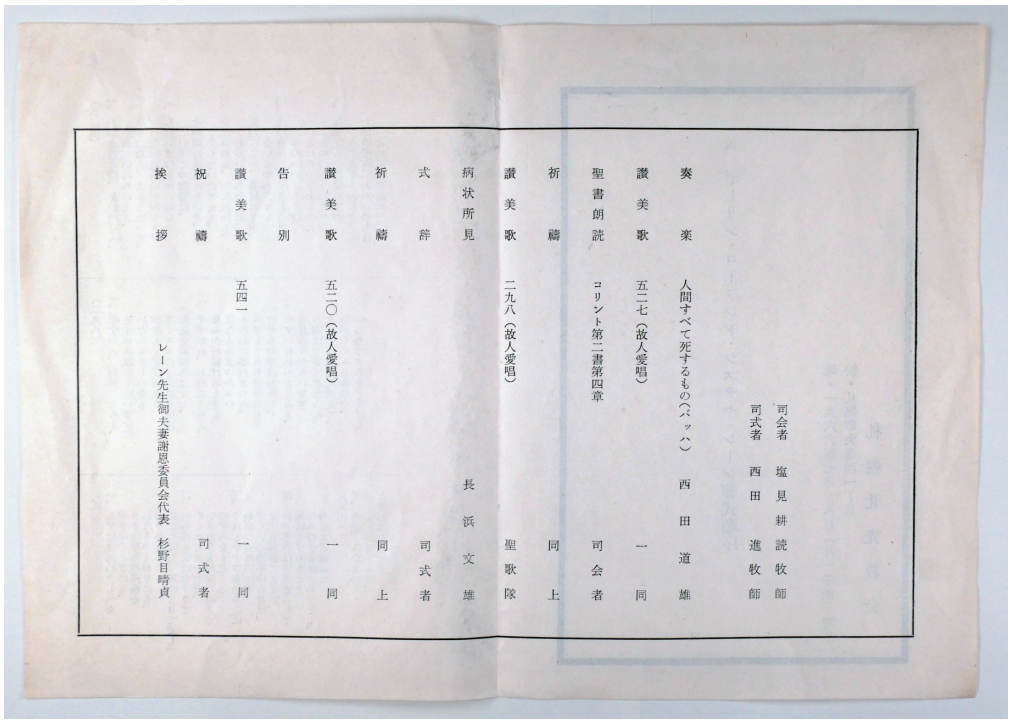


(五二七)
一、わがよろこび、わがのぞみ、
わがいのちの主よ、
ひるたたえ、よるうたいて、
なおお足らぬをおもう。
二、したいまつるかいぬしよ、
主イエスのとうとき血潮に、
その群を主はみちびき、
やしないたまえる。
三、シオンの娘かたれかし、
わがいのちの主に、
野辺にてか、幕屋にてか、
会いまつらざり。
四、主のみかおのやさしさに、
みつかいよろこび、
みことばのうるわしさに
あめつちうたえり。
五、ならびもなき愛の主の
みこえぞうれしき。
わがのぞみ、わがいのちは
とわに主にあれや。

(二九八)
一、やすかれ、わがこころよ、
主イエスはともにいます。
いたみも苦しみをも
おおしく忍び耐えよ。
主イエスのともにませば、
たえぬ悩みはなし。
二、やすかれ、わがこころよ、
なみかぜ猛るときも、
父なるあまつかみの
みむねに委ねまつれ。
みず手もてみちびきたもう
のぞみの岸はちかし。
三、やすかれわがこころよ、
月日のうつろいなき
み国はやがてきたらん。
うれいは永久に消えて、
かがやくみ顔あおぐ、
いのちのさちをぞ受けん。

(五一〇)
一、しずけき河のきしべを
すぎゆくときにも、
うきなやみの荒海を
わたりゆくおりにも、
(おりかえし)
こころ安し、神によりて安し。
二、むらがる仇はたけりて
かこめどせれど、
いざなうものひしめきて
のぞみやすだのもうえに
わがつみは死に果てぬ。
三、わがしみは死にき、身は、
すくいの道あゆむ
ますらおのごとく、
四、おおぞらは巻き去られて
地はくずるるとき、
つみの子らはさわぐとも、
神による御民は、

(五四一)
父、み子、おおかみに、
ときわにたえせず
みさかえあれ。



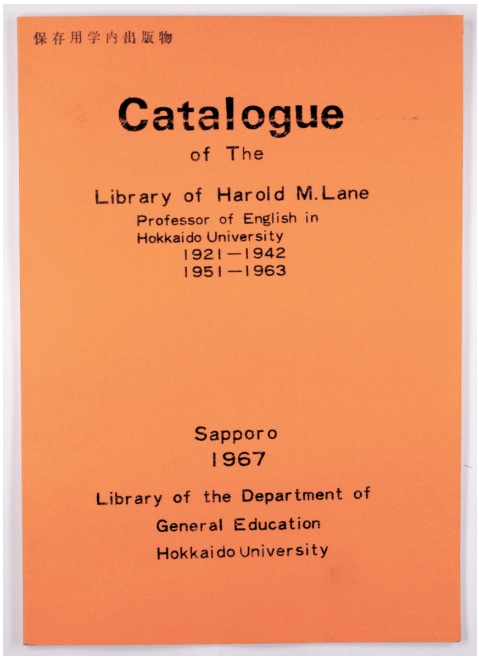
奏楽　人間すべて死するもの(バッハ)　西田道雄
讃美歌　五二七(故人愛唱)　一同
聖書朗読　コリント第二書第四章　司会者
祈禱　同上
讃美歌　二九八(故人愛唱)　聖歌隊
病状所見　長浜文雄
式辞　司式者
祈禱　同上
讃美歌　五二〇(故人愛唱)　一同
告別
讃美歌　五四一　一同
祝禱　司式者
挨拶　レーン先生御夫妻謝恩委員会代表　杉野目晴貞

司会者　塩見耕読牧師
司式者　西田進牧師

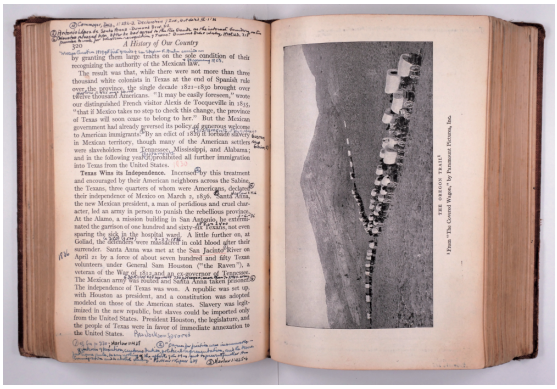
故　ポーリン・ローランド・システヤ・レーン葬式順序

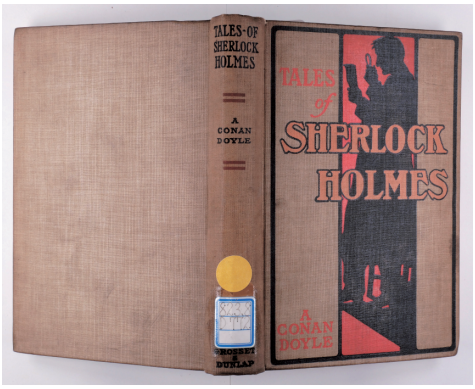
時・一九六六年七月十八日(月)午後一時半
於・札幌市大通西一丁目
札幌北光教会

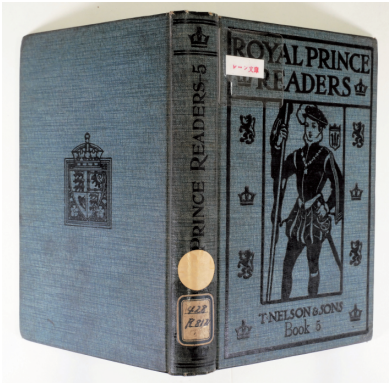
Ⅳ-09　P.レーン葬儀順序（1966年7月18日）

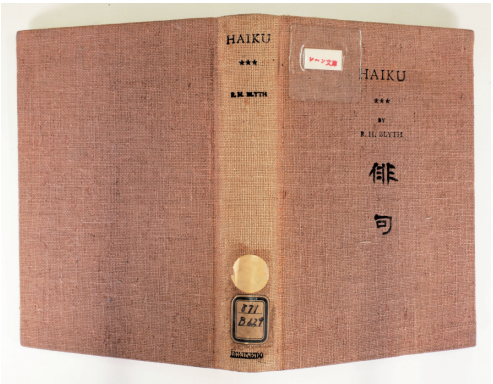


Ⅳ−10　*Catalogue of the Library of Harold M. Lane*（1967年）

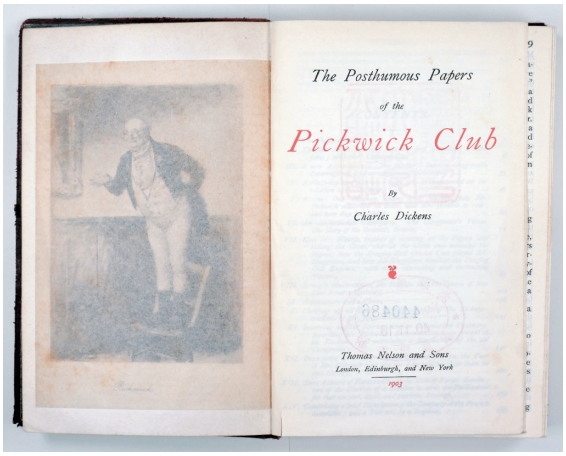


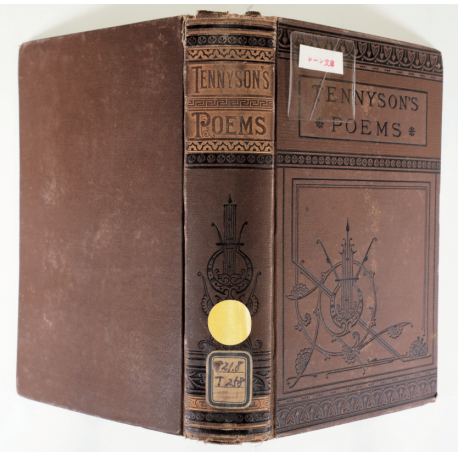






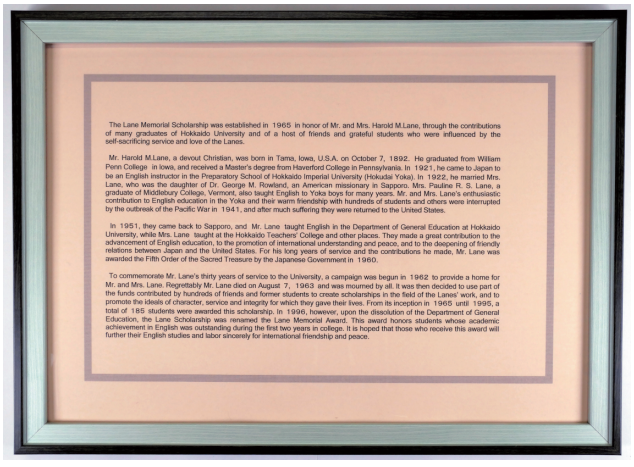
Ⅳ−11　レーン文庫蔵書





Ⅳ-11　レーン文庫蔵書





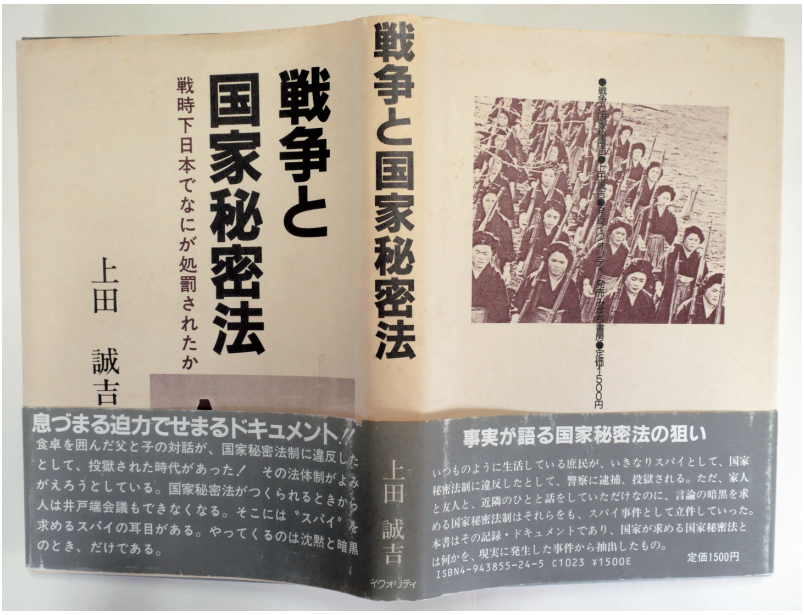
Ⅳ-12　レーン記念賞賞状



Ⅳ-13　レーン記念賞メダル

Ⅴ．現代から見る「宮澤・レーン事件」

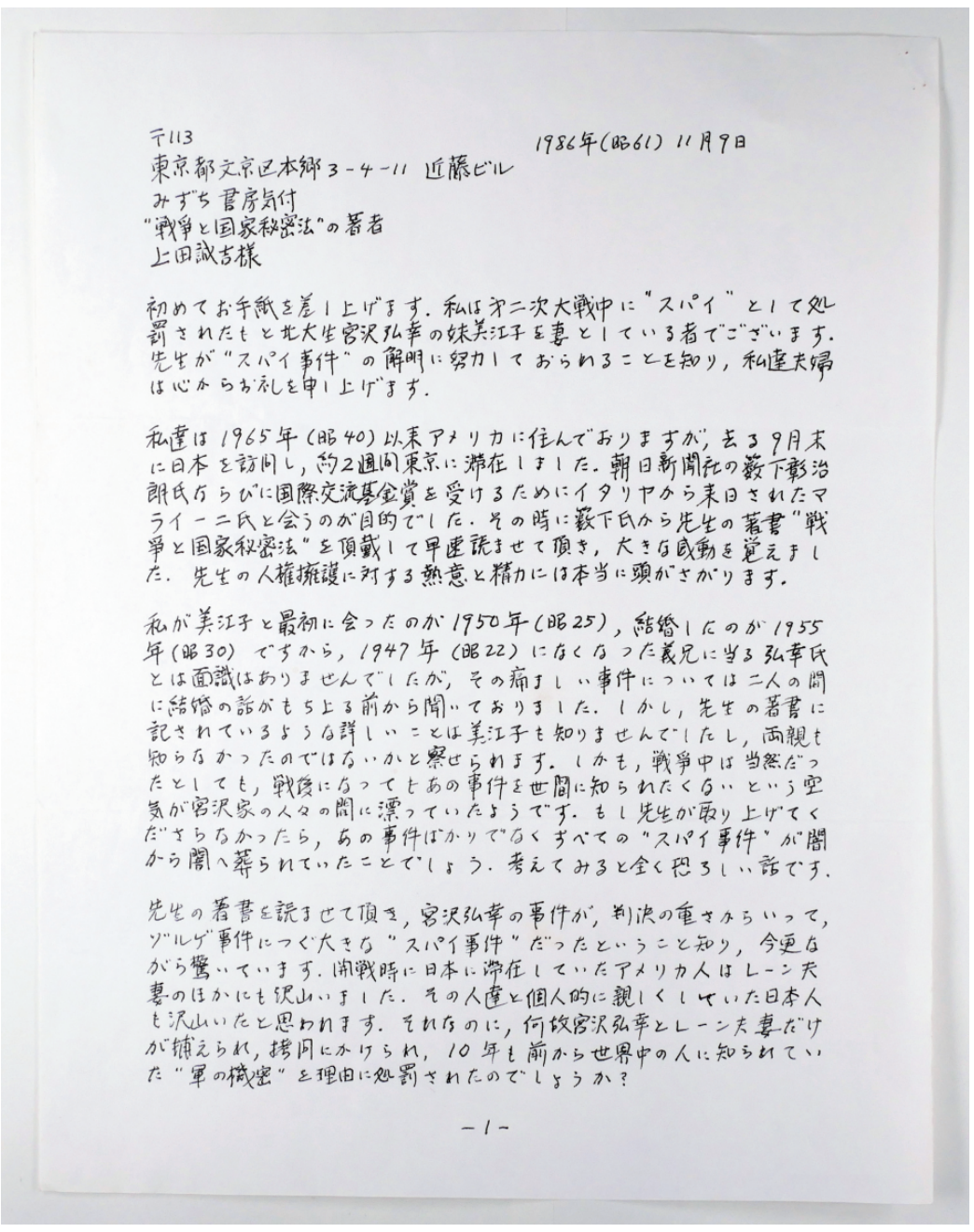
(1) 弁護士　上田誠吉による冤罪の告発



Ⅴ-01　上田誠吉『戦争と国家秘密法』（1986年）



Ⅴ-02　上田誠吉に宛てた秋間浩の手紙（封筒・名刺、1986年11月９日）



〒113　1986年(昭61) 11月9日
東京都文京区本郷3-4-11 近藤ビル
みすず書房気付
"戦争と国家秘密法"の著者
上田誠吉様

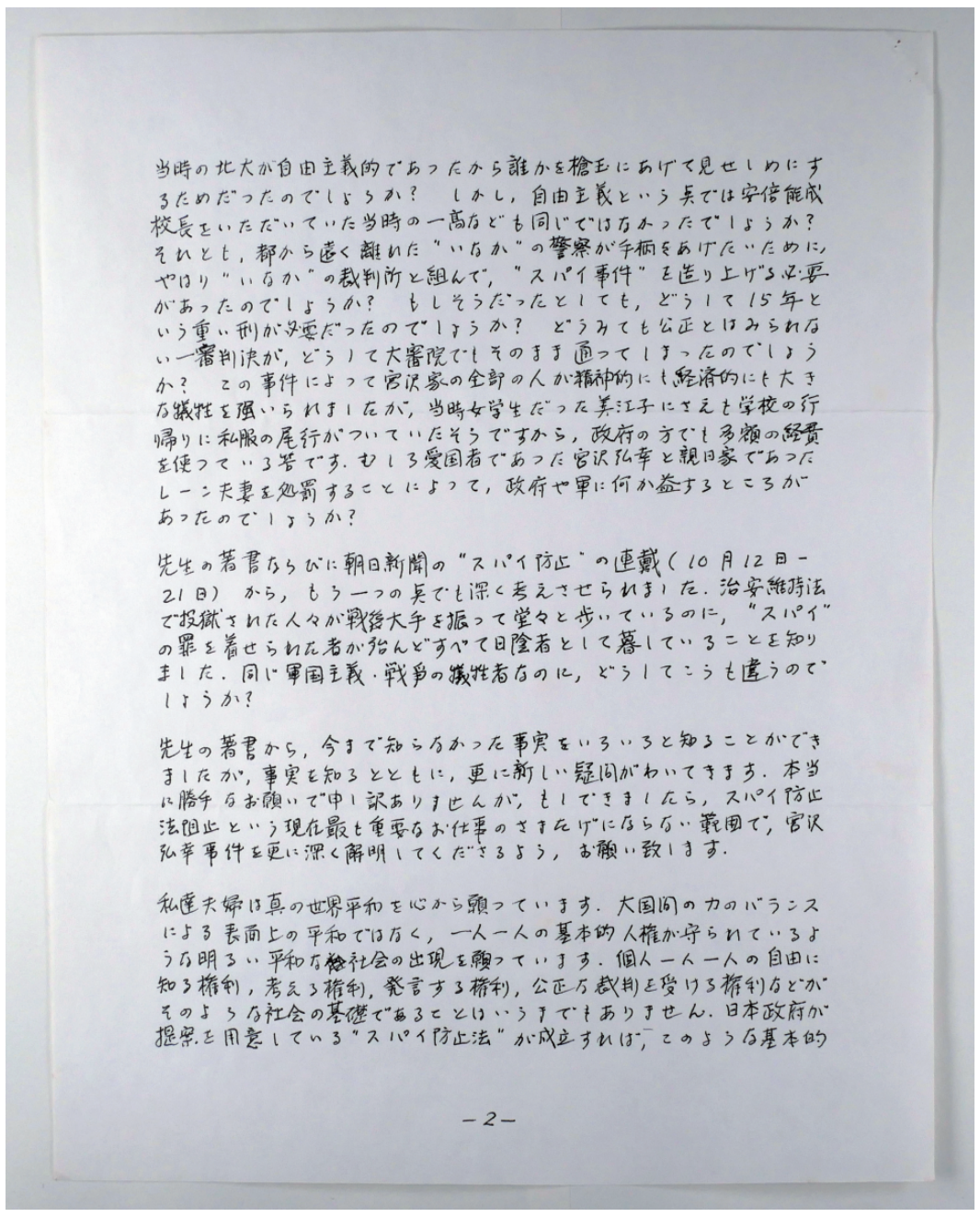
初めてお手紙を差し上げます．私は第二次大戦中に"スパイ"として処罰されたもと北大生宮沢弘幸の妹美江子を妻としている者でございます．先生が"スパイ事件"の解明に努力しておられることを知り，私達夫婦は心からお礼を申し上げます．

私達は1965年(昭40)以来アメリカに住んでおりますが，去る9月末に日本を訪問し，約2週間東京に滞在しました．朝日新聞社の藪下彰治郎氏ならびに国際交流基金賞を受けるためにイタリヤから来日されたマライーニ氏と会うのが目的でした．その時に藪下氏から先生の著書"戦争と国家秘密法"を頂戴して早速読ませて頂き，大きな感動を覚えました．先生の人権擁護に対する熱意と精力には本当に頭がさがります．

私が美江子と最初に会ったのが1950年(昭25)，結婚したのが1955年(昭30)ですから，1947年(昭22)になくなった義兄に当る弘幸氏とは面識はありませんでしたが，その痛ましい事件については二人の間に結婚の話がもち上る前から聞いておりました．しかし，先生の著書に記されているような詳しいことは美江子も知りませんでしたし，両親も知らなかったのではないかと察せられます．しかも，戦争中は当然だったとしても，戦後になってもあの事件を世間に知られたくないという空気が宮沢家の人々の間に漂っていたようです．もし先生が取り上げてくださらなかったら，あの事件ばかりでなくすべての"スパイ事件"が闇から闇へ葬られていたことでしょう．考えてみると全く恐ろしい話です．

先生の著書を読ませて頂き，宮沢弘幸の事件が，判決の重さからいって，ゾルゲ事件につぐ大きな"スパイ事件"だったということを知り，今更ながら驚いています．開戦時に日本に滞在していたアメリカ人はレーン夫妻のほかにも沢山いました．その人達と個人的に親しくしていた日本人も沢山いたと思われます．それなのに，何故宮沢弘幸とレーン夫妻だけが捕えられ，拷問にかけられ，10年も前から世界中の人に知られていた"軍の機密"を理由に処罰されたのでしょうか？

－1－



当時の北大が自由主義的であったから誰かを槍玉にあげて見せしめにするためだったのでしょうか？　しかし，自由主義という点では安倍能成校長をいただいていた当時の一高なども同じではなかったでしょうか？　それとも，都から遠く離れた"いなか"の警察が手柄をあげたいために，やはり"いなか"の裁判所と組んで，"スパイ事件"を造り上げる必要があったのでしょうか？　もしそうだったとしても，どうして15年という重い刑が必要だったのでしょうか？　どうみても公正とはみられない一審判決が，どうして大審院でもそのまま通ってしまったのでしょうか？　この事件によって宮沢家の全部の人が精神的にも経済的にも大きな犠牲を強いられましたが，当時女学生だった美江子にさえも学校の行帰りに私服の尾行がついていたそうですから，政府の方でも多額の経費を使っている筈です．むしろ愛国者であった宮沢弘幸と親日家であったレーン夫妻を処罰することによって，政府や軍に何か益するところがあったのでしょうか？

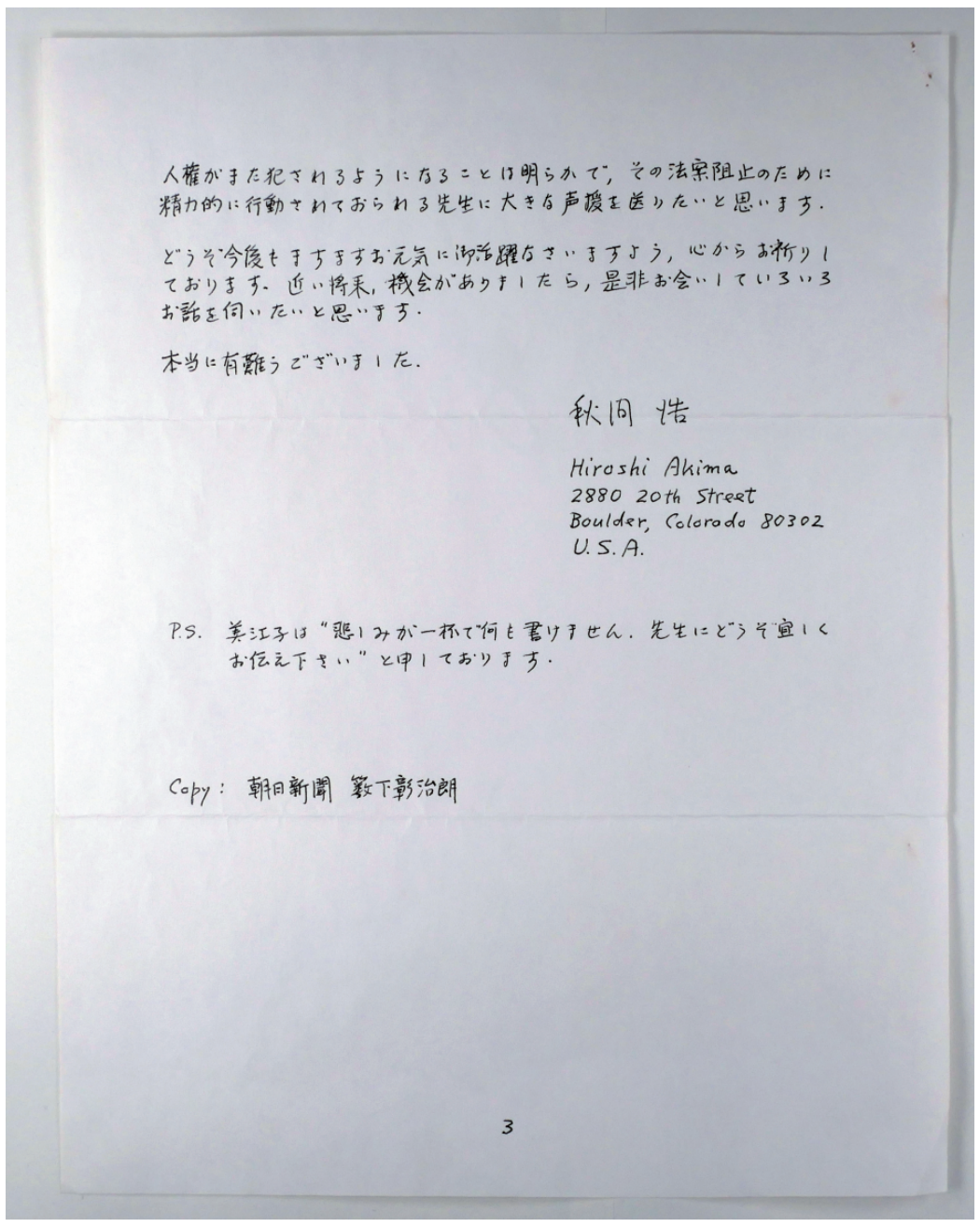
先生の著書ならびに朝日新聞の"スパイ防止"の連載(10月12日－21日)から，もう一つの点でも深く考えさせられました．治安維持法で投獄された人々が戦後大手を振って堂々と歩いているのに，"スパイ"の罪を着せられた者が殆んどすべて日陰者として暮していることを知りました．同じ軍国主義・戦争の犠牲者なのに，どうしてこうも違うのでしょうか？

先生の著書から，今まで知らなかった事実をいろいろと知ることができましたが，事実を知るとともに，更に新しい疑問がわいてきます．本当に勝手なお願いで申し訳ありませんが，もしできましたら，スパイ防止法阻止という現在最も重要なお仕事のさまたげにならない範囲で，宮沢弘幸事件を更に深く解明してくださるよう，お願い致します．

私達夫婦は真の世界平和を心から願っています．大国間の力のバランスによる表面上の平和ではなく，一人一人の基本的人権が守られているような明るい平和な社会の出現を願っています．個人一人一人の自由に知る権利，考える権利，発言する権利，公正な裁判を受ける権利などがそのような社会の基礎であることはいうまでもありません．日本政府が提案を用意している"スパイ防止法"が成立すれば，このような基本的

－2－

V-02　上田誠吉に宛てた秋間浩の手紙（1～2枚目、1986年11月9日）



人権がまた犯されるようになることは明らかで，その法案阻止のために精力的に行動されておられる先生に大きな声援を送りたいと思います．

どうぞ今後もますますお元気に御活躍なさいますよう，心からお祈りしております．近い将来，機会がありましたら，是非お会いしていろいろお話を伺いたいと思います．

本当に有難うございました．

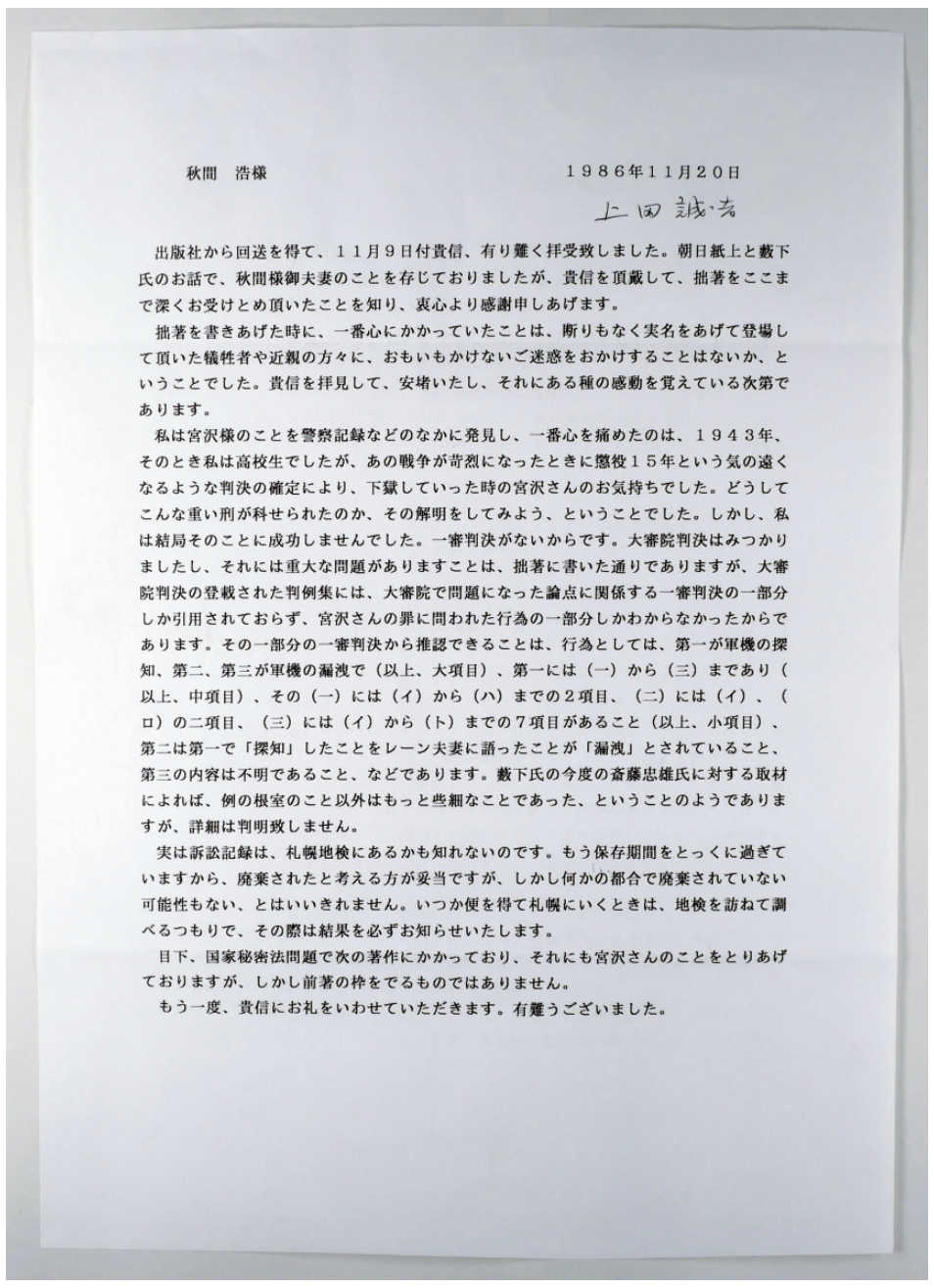
秋間浩

Hiroshi Akima
2880 20th Street
Boulder, Colorado 80302
U.S.A.

P.S. 美江子は"悲しみが一杯で何も書けません．先生にどうぞ宜しくお伝え下さい"と申しております．

Copy：朝日新聞 藪下彰治郎

3



秋間　浩様　　１９８６年１１月２０日
上田誠吉

出版社から回送を得て、１１月９日付貴信、有り難く拝受致しました。朝日紙上と藪下氏のお話で、秋間様御夫妻のことを存じておりましたが、貴信を頂戴して、拙著をここまで深くお受けとめ頂いたことを知り、衷心より感謝申しあげます。
拙著を書きあげた時に、一番心にかかっていたことは、断りもなく実名をあげて登場して頂いた犠牲者や近親の方々に、おもいもかけないご迷惑をおかけすることはないか、ということでした。貴信を拝見して、安堵いたし、それにある種の感動を覚えている次第であります。
私は宮沢様のことを警察記録などのなかに発見し、一番心を痛めたのは、１９４３年、そのとき私は高校生でしたが、あの戦争が苛烈になったときに懲役１５年という気の遠くなるような判決の確定により、下獄していった時の宮沢さんのお気持ちでした。どうしてこんな重い刑が科せられたのか、その解明をしてみよう、ということでした。しかし、私は結局そのことに成功しませんでした。一審判決がないからです。大審院判決はみつかりましたし、それには重大な問題がありますことは、拙著に書いた通りでありますが、大審院判決の登載された判例集には、大審院で問題になった論点に関係する一審判決の一部分しか引用されておらず、宮沢さんの罪に問われた行為の一部分しかわからなかったからであります。その一部分の一審判決から推認できることは、行為としては、第一が軍機の探知、第二、第三が軍機の漏洩で（以上、大項目）、第一には（一）から（三）まであり（以上、中項目）、その（一）には（イ）から（ハ）までの２項目、（二）には（イ）、（ロ）の二項目、（三）には（イ）から（ト）までの７項目があること（以上、小項目）、第二は第一で「探知」したことをレーン夫妻に語ったことが「漏洩」とされていること、第三の内容は不明であること、などであります。藪下氏の今度の斎藤忠雄氏に対する取材によれば、例の根室のこと以外はもっと些細なことであった、ということのようでありますが、詳細は判明致しません。
実は訴訟記録は、札幌地検にあるかも知れないのです。もう保存期間をとっくに過ぎていますから、廃棄されたと考える方が妥当ですが、しかし何かの都合で廃棄されていない可能性もない、とはいいきれません。いつか便を得て札幌にいくときは、地検を訪ねて調べるつもりで、その際は結果を必ずお知らせいたします。
目下、国家秘密法問題で次の著作にかかっており、それにも宮沢さんのことをとりあげておりますが、しかし前著の枠をでるものではありません。
もう一度、貴信にお礼をいわせていただきます。有難うございました。

〔左図〕V-02　上田誠吉に宛てた秋間浩の手紙（3枚目、1986年11月9日）
〔右図〕V-03　秋間浩に宛てた上田誠吉の返信控え（1986年11月20日）



市民集会に参加して

7月9日の市民集会で証言させて戴いて

秋間　美江子

秋間美江子さん（提供：朝日新聞社）

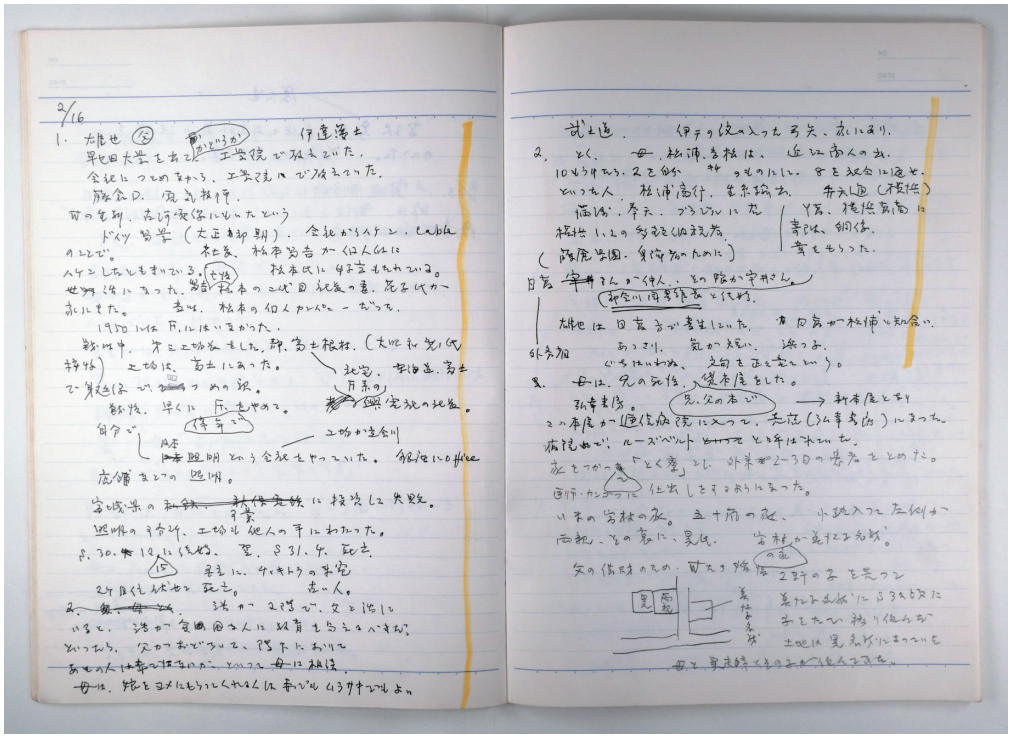
私の兄宮澤弘幸の事件を宮澤事件として大きく取上げて七月九日に市民集会を開かれた事、そして私の体験を札幌市民の皆様にお話しする機会を与えて下さいましたことと、改めてお礼を申し上げます。

七月六日の朝に家を出て、一路、一番の飛行機で羽田空港へ着きました。七時の午後八時頃だったと覚えています。そこに鴛路氏と高橋氏の出迎えを受け、札幌市内の厚生年金会館へ向かいました。その出会いの時、勿論私は初めてこの方々にお会いしたのですが若さと言うのか、いや全く、若さと言うべきではなく（何故なら年令に関係ないから）、燃えている人間、常に何かを発散させている本当に生きている人間に出会ったと思いました。

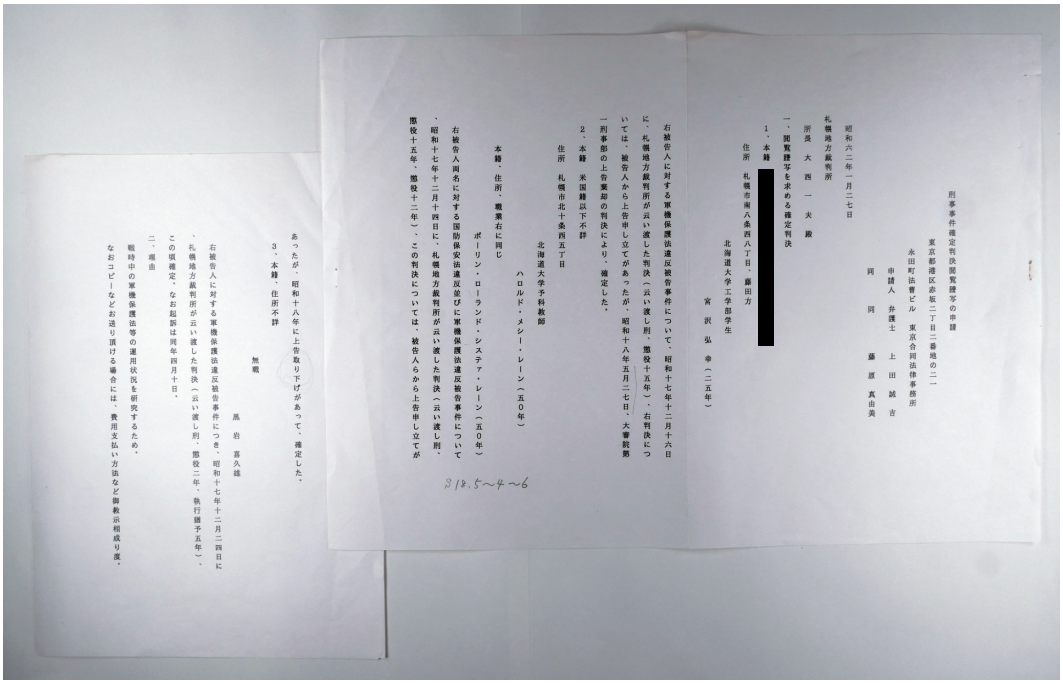
その翌日になって、この二人に限らず札幌弁護士会の方々が九日の集会のために情熱をもって働いておられるのを知り、本当に驚きました。集会の企画、調査、スライドの編集、証人の選定、リハーサル、マスコミへの情報提供、市民への参加呼掛け、参加者へ配布すべき資料及びアンケートの作成、更には会場が満員になった場合にそなえる対策に至るまで、全く驚くばかりの準備ができておりました。そのような皆様のご努力が実って、集会は大成功だったと思います。本当に素晴らしい集会だったと思います。その集会で証言し私がそう言うのはおかしいかも知れませんが、それが私の率直な感想です。

それから御免なさい。もしもも、どんな勝手なことを言うのを許して戴けるものなら……あの集会の間、というより札幌滞在中に、どなたかの奥様が私へのコンパニオンとして出ていてくださったならば、私はぜいたくな満たされた気分になったと思います。女性には男性の分らない〈本当は分ってもらいたい〉ことがあるのです。この次に何時かまた札幌弁護士会がセミナーを開かれる時は、どなたかの奥様をもって表面に出されてはいかがでしょうか、そんな事も感じました。

札幌弁護士会の皆様、本当に有難うございました。素晴らしい集会を開いて下さいましたこと、コロラド州ボウルダーでの宮澤事件の真実を訴える集会に参加するに当り、皆様の暖かいご支援を頂いたことと、コロラドに出発する前に、皆様からお祝いの言葉を頂いたことと、コロラドに着いてからも、皆様からお祝いの電報



V-06　上田誠吉ノート「宮沢事件研究」（1987年1-4月）



刑事事件確定判決閲覧謄写の申請

東京都港区赤坂二丁目二番地の二
永田町法曹ビル　東京合同法律事務所
申請人　弁護士　上田誠吉
同　同　藤原真由美

昭和六二年一月二七日

札幌地方裁判所
所長　大西一夫　殿

一、閲覧謄写を求める確定判決
1、本籍　[redacted]
住所　札幌市南八条西四丁目、藤田方
北海道大学工学部学生
宮沢弘幸（二五年）

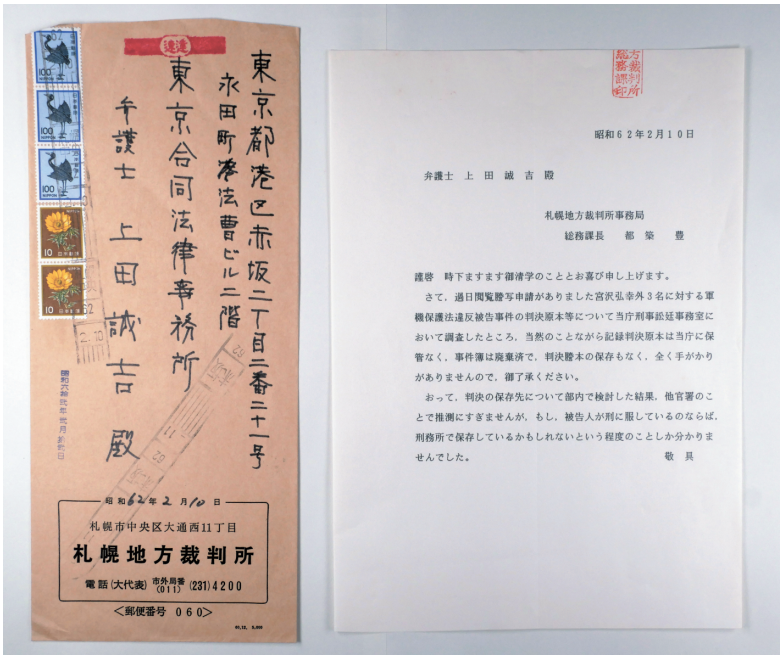
右被告人に対する軍機保護法違反被告事件について、昭和十七年十二月十六日に、札幌地方裁判所が云い渡した判決（云い渡し刑、懲役十五年）、右判決については、被告人から上告申し立てがあったが、昭和十八年五月二七日、大審院第一刑事部の上告棄却の判決により、確定した。
2、本籍　米国籍以下不詳
住所　札幌市北十条西五丁目
北海道大学予科教師
ハロルド・メシー・レーン（五〇年）

右被告人両名に対する国防保安法違反及び軍機保護法違反被告事件について、昭和十七年十二月十四日に、札幌地方裁判所が云い渡した判決（云い渡し刑、懲役十五年、懲役十二年）、この判決については、被告人から上告申し立てがあったが、昭和十八年に上告取り下げがあって、確定した。
3、本籍、住所不詳
無職　黒岩喜久雄

右被告人に対する軍機保護法違反被告事件につき、昭和十七年十二月二四日に、札幌地方裁判所が云い渡した判決（云い渡し刑、懲役二年、執行猶予五年）、この判決確定、なお起訴は同年四月十日。
二、理由
戦時中の軍機保護法等の運用状況を研究するため、なおコピーなどお送り頂ける場合には、費用支払い方法など御教示相成り度、

312.5~4~6

V-07　札幌地方裁判所宛て刑事事件確定判決閲覧謄写申請の控え（1987年１月27日）



Ⅴ−08　札幌地方裁判所からの返信（1987年２月10日）



Ⅴ−09　上田誠吉『ある北大生の受難　国家秘密法の爪痕』（1987年）



Ⅴ−10　上田誠吉『人間の絆を求めて　国家秘密法の周辺』（1988年）

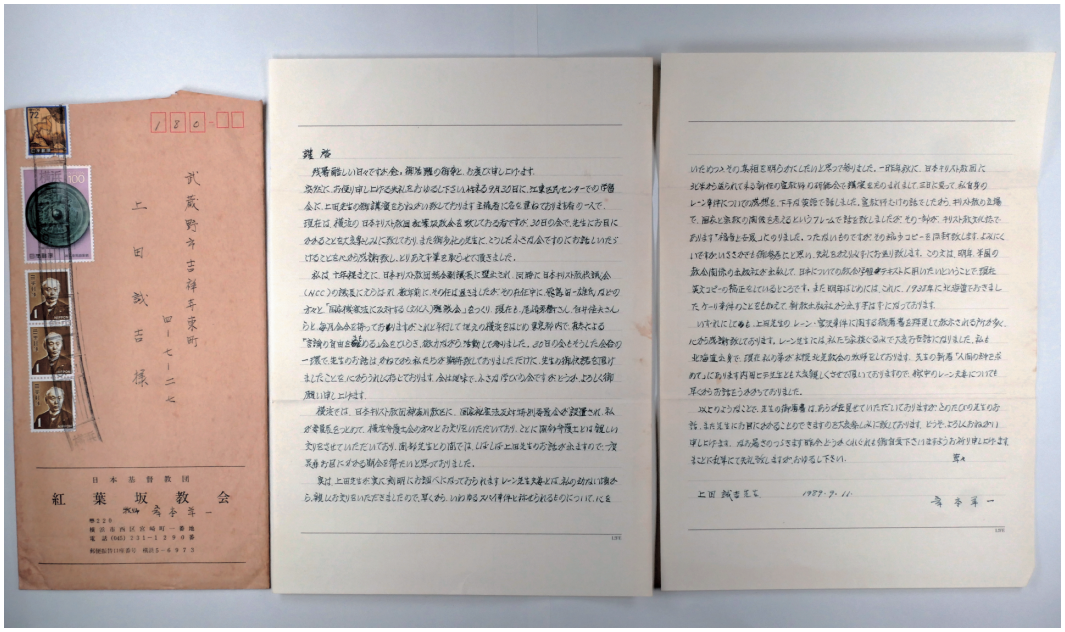


V-11　ラジオ番組リーフレット「落合恵子のちょっと待って MONDAY」№25（1988年９月22日）





〔左図〕V-12　ビデオ『レーン・宮澤事件　もうひとつの12月８日』（1993年12月）
〔右図〕V-13　岸本羊一『スキャンダラスな人びと　レーン夫妻スパイ事件と私たち』（1991年）



V−14　上田誠吉に宛てた岸本羊一の手紙（1989年９月11、21日）

(2) 北海道大学の取り組み





〔左図〕V−15　論考、資料調査報告、寄贈資料目録を掲載した『北海道大学大学文書館年報』
〔右図〕V−16　宮澤記念賞賞状



V−17　レーン記念賞・宮澤記念賞の授与式を報じる『北大時報』(2015年)

(3) 市民の視点から問い直す



V−18　「北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会」の刊行物



V−19 「宮澤・レーン事件を考える会」の刊行物



V−20 「構成劇と講演のつどい」（2016年12月11日）の脚本とＤＶＤ